

野芥遺跡8

—野芥遺跡第19次調査報告—

2022

福岡市教育委員会

の
け
野 芥 遺 跡 8

— 野芥遺跡第19次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1447集



調査番号 1965
遺跡略号 NKE-19

2 0 2 2

福岡市教育委員会



1 1区全景 南から



2 2区全景 南から



3 3区全景 南から



4 SR005、006
北から



5 SK040 南から



6 1号墳石室
東から



7 西壁土層
SX065、067付近



8 1区上面 南西から



9 SD001 北西から



10 SC022炉1・2土層 南西から



11 SX065 南東から



12 SC019 北から



13 SX081 北から



14 SR009西土坑砂鉄 北から



15 SD001 北西から



16 1号墳石室出土 ガラス小玉 703



17 1号墳石室出土 ガラス小玉 703

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は宅地造成、住宅建設工事に伴う野芥遺跡第19次調査について報告するものです。調査では古墳時代後期の集落と古墳、奈良時代の製鉄跡、平安時代の集落などを確認し、縄文時代以降の多くの遺物が出土しました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、株式会社石田屋様をはじめとする関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　言

1. 本書は宅地造成、住宅建設にともない実施した野芥遺跡第19次調査の報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて座標北で、座標は世界測地系による。
3. 検出遺構には検出順に3桁、4桁の連番号を与え、性格を示す記号として、SC（堅穴建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SR（製鉄関連遺構）、SP（ピット）を頭に付した。
4. 掲載した遺物の番号は通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
5. 本書に掲載した遺構図は池田祐司が作成した。
6. 本書に掲載した遺物の実測図は1号墳、SK039、040について熊塙御堂和香子、野口聰子が、他は池田が作成した。
7. 本書に掲載した挿図の製図は井上加代子、大庭友子、熊塙御堂、池田が行った。
8. 本書に掲載した写真はガラス小玉のマイクロスコープ写真を埋蔵文化財センターの藤崎彩乃が、他を池田が撮影した
9. 本書の執筆はIV-2を山本晃平が、附編を藤崎が担当し、他を池田が行った。
10. 本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。

遺跡名	野芥遺跡	調査次数	19次	調査略号	NKE-19
調査番号	1965	分布地図図幅名	重留 84	遺跡登録番号	319
申請面積	1831.49m ²	調査対象面積	1831.49 m ²	調査面積	1385.5m ²
調査期間	2020年3月16日～2020年9月23日			事前番号	2019-2-309
調査地	福岡市早良区五丁目387番1,388番3,388番15				

本文 目 次

Iはじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の組織	1
II立地と周辺の調査	1
III調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 調査工程	5
3 層位	6
4 上面の調査	10
(1)溝	12
(2)製鉄関連遺構	25
(3)土坑等	29
5 下面の調査	40
(1)堅穴建物	42
(2)大型土坑	63
(3)掘立柱建物	65
(4)土坑等	70
(5)古墳	78
(6)ピット等出土物	84
(7)そのほかの遺物	85
(8)縄文時代・弥生時代の土器	87
(9)剥片石器	89
IVおわりに	
1 遺構遺物の変遷	92
2 出土鉄滓に関して	94
附編 野芥遺跡19次調査出土ガラス小玉の保存科学的調査について	95

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図 (1/25000)	2	図7 下面遺構配置図 (1/300)	9
図2 調査地点位置図 (1/4000)	2	図8 上面遺構配置図：北半 (1/200)	10
図3 調査区付近空中写真 (昭和30年代)	3	図9 上面遺構配置図：南半 (1/200)	11
図4 調査区位置図 (1/600)	4	図10 SD001 断面図 (1/80)	11
図5 北壁土層図 (1/60)	6	図11 SD0011区出土遺物実測図1 (1/3)	13
図6 上面遺構配置図 (1/300)	8	図12 SD0011区出土遺物実測図2 (1/3)	14

図 13 SD0011区出土遺物実測図 3 (1/3)	15
図 14 SD0013-1区出土遺物実測図 1 (1/3)	16
図 15 SD0013-1区出土遺物実測図 2 (1/3)	17
図 16 SD0013-2~6区出土遺物実測図 1 (1/3)	18
図 17 SD0013-2~6区出土遺物実測図 2 (1/3)	19
図 18 SD0013-2~6区出土遺物実測図 3 (1/3・1/2)	20
図 19 SD001 出土瓦実測図 (1/4)	21
図 20 溝実測図 (1/80)	23
図 21 SD003、017、098 出土遺物実測図 (1/3)	24
図 22 SR005・006 実測図 (1/40)	26
図 23 SR009・010 実測図 (1/40)	27
図 24 SR005-006-009-010 出土遺物実測図 (1/3)	28
図 25 SX097. 出土遺物実測図 (1/60、1/3)	29
図 26 上面土坑実測図 1 (1/40)	30
図 27 上面土坑出土遺物実測図 1 (1/3)	31
図 28 上面土坑出土遺物実測図 2 (1/3)	32
図 29 SX040 実測図 (1/30)	34
図 30 SX040 出土遺物実測図 1 (1/3)	35
図 31 SX040 出土遺物実測図 2 (1/3)	36
図 32 SX050・051. 出土遺物実測図 (1/30・1/3)	37
図 33 SX051 出土遺物実測図 (1/3)	38
図 34 上面ピット出土遺物実測図 (1/3)	39
図 35 下面構置配置図：北半 (1/200)	40
図 36 下面構置配置図：南半 (1/200)	41
図 37 SC019. 出土遺物実測図 (1/60、1/3)	43
図 38 SC018、SC030 実測図 (1/60)	44
図 39 SC018-SC030 出土遺物実測図 (1/3)	45
図 40 SC020. 出土遺物実測図 (1/60、1/3)	46
図 41 SC021 実測図 (1/60)	47
図 42 SC021 カマド実測図 (1/40)	48
図 43 SC021 出土遺物実測図 1 (1/3)	49
図 44 SC021 出土遺物実測図 2 (1/3)	50
図 45 SC022 実測図 (1/60、1/40)	51
図 46 SC022 出土遺物実測図 (1/3)	52
図 47 SC053. 出土遺物実測図 (1/60、1/3、1/2)	53
図 48 SC059、SC060. 西壁土層実測図 (1/60)	54
図 49 SX065、SX067 実測図 (1/40)	55
図 50 SC059-060、SX065 出土遺物実測図 (1/3)	56
図 51 SC062. 出土遺物実測図 (1/60、1/3)	58
図 52 SC072 実測図 (1/60、1/40)	59
図 53 SC072 出土遺物実測図 1 (1/3)	60
図 54 SC072 出土遺物実測図 2 (1/3)	61
図 55 SC100. 出土遺物実測図 (1/60、1/3)	62
図 56 SC105. 出土遺物実測図 (1/60、1/3)	63
図 57 SK054、061、079、106 実測図 (1/60)	64
図 58 SK061、079、106 出土遺物実測図 (1/2、1/3)	65
図 59 SB034、110 実測図 (1/60)	66
図 60 SB115、116 実測図 (1/60)	67
図 61 SB111、117、091 実測図 (1/60)	68
図 62 SB034、110、111、115 実測図 (1/3、1/2)	69
図 63 下層土坑実測図 1 (1/40、1/60)	71
図 64 SK014、016、026、1103 出土遺物実測図 (1/3)	72
図 65 SK027 出土遺物実測図 (1/3)	73
図 66 下層土坑実測図 2 (1/40)	74
図 67 下層土坑出土遺物実測図 (1/3)	75
図 68 SK073、109 実測図 (1/40)	76
図 69 SK073 出土遺物実測図 (1/3、1/2)	77
図 70 1号埴室実測図 (1/100、1/60)	79
図 71 1号埴周溝出土遺物実測図 (1/3)	80
図 72 1号埴石室実測図 (1/40、1/30)	81
図 73 1号埴石室出土遺物実測図 (1/3)	82
図 74 1号埴石室出土遺物実測図 (1/3、1/1)	83
図 75 2号埴室実測図 (1/100、1/60)	85
図 76 2号埴周溝出土遺物実測図 1 (1/2、1/3、1/4)	86
図 77 2号埴周溝出土遺物実測図 2 (1/4)	87
図 78 上層ピット出土遺物実測図 (1/3)	79
図 79 そのほかの遺物実測図 (1/3、1/2)	79
図 80 繩文土器、弥生土器実測図 (1/3)	90
図 81 剥片石器実測図 (3/4)	91
図 82 調査地点位置図 (1/4000) 昭和 30 年代	92

I はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、早良区野芥5丁目387番1ほかにおける宅地開発に伴う埋蔵文化財の有無の照会を令和元（2019）年6月19日付けで受理した（2019-2-309）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である野芥遺跡の範囲であり、令和元年7月17日に確認調査を実施し地表下80～120cmで遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課は申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取扱いについて協議を行った。その結果、遺構面までの盛土が2mを越える部分があり、さらに予定建築物の基礎の杭工事による遺構への影響が避けられないため、令和元、2年度に発掘調査、同3年度に整理・報告を行い、記録保存を図ることで合意し委託契約を締結した。対象地は申請地全域の1831.49m²である。

発掘調査は令和元（2019）年3月16日から同9月23日に実施した（調査番号1965）。調査面積は1385.5m²で、遺物はコンテナケース90箱分が出土した。

2 発掘調査の組織

調査委託 株式会社石田屋

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波正人

調査第1係長 吉武 学

庶務担当 文化財活用部文化財活用課

松原加奈枝

事前審査 文化財活用部埋蔵文化財課

田上勇一郎 山本晃平

調査担当 文化財活用部埋蔵文化財課

池田祐司

II 立地と周辺の調査

野芥遺跡は油山山塊から北西へ樹枝状に派生する丘陵から砂礫台地上に立地する。その範囲は南北1600m、東西300m、標高14mから39mに広がり、山裾から末端は沖積平野に面する。旧石器時代から中近世にかけての遺跡である。周辺には谷を挟んだ丘陵上に分布する梅林遺跡、クエゾノ遺跡、飯倉G遺跡、岩隈遺跡が同様の立地にあり、沖積平野には野芥大藪遺跡、免遺跡が連なる。さらに南東側の油山裾には山崎古墳群、霧ヶ滝古墳群、影塚古墳群、西油山古墳群などの多数の群集墳が広がっている。

今回の調査地点は野芥遺跡の南端部の丘陵上に広がる土石流段丘に位置し、標高29mほどの緩斜面である。東側は中位段丘に接し10mほどの比高差がある。いわゆる丘陵の裾で、丘陵に沿って流路が走る。南側には狭い谷が入りその上流には前田池がある。

野芥遺跡ではこれまでに23次（令和3年末現在）の発掘調査が行われ、旧石器時代から近世の遺跡が知られている。本調査地点に関わる成果について周辺遺跡を含めて簡単に触れておく。旧石器

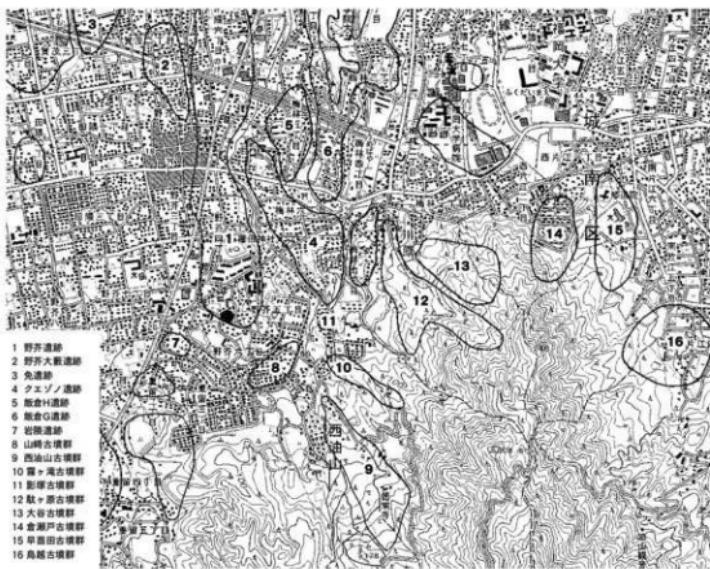


図1 遺跡位置図（1/25000）国土地理院2.5万分1地形図を加工して作成

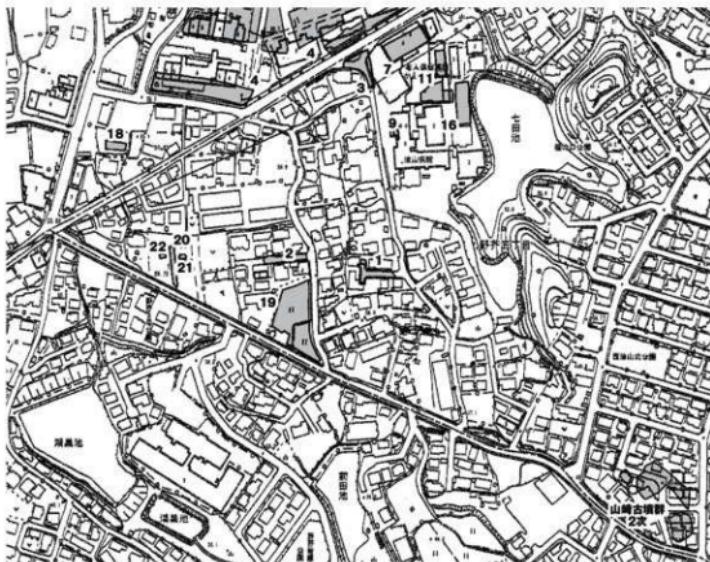


図2 調査地点位置図（1/4000）



図3 調査区付近空中写真（昭和30年代）

時代では4、7、11次調査でナイフ形石器、角錐状石器、細石器などが出土し、7、11次では比較的まとまった遺構状、包含層が確認されている。縄文時代はまとまった出土はないが、各地点で土器片や石鏃などがみられる。そのなかで7次調査では草創期の可能性が指摘され、1次、山崎古墳群2次で晩期、刻目突帯文の小片が出土し、11次では石鏃、石匙などのやまとった石器が報告されている。弥生時代は4、7次で中期の遺構、遺物が報告されるが少ない。南に小谷を二つ隔てた丘陵上の岩隈遺跡では壺棺墓群が出土している。古墳時代では6世紀末から7世紀初めにかけての堅穴建物が1、2、4、20次調査で出土し一帯に集落が営まれている。この時期には油山裾の古墳群が造営される。

さらに山崎古墳群2次では7世紀後半の土壙墓が確認されている。古代では、詳細な時期の報告がないが4次調査で出土した大型建物群について官衙的な様相が指摘され、円面硯や刻字須恵器が出士している。野芥は「和名抄」記載の能解郷の遺称とする説もある。中世前半は4、7次で遺物の報告はあるが少なく、山崎古墳群2次で溝、土壙墓が出土している。また西油山山麓の天福寺跡では11世紀には経塚が営まれ、12世紀には天福寺の隆盛を向かえる。天福寺は本調査地南の谷筋から稻塚川の谷の上流にあたる。

III 調査の記録

1. 調査の概要

本調査地点は山裾の緩斜面が丘陵に接する地形であり、南は小谷で区切られる。現在、東側の丘陵との境に道路と水路、南側には油山方面へ延びる道路が走る。現況は住宅化が進む中に残った水田で、田面は南東約1/4の区画が段を成して高く、西、北側との差が70cmほどある。東側の道路とは80~100cmほどの比高差があり、南側道路とは対象地南端で同レベルとなる。西、北側は盛り土造成された宅地である。調査区内の標高は29.8mから30.5mである。

調査は北側から掘削し、廃土処理の都合から大きく3転して行い、反転の区画を便宜的に1~3区とした。遺構面は試掘で確認したGL-80から120cmの黄褐色・黃白色砂質土までを重機を用いて北東端から掘削を開始したが、

4、5mほど広げた時点でGL-70mほどの深さでピット、焼土を確認し、上面として調査を行った。上面として調査を行った範囲は1区、2区の北側である（図4）。

3区を中心とした南側は下面の標高が上がり（図7）上面がのる5、6層が広がっても薄く1面での調査である。1、2区南側では遺構が見当たらず、また時間的制約から上面での確認を行っていない。また下面までの掘削は重機を用いた。調査区の周囲は、周辺との高低差、ブロック壁などからの安全を考慮し1m以上引いて設定し、法面に安全な勾配を保った。また南西隅の進入路については調査を実施できていない。

検出遺構

上面 12世紀初め 土坑(瓦器
椀集中等)溝 ピット群

8世紀 河川001 製鉄炉4基
土坑

下面 古墳2基(6世紀中頃)
堅穴建物12基(6世紀後半から7
世紀)掘立柱建物7基+a 土坑

上面では土坑、瓦器を含むピット
などを検出し、これらが乗る灰



図4 調査区位置図 (1/600)

褐色土を除去して、いわゆる鉄アレイ型の製鉄炉4基を確認した。調査区東端には鉄滓が多く出土する8世紀を主とする河川SD001が流れ、製鉄炉と近い時期と考えられる。

下面是主に6世紀後半から7世紀の竪穴建物と縦柱建物から構成される集落跡である。遺構面は南側端が29.8mと最も高く尾根状の頂部にあたり、北西に向かって下がる。南端部では2基の古墳の周溝を検出し、1号墳では主体部の一部を確認した。Ⅲa期の須恵器がまとまって出土し、山裾の群集墳よりやや古い古墳が緩やかな尾根上に築かれた様子がうかがえる。また、多数の大型のピットを検出したが確認できた建物は少ない。特に調査区北西端、中央北よりのSC072周辺にピットが集まるが、建物として展開しない。遺構検出にあたっては、地山の色が変わった部分が多く困難があった。以下では国土座標に合わせて設定した10mグリッド(図6、7)で遺構等の位置をA1のように示す。

遺物は各遺構から6世紀から8世紀、12世紀の土器、鉄器を主とした出土があった。特にSD001からの出土が多く、少量ながら瓦も出土している。この他に縄文時代の土器、石器が各所で出土した。土器では轟B式、黒色磨研土器、刻目突帯文土器などがある。石器は石鏃、石匙をはじめとする製品が目立ち、姫島産と考えられる黒曜石がみられる。

2. 調査工程

現地では調査区南西の一画にパラス敷きの駐車場と進入口、休憩所が設置された。令和2年3月16日に重機による表土剥ぎを開始し17日から作業員による1区上面遺構の検出、掘削を始めた。3月31日に中世遺構の全景撮影を行い、製鉄遺構の調査に着手した。4月15日には重機による遺構面の掘削を行い1区全体が下面となった。下面是竪穴建物等の土量があり、また遺構検出にも手間取るが、好天に恵まれ5月8日に高所作業車での1区全景の撮影に至った。

5月14日に重機による反転作業を開始し、北側1/2は焼土、ピットを確認した暗褐色土の面を2区上面とした。2区では上面の範囲から遺構掘削を行い、5月26日に上面全景の撮影、6月1日に重機による下面までの掘削を行った。下面では特に西壁際の遺構検出に手間取り、また熱中症に注意しながらの調査であった。2区全体の掘削に目途が付きかけた6月後半から7月中旬までの1ヶ月は連日の雨で調査区が水没する日々が続いた。7月22日に高所作業車で2区下面の全景撮影を行った。

30日から1号墳主体部を残して重機による2区の埋め戻しと3区の表土剥ぎを行った。1号墳では対象地際までを手掘りで拡張し、主体部を可能な範囲で調査した。3区では2号墳の周溝がユニットハウス、駐車場部分まで広がることが判明し、3区の調査がある程度進んだ8月28日に高所作業車による全景写真撮影の後、9月3日にユニットハウスを撤去し、4日に3区を拡張し2号墳の周溝の全体を確認した。その後、遺構の追加掘削を行い9月19、20日に埋め戻し、23日までに撤収した。長雨、熱中症、台風、感染症covid-19への対応に配慮、苦慮しながらの調査であった。

9月5日土曜には9時過ぎから野芥小学校6年生の見学があり、出土した遺構、遺物の説明を行った。午後からは地元向けの見学会を催した。現場周辺の掲示のみでの案内で当日の参加は多くなかったが、その後も資料を配布し多数の方々が持ち帰っていた。また調査中、周辺の住民・歩行者の方々からは遺跡の内容等について多くの声をかけていただいた。

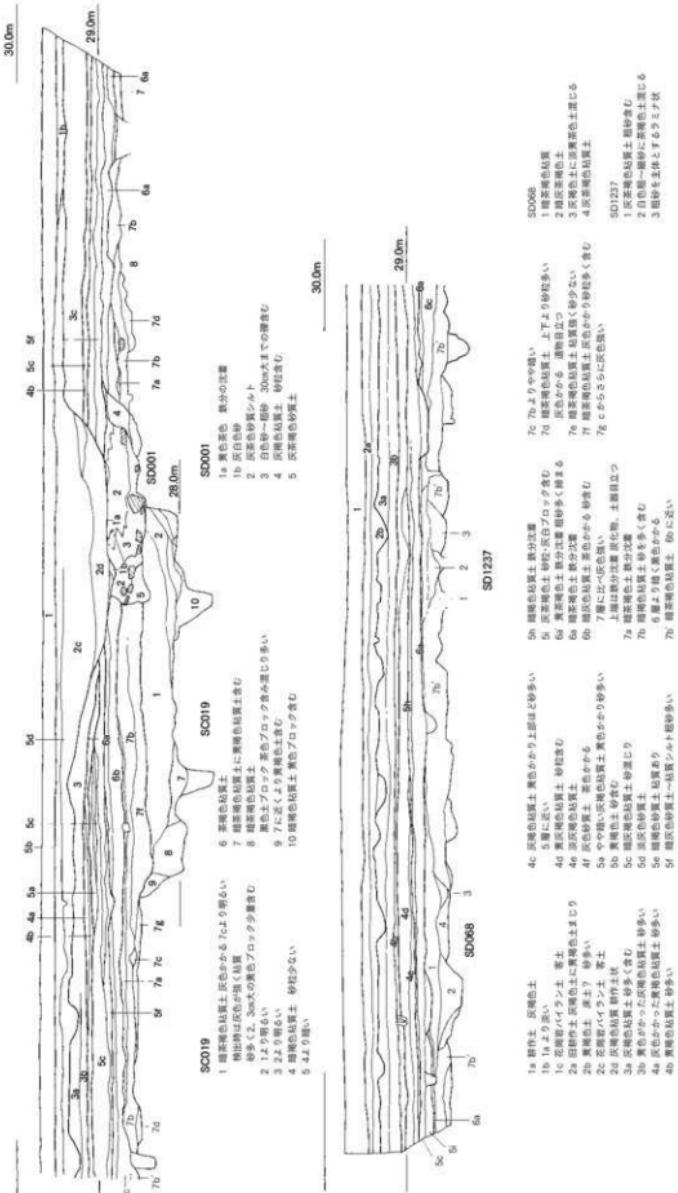


図5 北壁土層図 (1/60)

3. 層位

上下2面の調査を行ったこともあり、遺構検出面の把握、周辺壁の土層の記録に努めた。当初から層位の基準とした北壁の土層を図5に示した。この他は関連する遺構の図に付している。東壁の北端からSC018部分まで作成し図38と45に示した。西壁は図48、51と70に分けているが連続してつなげることができる。以下には北壁を中心とした所見を記す。

1層：現在の水田耕作土で1c層に花崗岩バイラン土を挟む。

2層：灰褐色土に黄色土が混じる旧耕作土と床土で1、2区の全域に見られる。

3層：灰褐色粘質土で旧耕作土

4層：黄色が強く、北壁から西壁で目立つ。

5層：6層との間に灰色から暗褐色の砂混じりの粘質土を主とする層がみられ、北壁では黄色が強い層を挟むなど、細かく分かれ。東壁では5g層とした暗灰褐色の5c層が続き、4a層との間に挟まる粘質が強い灰黄褐色土を4d、4e層、6a層と類似する暗茶色の鉄分沈着層を5h層とした。6a層が西へ下がるに従って西へ下がる。5層は雑多な層をまとめた感があるが、4層以上のように安定した水田を営んだ面ではなく、耕作層を含むとしても短いものと考えられる。また南側ではその広がりも薄く平面的にとらえにくい。今回の調査で1区上面として最初に確認した瓦器を含むピット群は、標高29.06mの薄い灰色かった黄褐色、灰色土層上で確認しており、北壁の5b、5c層上面にあたると考えられる。そして、これらを除去した標高29.0m前後の6層上面で製鉄跡を確認した。5層の各層は薄く、北壁との間には重機で下面近くまで下げた区間があるため、土層と明確に対応できていない。また、鉄滓が多く出土したSD001は5g層が覆い、6層からの切り込みである。5層は遺構との切り合いから、8世紀以降12世紀初めまでの堆積と位置付けられよう。5g層は東側土層では安定して見られ、他の5層とは異質である。

6層・7層：暗褐色系の暗い色調の粘質土で6a層、7a層が鉄分またはマンガン分が沈着した暗褐色粘質土で明瞭に分かれ。6a層は広く1、2区の範囲に見られ、西壁では高まり状にある1号墳部分以外に広がる。7b層以下は6層よりも暗い。6a層下の暗灰褐色粘質の6c層は北壁東側では厚く堆積するが、西側は次第に薄くなり、また明瞭な7a層がなくなる中央部では東側よりやや淡くなつた7b層との区別がつかなくなる。中央より西を7b'とした。7、8層は断面および平面で土器片がみられ包含層である。2区の上面はおよそ6aから7b'層で遺構確認を行っている。下面の遺構は、北壁ではSC019に7層が被り、西壁ではSC059、062の埋土に6a層が被っている。下面の竪穴建物は6、7層堆積以前の所産である。ただし、7世紀代の遺物がまとめて出土したSX050、051は上面の6層と考えている面での確認であり、北、西壁土層から離れた位置では整合がとれおらず、把握できていない層関係があるものと思われる。

8層：6、7層を除去した黄白色から灰白色砂質土がほぼ全域に広がり、これを下面とした。ただしこの8層の上には茶褐色・黄褐色・黒褐色粘質土、暗褐色・灰褐色砂質土などがくぼみ、竪穴、溝、被り、シミ状に入り組みあっており一様でない。遺構検出、掘削は難しく、掘り過ぎた部分もあり、見落としもあるかと思われる。ただし、黄色粘質土には縄文土器を含むものもあるようで、3基を掘削し小片1が出土した。



图 6 上面造構配置図 (1/300)

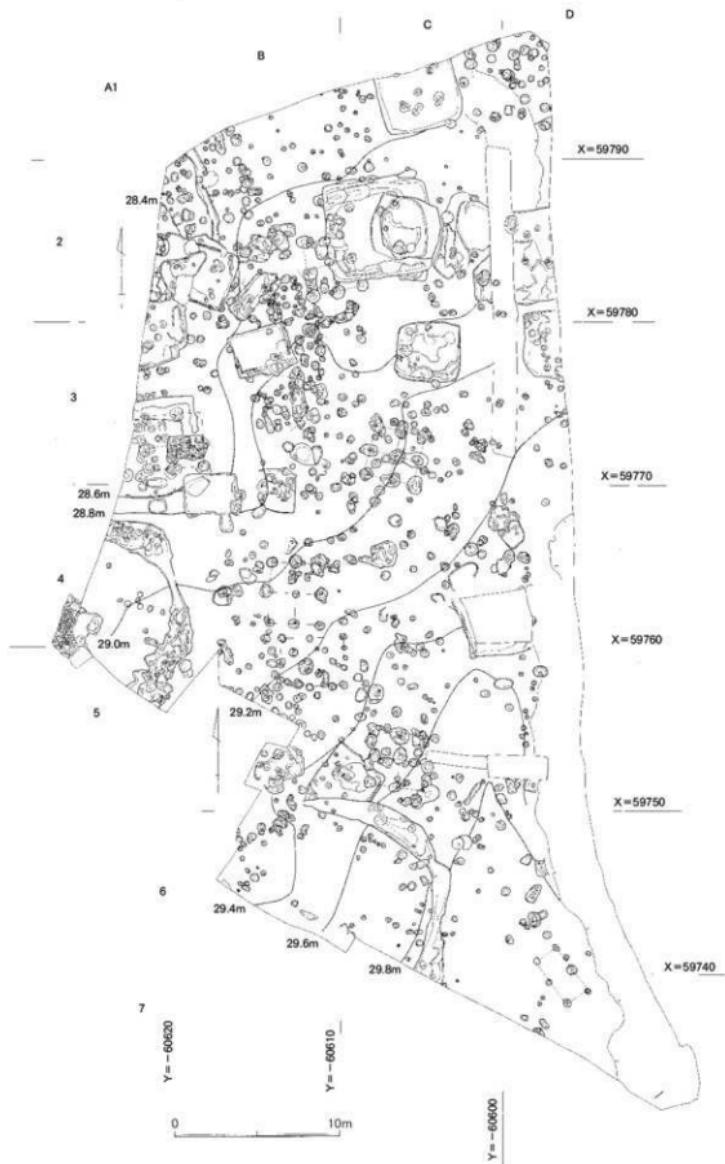
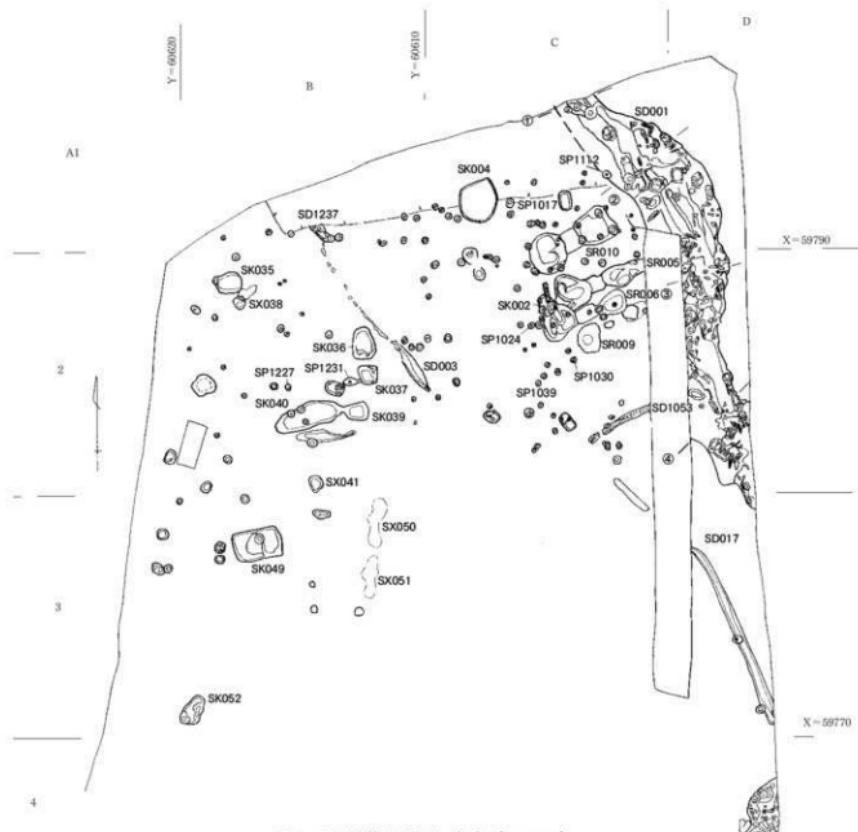


图7 下面遺構配置図 (1/300)

4 上面の調査

1、2区の北側の5層中に遺構を確認した時点で表土掘削を止め、上面として調査を行った。南側は5層の広がりがはっきりしなくなり、明確な遺構が見えなかった。調査範囲は表土掘削時に遺構を確認できた範囲である。1区では5層中に12世紀代のピットと溝、土坑を、さらに5層を下げる製鉄炉4基を確認した。製鉄炉検出面は6層上面に相当する。東壁沿いには5層より下から掘り込むSD001が調査区を出入りし北壁へ走る。SD001と製鉄炉連関遺構、溝について1面で調査を行った3区でも確認しており、上面遺構と一緒に報告する。2区も同様に5、6層で遺構を確認できた時点では上面とした。5層の広がりがはっきり確認できずほぼ6層での調査である。2区の西側では6・7層をやや下げたレベルでの遺構検出となった。遺構は1区と同様に瓦器が出土する土坑などを検出した。SK040は特に瓦器碗が集中して出土した。また、SX050、051では7世紀代の遺物がまとまって出土した。



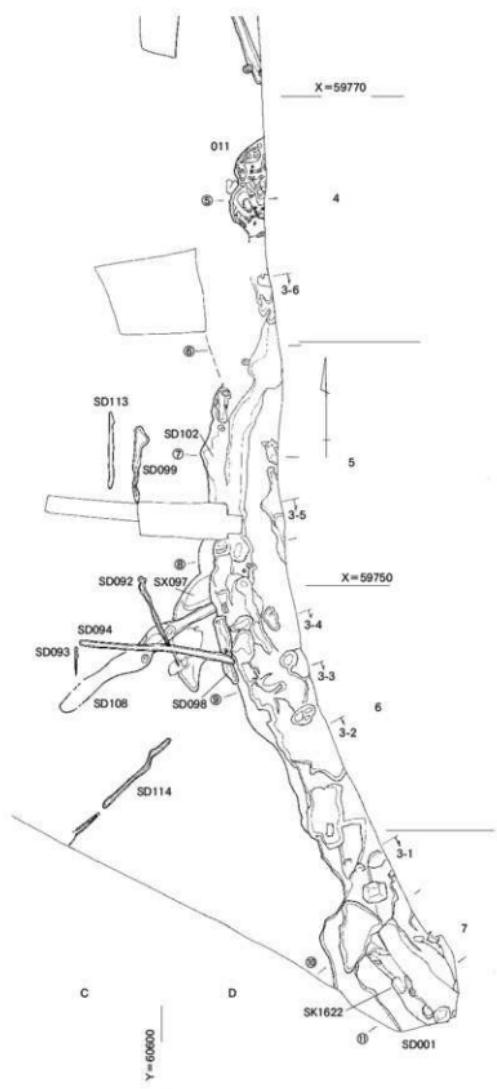


図9 上面造構配置図：南半（1/200）

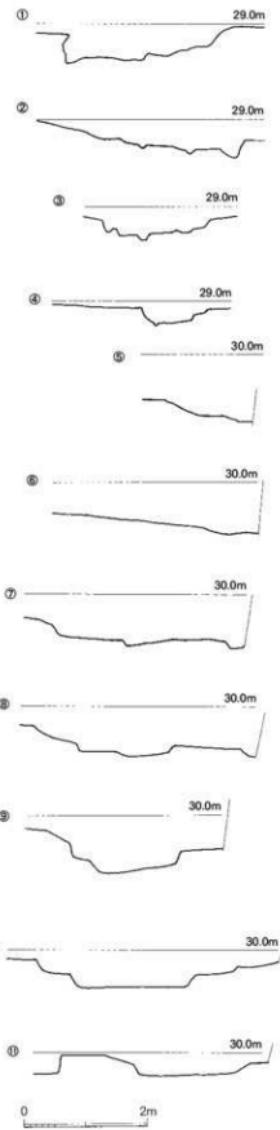


図10 SD001断面図（1/80）

(1) 溝

SD001 (図8～19) 調査区西壁を出入りし北西に流れる流路で埋土は灰白粗砂を主体とする。大きく1区のD1～D3、3区のD5～E7に分かれる。1区ではSC018付近から北壁の間に見られ豊穴建物群を切る。1区南側で011(D4)とした粗砂が堆積する落ちもSD001の一部であろう。3区では調査区南東端から緩やかに弧を描きながら南側で調査区外へ出る。出土遺物は各地点とも8世紀代を主体とし同一の流路と考えられるが、3区では土師器の壺、瓦などが出土しており時期幅を考慮する必要がある。流れ全体は東側の丘陵裾に沿うものであろう。3区は調査工程の都合上、最下部を残して重機で掘削したが、南端部(001-1から2の一部)では遺構面から手掘りで掘削した。この部分は粗砂の上に暗灰色の砂質土が堆積しさらに粗砂を埋土とする流れが切っていた。

掘削にあたっては、3区では図9のように大まかに1～6区に分けて遺物を取り上げ、3区001-1～6の記号を付けた。以下3-1～3-6と記載する。1区の遺物は001と注記している。

1区では流路の規模は北壁の土層で幅2.5m、深さ50cmで、埋土は底に灰白色粗砂、上位に灰茶色砂質シルト、壁際には粘質のシルトが堆積する。床には多くの小さな凹凸があり、鉄分の沈着がみられた。埋土の違いはあるが流れは1つである。3区では東側の肩が調査区外であり規模は不確かである。図10断面8では幅3.6m以上、深さ60cmでさらに東への落ちがみられる。南東端部の3-1区では幅2mと1mの2本の溝に分かれ、いずれも暗褐色砂質土の下に粗砂が堆積する。深さ40cmと浅く削平された感がある。底には抉れたくぼみが多く、3-3から3-6には西岸沿いに、3-5から3-6には東壁沿いに溝状のくぼみがあり曲がって東壁に入る。複数の流れがあったものと考えられる。横断土層を確認しておらず具体的なことは示せないが、この部分の東壁土層(巻頭写真9)では粗砂の不整合、暗灰褐色の砂質土の堆積などがあり、1回の流れではなく、流路を少しづつ振りながらある程度の期間流れていたことが想定される。3-6区西肩では暗灰色の砂質土が溜まる箇所がありSD102(D5)として遺物を取り上げた。図10の断面7に見える西側のテラス部分である。8世紀でも末から9世紀の壺が出土している。

調査区から北に14mの2次調査区では、南北に走る幅1.7m、深さ20cmの1号溝が検出されている(図4)。報告に記載はないが鉄滓が出土し、方向、規模、埋土、遺物の時期がSD001と同じで、1区からの延長と考えられる。

SD001の底の標高は、3区で南東端29.66m、北端29.14mで勾配1.79cm/m、1区は南端28.7m、北端28.42mで1.7cm/と勾配は近い。全体では3区南東端と1区北端間65mの比高差が126cmで、勾配は2.2cm/mとやや急な値になる。ここで気になるのが3区北端と1区南端の比高差で、10mの距離で44cmの差があり、勾配は4.4cm/mと倍以上の値となる。3区の流路と1区の流路では段差がある可能性がある。また規模にも違いがあり、3区が複数の時期の流れである中で、一時期1区の方向へ流れたか、途中で分流した可能性もある。1区では7世紀代の豊穴遺構を切り、5層が覆い8世紀の遺物を下限に埋没した8世紀を中心とする流路である。人為的に構築されたと考えるが、壁は緩やかで遺構らしくもない。SD001の時期、地形との関係については終わりに再度ふれたい。

出土遺物 8世紀代までの須恵器、土師器を中心とした土器類と鉄滓が出土した。また3区では丸瓦、平瓦片が少量出土しており、3-1区で目立つ。鉄滓は炉内滓、炉壁を中心に1区で75kg、3区で16kgが出土した。3区は上部を重機で掘削しており比較はできないが、底に多いことを考慮すると1区に多い。4基の製鉄遺構に近いことも反映しているであろう。3区ではSX097で鉄滓の集中があるが炉跡は確認できていない。削平されたか、上流や東岸に存在したとも考えられる。

1区

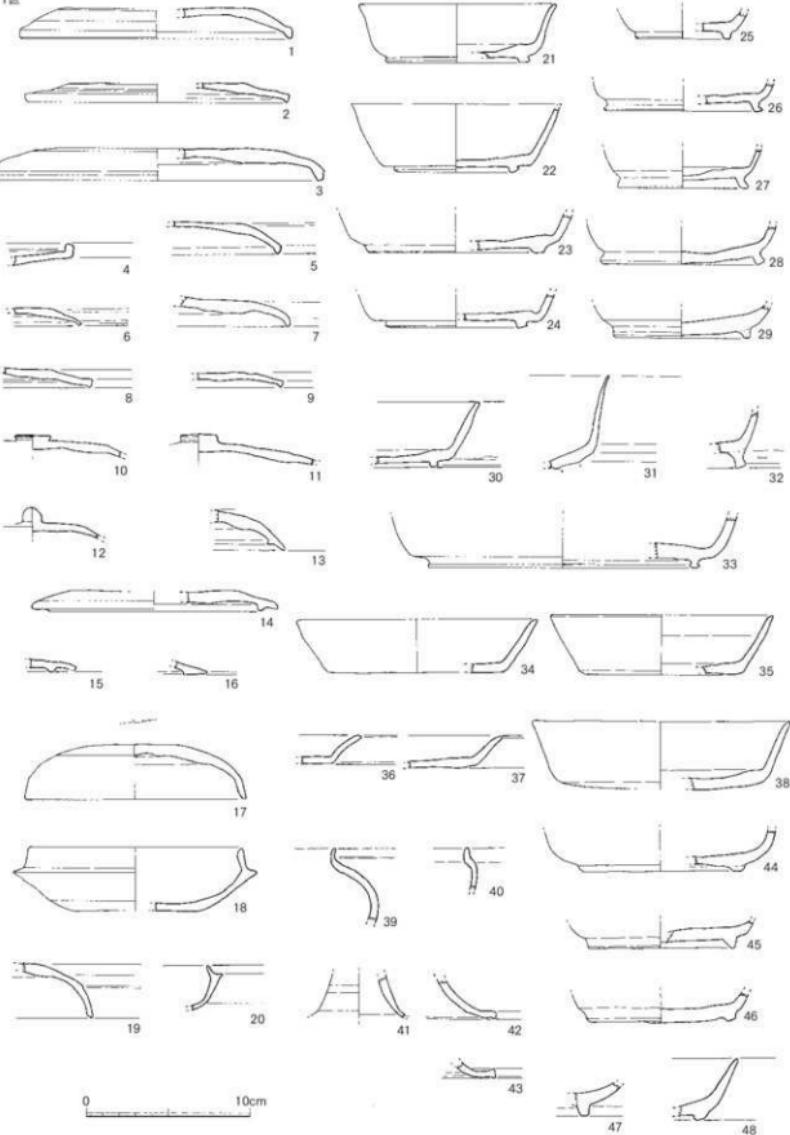


図11 SD0011区出土遺物実測図1 (1/3)

1区

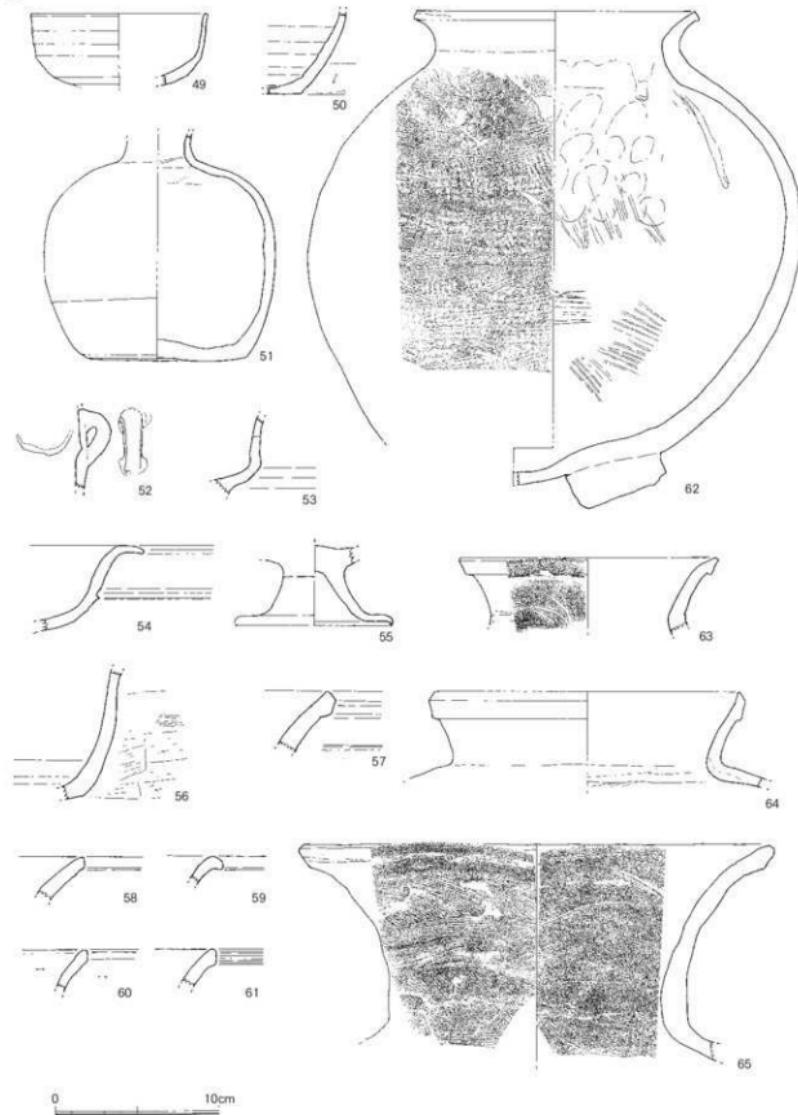
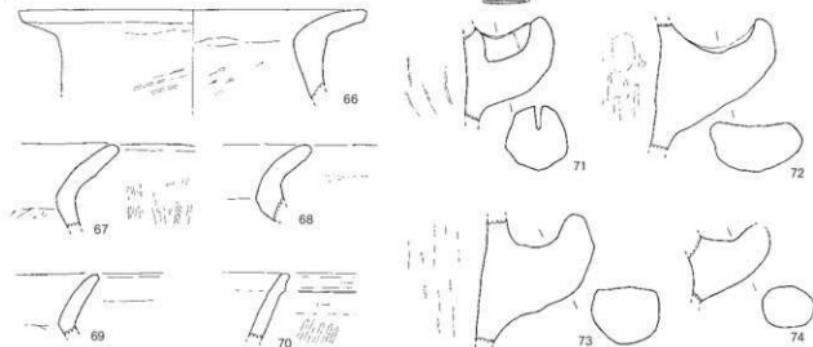
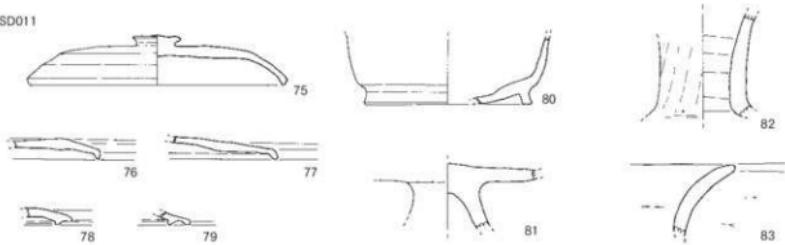


図12 SD001 1区出土遺物実測図2 (1/3)

1区



SD011



SD102



図13 SD001 1区出土遺物実測図3 (1/3)

以下1区、SD011、SD102、3-1区、3-2~6区、瓦等の順に出土遺物を示す。須恵器の坏が多く、他の器種についても形態の異なるもの、破片が大きなものをできるだけ示し、同じ形態のものは図化していないものも多い。須恵器には焼きが悪いものも多く、土師器との区别が付け難いものがしばしばある。全形が残るものは少なく、反転復元したものは少なくとも1/6以上が残る破片である。

図11から13は1区出土である。1から35は須恵器の坏身蓋で8世紀代の高台付の坏身と端部を屈曲させた蓋がほとんどである。その中で13から16のような返りを持つ蓋、17から20の7世紀前半までのものが混じる。33は高台のみ胎土の色が異なる。36、37は須恵器の皿。38は土師器の坏。39、40は須恵器の小壺片、41~43は高坏の脚部である。44から48は土師器または焼きの悪い須恵器の坏身。図12の49から65は須恵器の鉢、壺、高坏、壺である。51は成形がシャープで内面に顯著な回転なでがみられる。62は口縁部の一部のみが1区で他は3-1から3-5区の破片が接合し、復元的に作図

3-1区

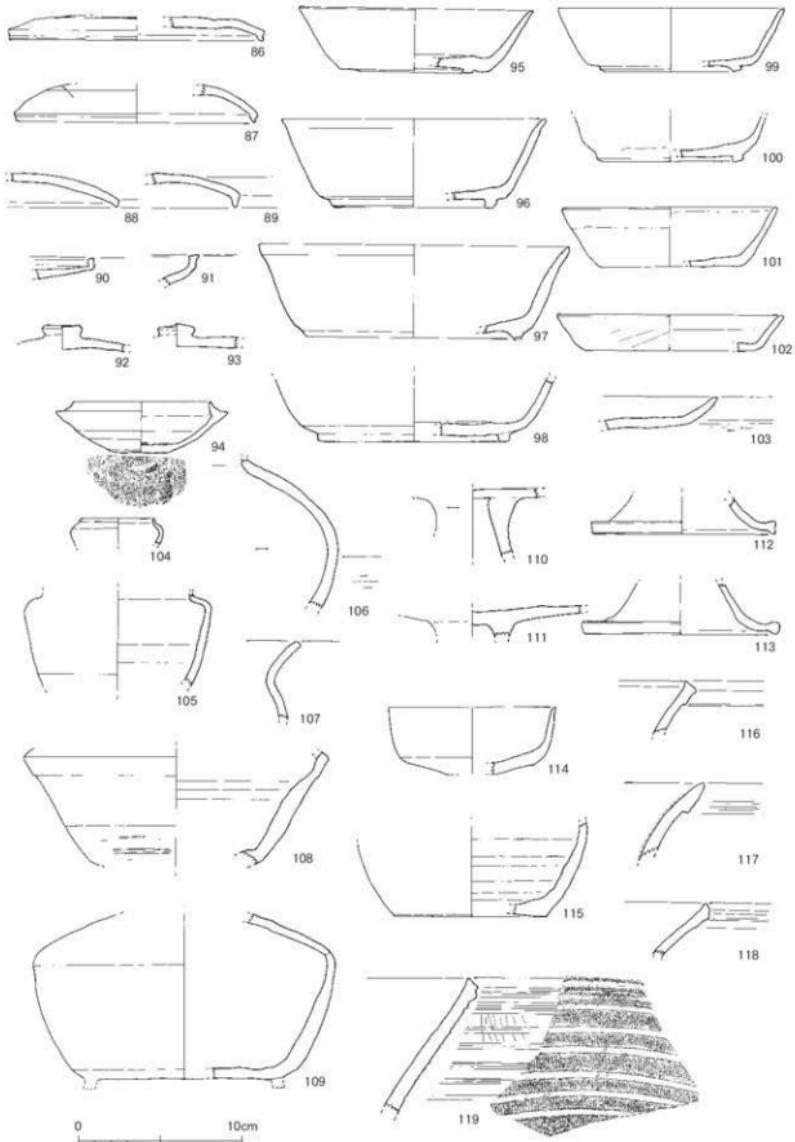


図14 SD0013-1区出土遺物実測図1 (1/3)

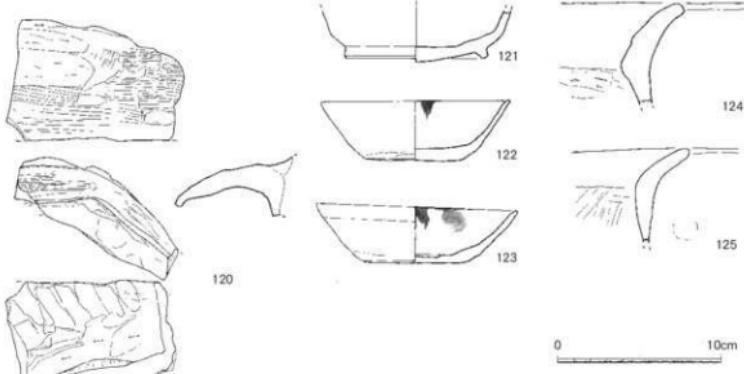


図15 SD001 3-1区出土遺物実測図2 (1/3)

した。外面は格子目叩きの後に横方向の搔き目状を施すがで消える。底には別個体片が付着する。破片は厚さ2cmと厚く、弧状に成形した一部が残っており焼台と考えられる。内面は下部に平行の当具痕がわずかに残り、指頭圧痕と擦痕がみられる。上部には自然軸がかかる。63は頸部に草の絵のような深く鋭いへら書きを施す。56は壺であろうか外面に削り状の擦痕が残り上部には自然軸がみられる。65は外面に斜め方向の深い刷毛目の後に横方向になる。両調整とも粘土の湿りが強い時点での調整で粘土の動きが多く、器面は平滑ではない。内面は横なでである。66から74は土師器の壺と取手。70は須恵器の器形だが質は土師器である。

S D O 1 1 D4 75から83は1区南側のSD011出土の遺物である。土師器の壺83以外は須恵器である。他に丸瓦片1点がある。

S D 1 0 2 D5 84、85は3-6区西岸の暗褐色砂質土出土である。84は土師質で内面は黒色で外面には同色の黒斑がある。つくりはシャープである。85は須恵器の壺で口縁部に自然軸がみられる。8世紀末から9世紀のものであろう。

図14から15は3-1区出土で、2つに分かれた溝を別に取り上げたが差がみられないため一緒に示した。86から119は須恵器で壺蓋、身、壺、高坏、壺である。90、91は高坏の壊部。94は底は未調整で細く真っ直ぐなへら書きがみられる。108は底に高台が付く長頸壺で下部には描き目状の削りが残る。109は底の端部近くは高台が剥がれたようにも見える。外面は淡赤茶色を呈す。120は土師器の移動式カマドで前面の底部分である。接合面で剥げ、器面には刷毛目と指頭圧痕が深く明瞭に残る。SD001中には移動式カマドの破片がしばしばみられるが図化し難くこの1片で代表させたい。121は厚い壊で底が高台より下に出る。橙色から一部は灰色を呈し焼が悪い須恵器であろう。122、123は土師器の壺でともに口縁部内面の一部に炭化物が付着し灯火器として使用している。口径10.8、12.4cm、器高3.6、3.4cmで9世紀代のものである。124、125は土師器の壺である。

図16から18は3-2から3-6出土である。図16は156を除いて須恵器で、壺、皿、高坏、壺である。

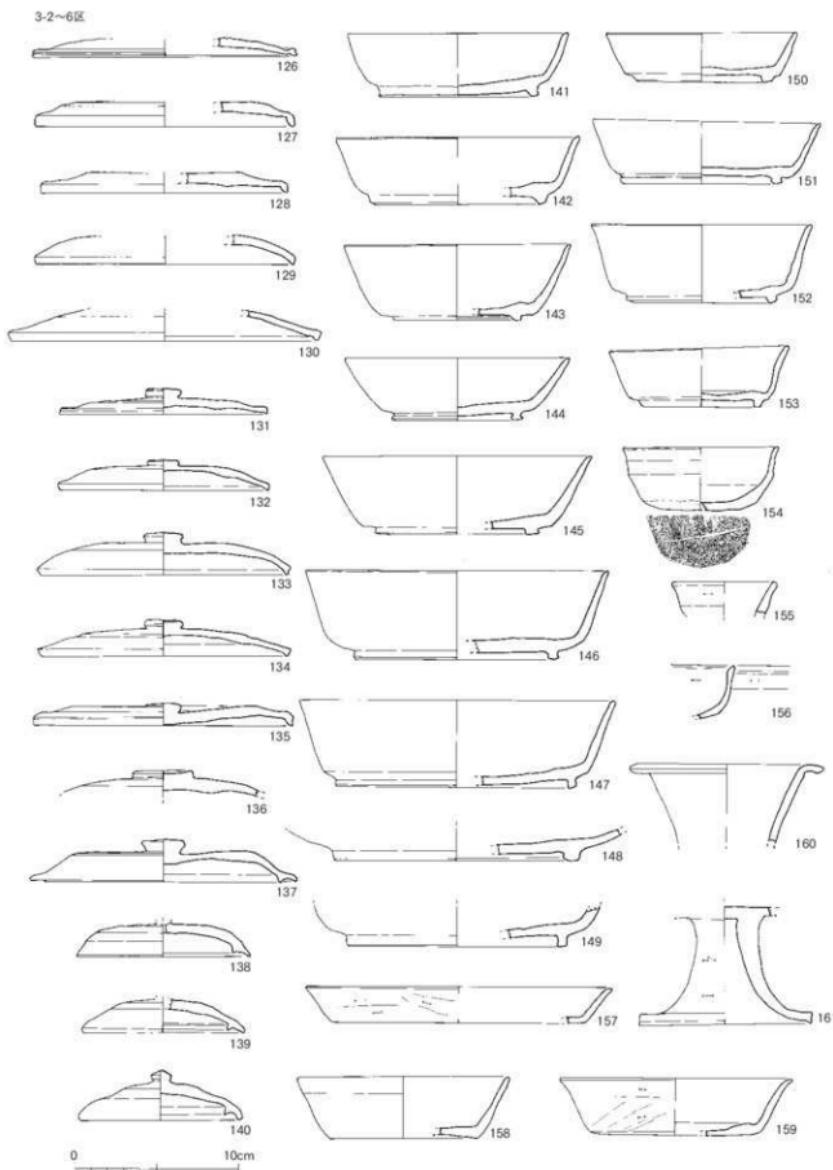


図16 SD0013-2~6区出土遺物実測図1 (1/3)

3-2~6区

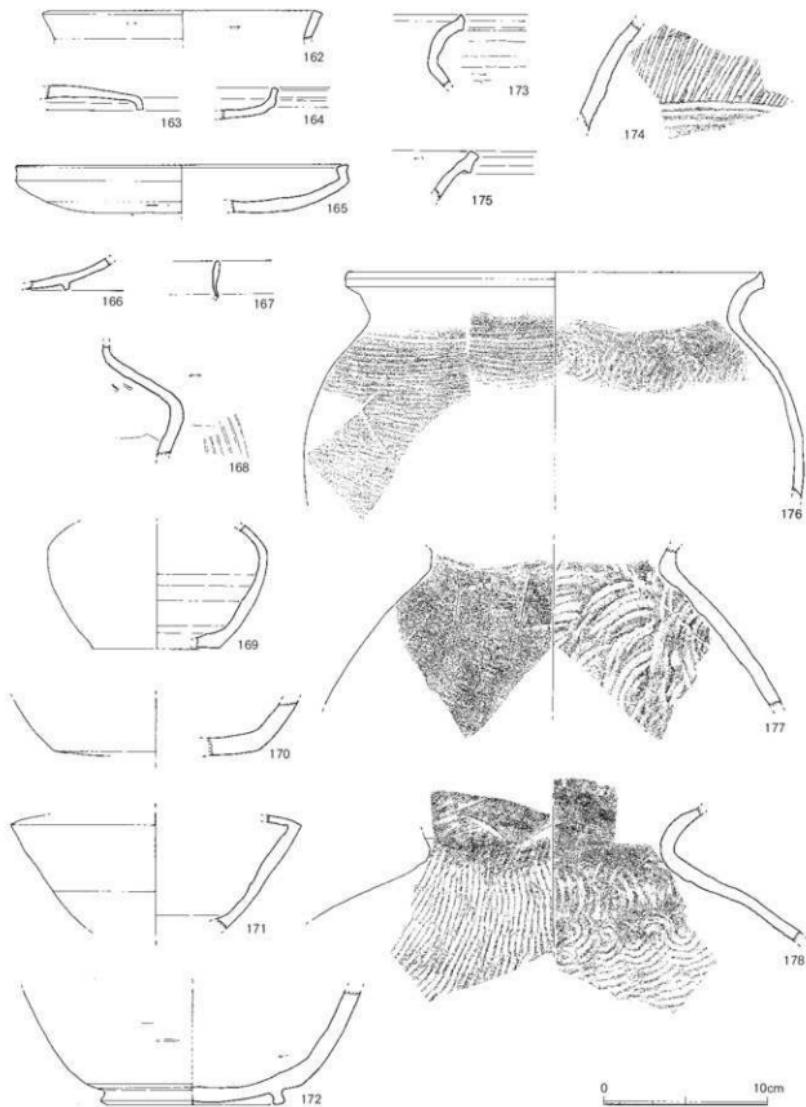


図17 SD001 3-2~6区出土遺物実測図2 (1/3)

3-2~6区

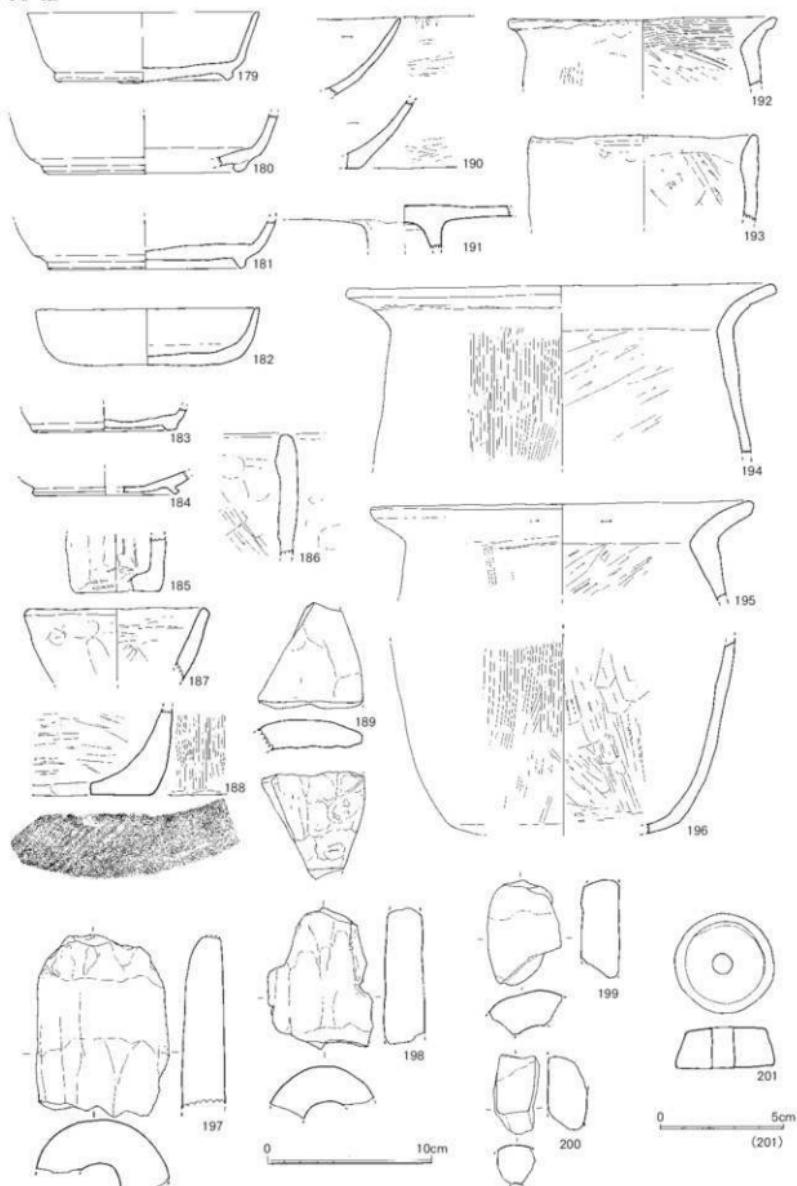


図18 SD001 3-2~6区出土遺物実測図3 (1/3, 1/2)

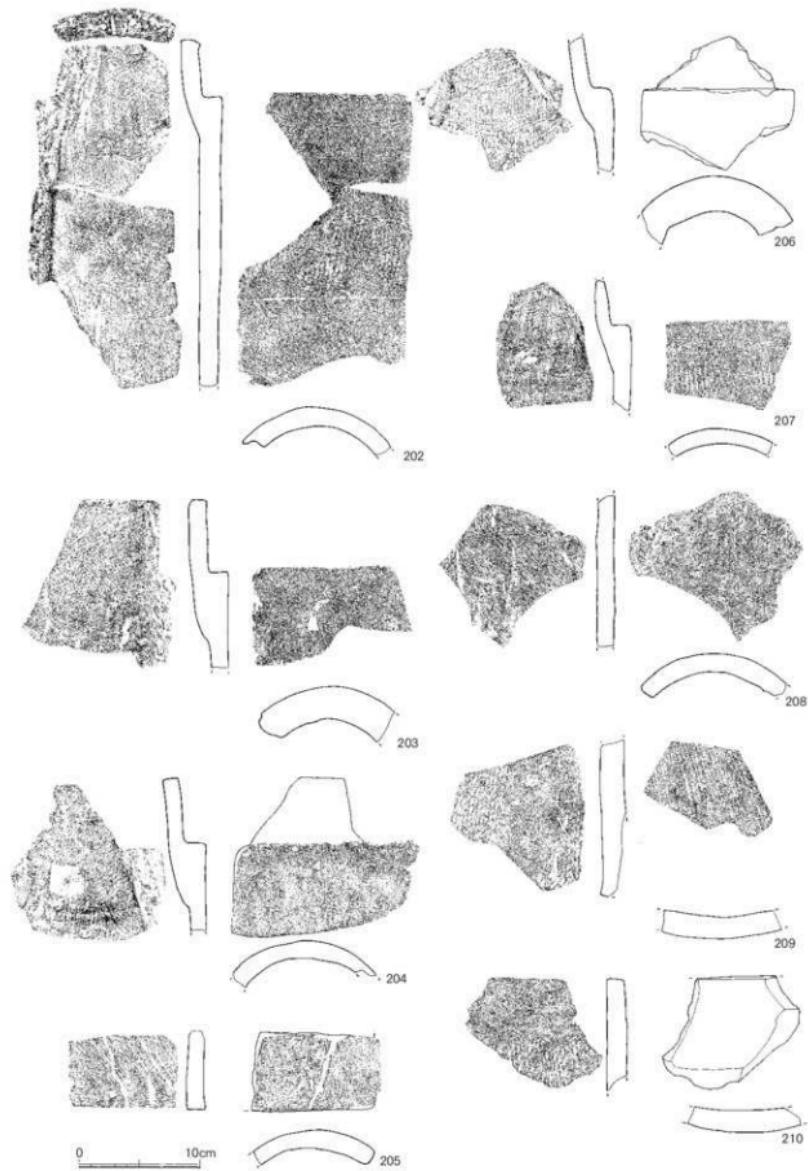


図19 SD001出土瓦実測図（1/4）

137は作り・胎土は須恵器だが赤茶色を呈す。146、147など器面灰白色で焼きがあまいものがある。156は土師器の深い坏で口縁部に浅い段がつく。図17も須恵器である。162は胴部へ屈曲し短頸壺になろう。163は蓋で図化したが、内面が滑らかで硯として利用した可能性がある。164、165は高坏として図示した。167は薄い器壁が底へ屈曲する鉢状か。168から172は壺である。168外面下部には叩き痕が見られる。173から178は甕である。176は器壁が薄く暗灰色から黒色に近い色調で肩部に細いヘラ描き状の沈線5本が描かれる。179から196は土師器の坏、高坏、甕等である。180には内面に小さな鉄滓が付着する。183は焼きが悪い須恵器か。185は1/4からの復元で天地不明。器壁が厚い。186は内面の搔き上げる調整から口縁にした。やや内傾し径は大きい。カマドか。188は外面刷毛目、内面削り、底には簾状の圧痕が見られる。径40cmほどでカマドであろうか。189は丸い器形の板状で上面はナデ、下面は指押さえ痕がはっきり残る。器面は淡橙色から茶褐色で焼きは固い。カマドの底であろうか。190は外面ヘラナデで灰茶色、内面は研磨で黒色の椀状である。

197から200はふいごの羽口で順に3-1、-2、-5、-6の出土である。001出土の羽口は他に1区から4つの小片があるのみで少ない。201は滑石製の紡錘車で下径4.1cm、高さ1.6cmで重量47gである。

図19は瓦である。001出土の瓦片が総数50点のうち、丸瓦と考えられるものが31点で、平瓦5点、不明14点である。3-1区が28個、-2区が7個、-3区が8個、-4区が1個、SD011が1個と-1区が多い。おむね凸凹面ともに灰黑色から暗灰色で砂粒を含む。焼きはあまめで土師器に近いものもある。内面に布目、外面縄目叩きの桶巻技法で、側辺には内面から截面と破面が残る。外面は叩きの後になり、内面には粗く深い板目状の擦痕を施すものもある。成形、厚さに安定感がなく全体に不揃いな印象を受ける。破片では丸瓦と平瓦の区別がつけ難い。厚さは1.4~1.7mmで中には1.1mmほどのものもある。胎土には砂粒を含む。図19のうち205が3-3区出土で、それ以外は3-1区出土である。202から208は丸瓦である。202は最も残りが良く長さ29cm以上で、胎土が細かで砂粒が少ない。凸面の玉縁側には縄目叩き痕が残り、叩き後に横方向の沈線1本を施す。尻側は横方向のナデが見られる。凹面は全面に細かな布目が残る。側面は凹面側1/2ほど切目を入れ分割する。胎土は細かめで砂粒少ない。203は凸面に縄目叩きがわずかに残り、横なでを施す、凹面は全面にやや粗めの布目が残る。側面は截目と破面がある。204は凸面はなでているがわずかに縄目叩き痕が残る。凹面はやや粗目の布目で側面は切り目と分割痕がある。205は淡黄橙色を呈し外面にわずかに叩き痕、内面は粗い板目状の擦痕が残る。206は凸面玉縁に横なでが見られ、凹面は布目が残る。側面は凹面側に切れ目を入れて割る。207は凸面は尻側ほど縄目叩きが残り頭側は横方向のナデが見える。内面は布目痕が前面に残る。208は凹面に板目状の深い擦痕を施す。209、210は平瓦である。209は凸面に縄目叩きが残り凹面には粗い板目状の擦痕を施す。210は凸面に縄目叩きが残り端部5cmほどはなでている。凹面は荒れ気味だがナデであろう。

S D 0 0 3 (図20・21) B2 調査区北側中央を南東から北西へ走る溝で、延長6mを確認した。南端で幅38cm、深さ12cmほどで、2区では底の凹凸のみ残る。北壁に断面は見られない。埋土は灰色砂質土で下部は灰白色砂である。

出土遺物 211から214は須恵器の坏と壺、215から217は土師器の甕である。ほかに土師器の甕破片が出土している。坏は8世紀後半から9世紀代。

S D 0 1 7 (図20・21) D3 1区南半の東壁から直線的に北西に伸びる溝で、南端で幅50cm、深さ15cmほど。トレンチより西では底のみ確認した。SC018を切り、溝を切るピットもある。埋土は粗砂である。

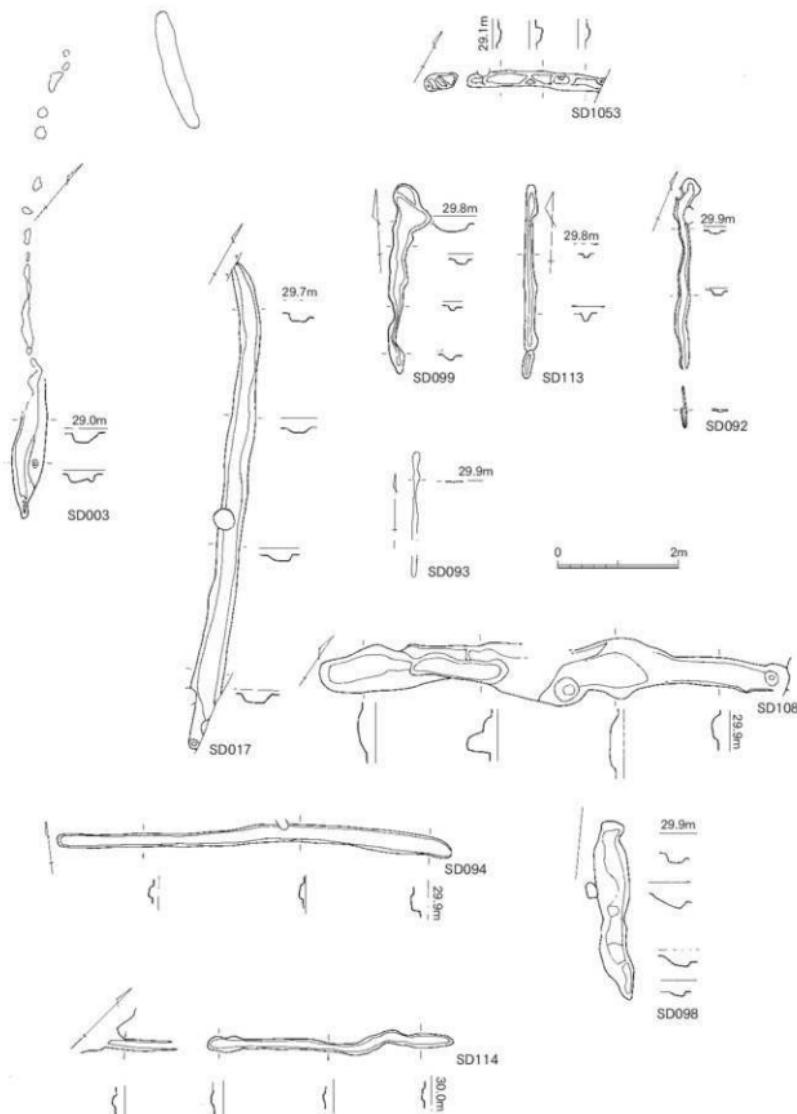


図20 溝実測図 (1/80)

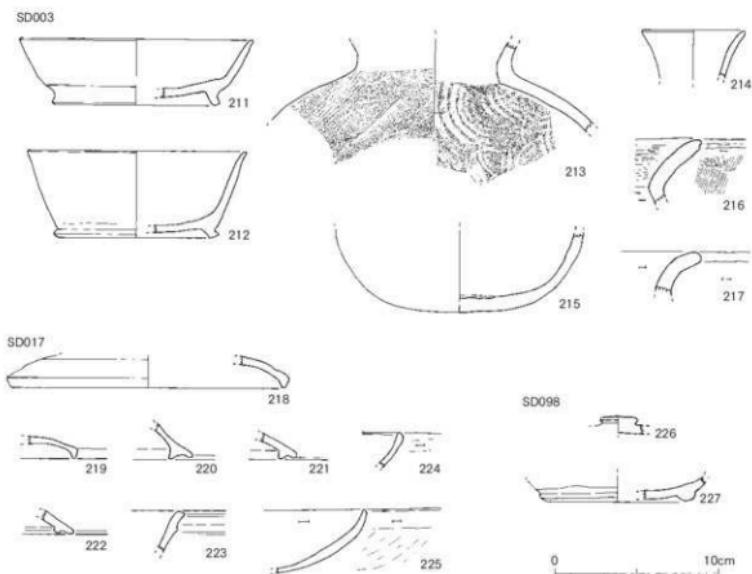


図21 SD003、017、098出土遺物実測図(1/3)

出土遺物 218から222は須恵器の蓋で220、221は焼きが悪く橙色、紫灰色である。223は須恵器の壺。224、225は土師器で浅い椀状で橙色を呈す。225は外面ヘラ削り、内面研磨状、口縁部は強い横なでで丁寧に仕上げる。ほかに須恵器の平行叩きの壺片、土師器の取手、鉄滓17gが出土している。218、219から遺構の時期は8世紀代以降。

SD1053 (図20) C2 1区中ほどで試掘トレンチに切られる。幅30cm、深さ7cm、延長2.2mを確認した。覆土は粗砂である。遺物は土師器小片2つと鉄滓10gである。

SD099 (図20) C5 3区中央東側を南北方向に伸びる。幅最大で30cm、深さ7cmで2.5mの延長を確認した。埋土は粗砂である。底のみが残っている状況であろう。須恵器の壺、坏、土師質の高坏、壺の小片と鉄滓12gが出土している。

SD113 (図20) C5 SD099の西1mを平行して走る。幅20~10cm、深さ7cmを確認した。遺物はない。

SD092 (図20) CD6 3区に南よりを北北西に伸びる。方向は異なるがSD097、113につながる可能性もある。幅18cm、深さ7cmで延長4mを確認した。SX097、SD094、108などの遺構すべてを切る。埋土は粗砂である。須恵器坏蓋小片と土師器片、鉄滓307gが出土した。

SD093 (図20) CD6 2号墳周溝を切る。底のみ幅10cmを確認した。遺物は土師器の小片のみで、埋土は粗砂である。

SD094 (図20) CD6 3区南よりを東西に延びる。SD092に切られ、SD098、SD108を切る。幅35cm深さ6cmほどで延長6cmを確認した。埋土は暗褐色土で須恵器壺片1、土師器小片、鉄滓260gが出土した。

SD098 (図20) D6 3区でSD001の西岸に沿ってSK097を切る。幅50cm。深さ15~22で延長2.2mを確認した。埋土は黒褐色砂質土である。

出土遺物 226と227は須恵器の壺蓋と身で227は焼きが悪く淡灰色を呈す。ほかに土師器小片、鉄滓253gが出土した。

SD108 (図20) CD6 2号墳周溝から東西方向にSD001まで伸びる。幅40cm、深さ10cmほどで延長5.7mを確認した。覆土は暗灰褐色砂質土で須恵器壺直口片、壺?小片 土師器高壺脚片と鉄滓172gが出土した。SK097、SD099に切られる。中央部分でプランが不確かになり底が上がる。2号墳周溝とは切り合いは判断できなかったが、切ると思われる。

SD114 (図20) C7 2号墳の南壁際から北東に伸びる。幅20cm、深さ5cmほどで延長4.7mを確認した。覆土は暗褐色から黒褐色の砂質土でよく縮り、遺構であるか不確かである。遺物はない。

(2) 製鉄関連遺構

調査区北東側のSD001近くC2で4基の製鉄炉SK005、006、009、010を確認した。いずれも炉の両側に土坑を持つ、いわゆる鉄アレイ型で、主軸をほぼ同じ東西方向にとる。丘陵、SD001に対して直の方向である。4基は南北5mの間に集まり、土坑に切り合いがある。同じ区画に連続して操業したものと思われる。輪座に関わる遺構は確認していない。炉跡は上面のピット群が切り込む5層の黄色砂質、灰色砂質土を除去して遺構プランが現れた。遺構面は6層に相当する暗灰褐色土で標高29.1mほどである。最後に検出したSK010は他の3基よりも暗灰褐色土を下げて検出した。このことで010が古いとすれば操業は010⇒009・005⇒006と想定される。遺構掘削にあたっては炉内、土坑内の土を水洗して磁着する遺物の抽出を行った。

近接するSD001では、SK010東の炉群に近い箇所で鉄滓がより多く出土した。同時に存在したと考えられる。また3区のSD001際のSX097でもまとまった鉄滓の出土がありここで報告する。鉄滓を埋土に含む遺構は上層、下層の検出遺構ともに調査区全域に広がる。各遺構および卷末で触れたい。

SR005 (図22・24) C2 東西の排滓土坑がSR006の排滓土坑に切られる。残存する遺構の規模は排滓土坑を含めた全長が3.9mで、炉の長軸方向はN-63°-Eである。炉の掘方は70×60cmで深さ15cmが残る。床は硬化して黒変しさらに下および周囲は赤変している。埋土は鉄滓混じりの黄茶褐色土である。排滓土坑は、東側は平面160×90cmの縱長で深さ30cmほどで埋土は鉄滓混じりの灰褐色土である。西側は平面140×152cm、深さ38cmで、大型の鉄滓と焼土が炉底から西へ下がる状態で出土した。炉内の埋土からは2555gの鉄滓、407gの砂鉄が出土した。東側の排滓土坑から13800g、西側から19647gの鉄滓が出土している。

出土遺物 228、229は須恵器の壺蓋、230は土師器の壺で西側土坑出土である。西側からは他に土師器壺片が、東側土坑からはIV期の壺身片と口縁部片、土師器小片が出土している。8世紀代の228、229は1区SD001と同じである。

SR006 (図22・24) C2 SR005の南西に位置し排滓土坑は005の土坑を切る。残存する遺構の規模は排滓土坑を含めた全長が3.5mで、炉の長軸方向はN-66°-Eである。炉の掘方は75×70cmで深さ9cmが残る。床は硬化して黒変しさらに下および周囲は赤変している。排滓土坑は、東側は平面

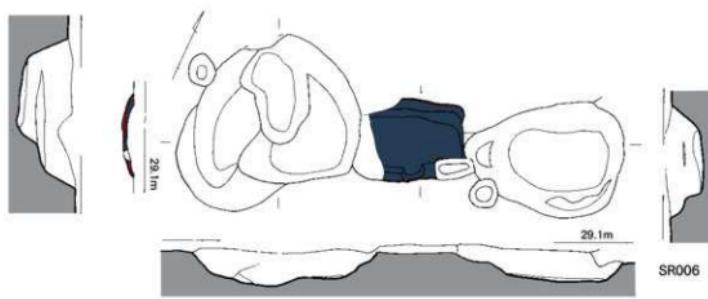
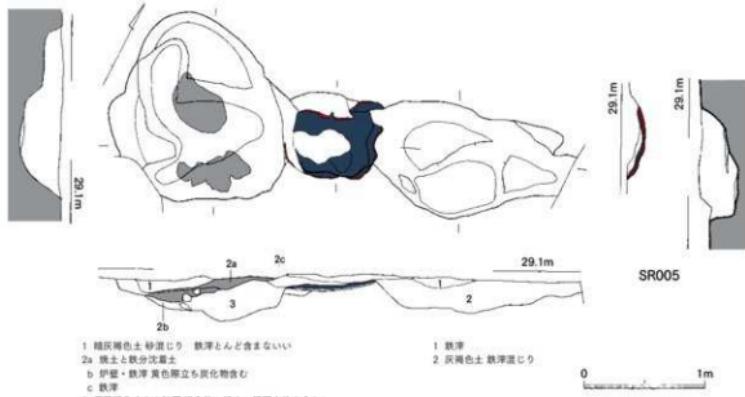


図22 SR005・006実測図（1/40）

130×95cmの縦長で深さ25cmほどで埋土は鉄滓混じりの灰褐色から灰茶色土である。西側は平面140×120cm、深さ28cmで、炉壁を中心とした鉄滓と橙色粘土塊、黄白色砂が全体に西へ下がる状態で出土した。埋土には炉壁、炭粒を多く含んでいる。炉内の埋土からは588gの鉄滓、273gの砂鉄が出土した。東側の排滓土坑から10060g、西側から20835gの鉄滓が出土している。

出土遺物 241は炉埋土出土の須恵器の环身片、242、244は西側土坑出土の土師器壺、243は東側土坑出土の土師器取手である。他に須恵器、土師器の小片が少量ある。

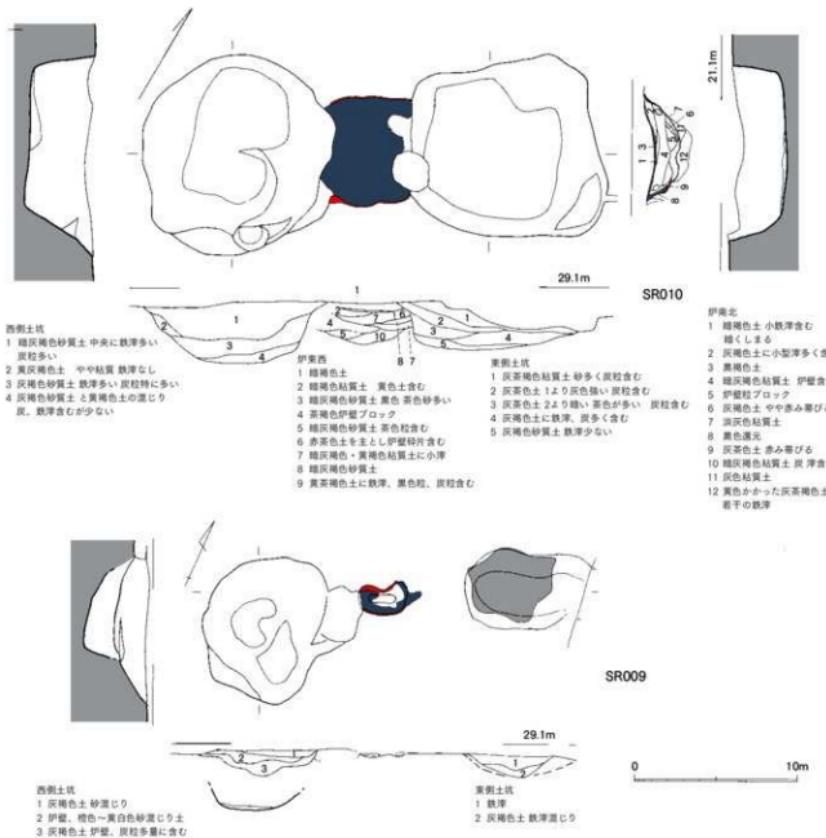


図23 SR009・010実測図 (1/40)

SR009 (図22・24) C2 SR006の南東に位置し東側土坑がSR006の排滓土坑に切られる。残存する遺構の規模は排滓土坑を含めた全長が2.8mで、炉の長軸方向はN-67°-Eである。炉は床の黒変、赤変部が40×30cmの範囲に残るのみである。排滓土坑は、東側は平面100×65cmの縦長で東をトレンチに切られる。埋土上部は炉壁を主体とした灰褐色土である。西側は平面100×120cmで埋土は茶褐色から灰褐色で2層に炭を多く含む。深さ22cmほどとしていたが、下面調査時に丁度重なる位置に砂鉄を多くふくむ円形土坑を確認し、西側土坑の下部と判断した。図の破線以下の部分で、深

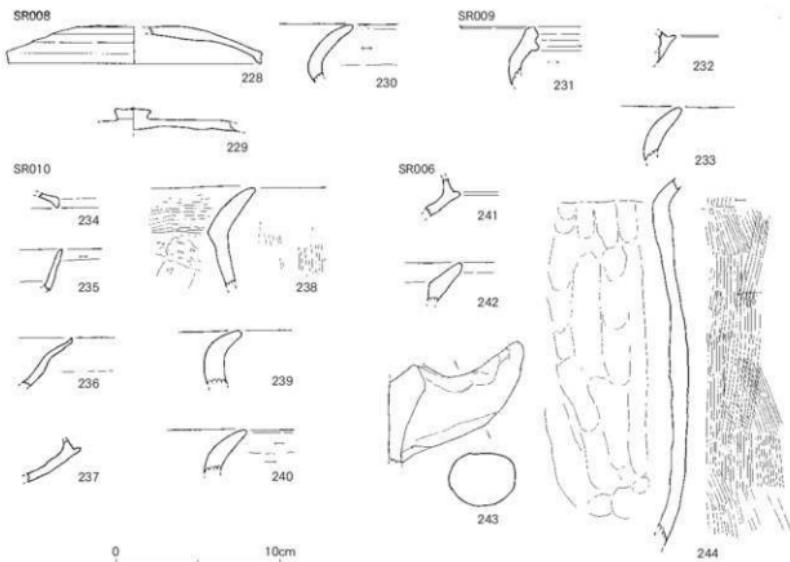


図24 SR005・006・009・010出土遺物実測図（1/3）

さ50cmほどになる。西側土坑と炉との間には攪乱が入る。炉と東西土坑の位置関係から類推すると、炉は少なくとも長さ80cmの規模と考えられる。東側の排溝土坑から5560g、西側からは17960gの鉄滓と3880gの砂鉄が出土した。

出土遺物 土器類は東西土坑からの出土である。231は赤焼けの須恵器の甕でどちらの土坑か不明。232、233は西側土坑出土で須恵器の坏身片と土師器甕片である。西側からは土師器の甕の破片を中心に出土があり、他に須恵器の甕、脚片がある。東側からは土師器片、須恵器脚部片があった。

S R O 1 0 (図22・24) C2 4基の炉の最も北に位置する。SD001に設定したトレンチで東側の炉にあたった。残存する遺構の規模は排溝土坑を含めた全長が3.7mで、炉の長軸方向はN-60°-Eである。炉の掘方は70×90cmで深さ7cmほどで黒色の硬化面となるが、側壁はさらに硬化、赤変した壁が続き、深さ35cmほどまで鉄滓を含んだ掘方がある。下部は地山(6・7層)と区別がつきにくくはつきりしない。埋土は鉄滓混じりで灰褐色から灰茶色土で焼土、炭化物、鉄滓を多く含む。西側は平面150×145cmで深さ40cmで灰褐色～灰茶褐色土で焼土、炭化物、鉄滓を多く含む。炉内の埋土からは4064gの鉄滓、871gの砂鉄が出土した。東側の排溝土坑から10470g、西側から17960gの鉄滓と39gの砂鉄が出土している。

出土遺物 234から236は炉出土。234は土師質で坏蓋片か。235は須恵器の坏または皿。236は土師器で横方向の研磨状の調整で器面橙色である。237は東土坑出土の須恵器の坏身。238から240土師器の甕で239は東土坑、他2つは西土坑出土である。

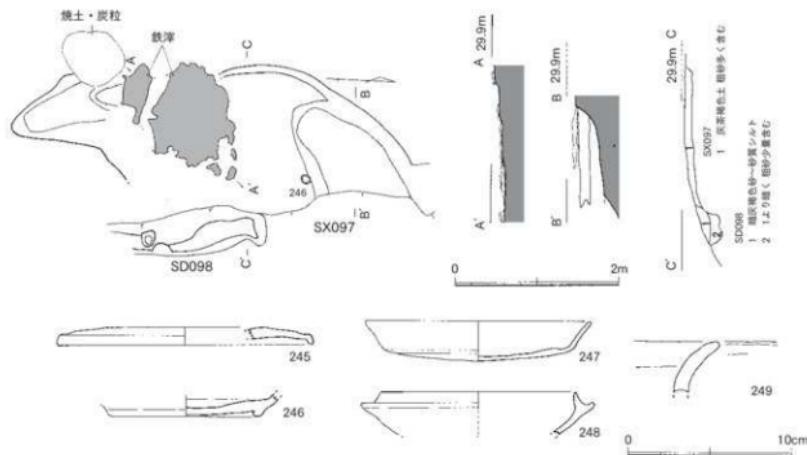


図25 SX097、出土遺物実測図（1/60、1/3）

S X 0 9 7 (図25) D6-3区SD001際に弧状のくぼみ状の落ちがあり、小ぶりの鉄滓が密に溜まる。SD001、098、094に切られる。弧状のくぼみは南北260cm、東西は170cmほどである。灰茶褐色土を覆土とし、深さは10cmほどだが北側に深いくぼみがあり深さ30cmほどである。鉄滓は108×180cmの範囲に薄く広がり南西から北東へ緩やかに傾斜する。傾斜の起点となる南西側には80×68cmの範囲に焼土粒と炭を含む灰褐色土があり、関連施設を想定したが焼土面等は見られなかった。北側のくぼみ付近は鉄滓の分布範囲から外れ、別の遺構とも考えられる。鉄滓は1278gが出土し砂鉄138gを採集した。鍛造剥片等は見られなかった。8世紀代の須恵器が出土しており、鉄滓も近い時期であろう。

出土遺物 遺物は少ない。245、247、248は須恵器の蓋、皿、壺身、246は土師器の壺で底のみ一周残る。249は土師器の甕で器面が滑らか。いずれも遺構の北側からの出土である。

(3) 土坑等

上面で検出した土坑等をまとめて記載する。

S K 0 0 2 (図26・27) C2 1区北よりでピット群に切られる。平面梢円形80×60cmの深さ7cmほどの浅い土坑で灰褐色の砂混じり土を埋土とする。

出土遺物 251、252は土師器の壺と皿。253は瓦器碗で内外が黒色、254は土師器の椀である。他に土師器の取手、須恵器片、鉄滓33gが出土している。

S K 0 0 4 (図26・27) C1 1区北端中央で確認した160×156cmの円形プランで灰色砂混じり土を

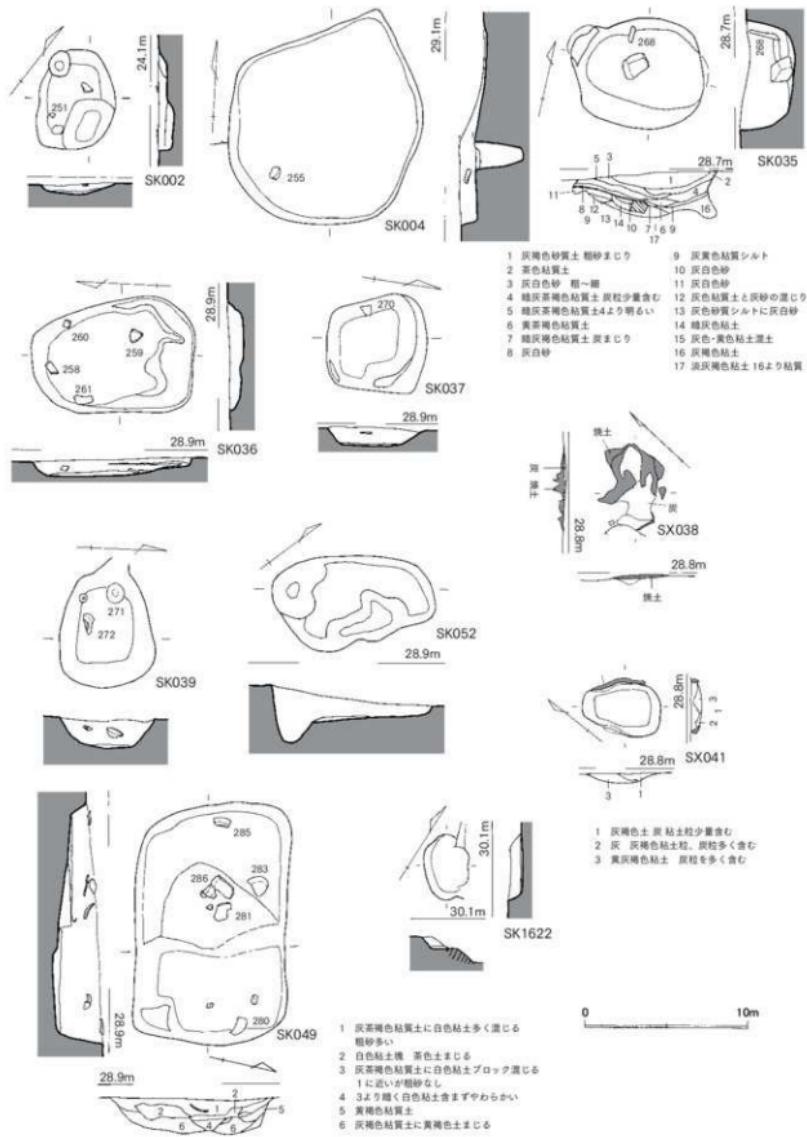


図26 上面土坑実測図1 (1/40)

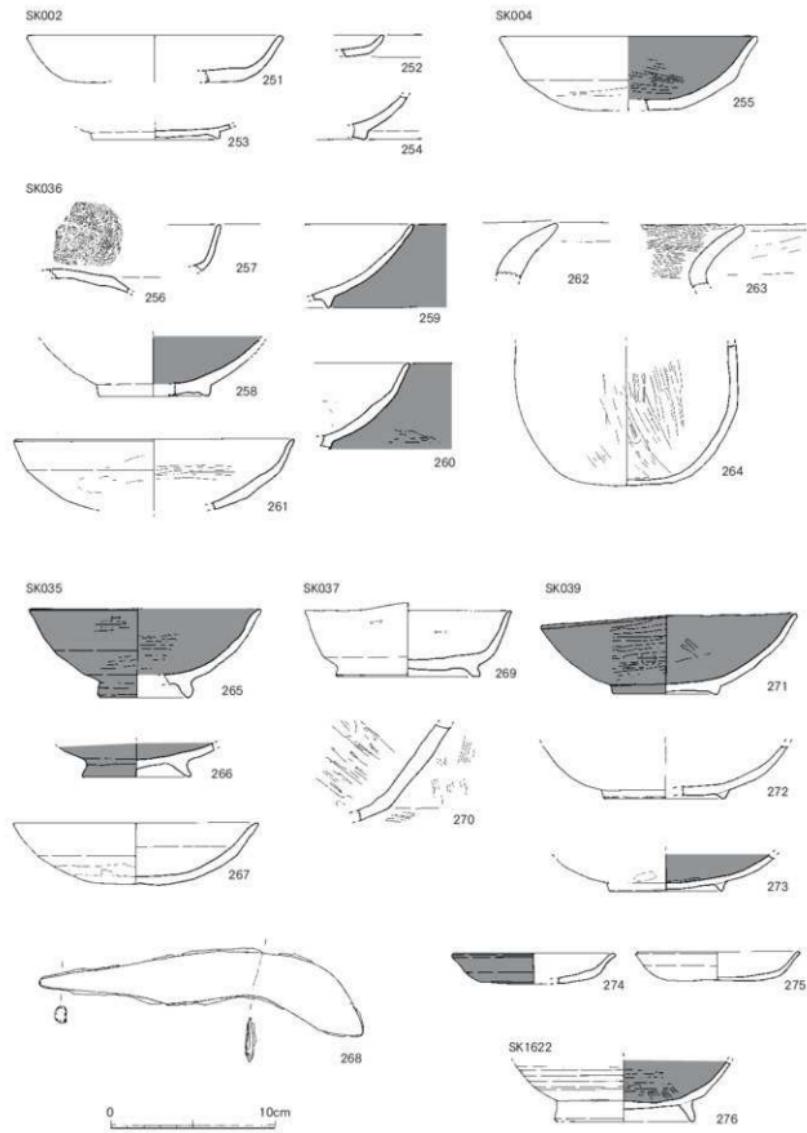


図27 上面土坑出土遺物実測図1 (1/3)

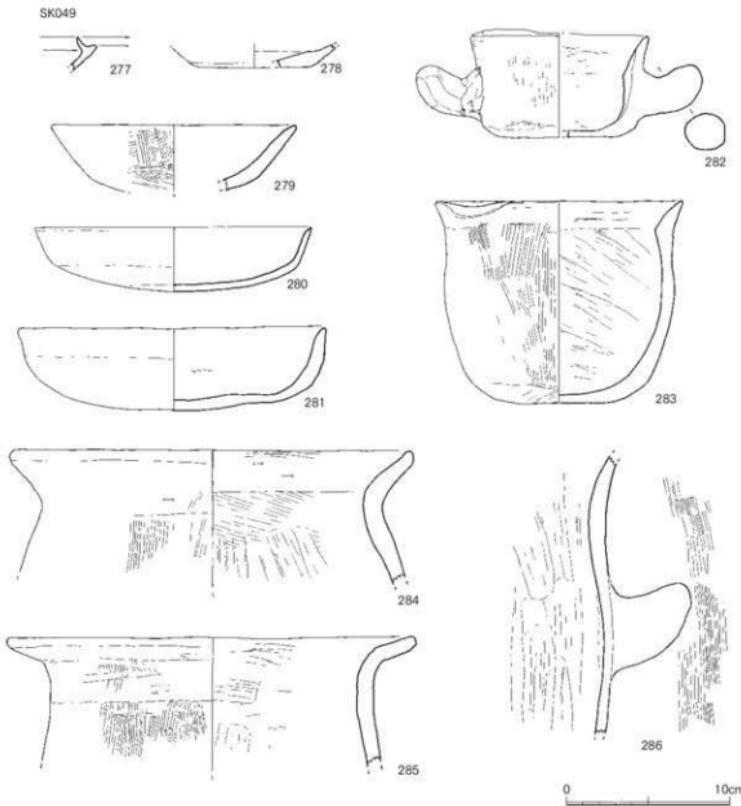


図28 上面土坑出土遺物実測図2 (1/3)

埋土とする。北側の遺構面は表土剥ぎの段階で掘り過ぎている。北側は遺構のプランになるのか怪しい。黒色土器などが出土した。

出土遺物 255は遺構中央で出土した黒色土器楕で高台が剥げている。内面は黒褐色で研磨調整を施し黒光りする。外面は黄灰白色である。他にⅣ期の須恵器の坏片・高台・甕片、土師器の甕小片がある。12世紀はじめ。

SK035 (図26・27) B2北西 調査区北西端で検出した105×80cmの平面楕円形で深さ37cmほどである。覆土上部は灰褐色砂質土が溜まるが、中位から下は白粗砂、砂混じり土が北西から細かく流れ込むように入る。西側の壁は緩やかだが、東側は急に立つ。北側の壁際に鉄器が先端を下にし

て立った状態で出土した。

出土遺物 265、266は内外面とも黒色の黒色土器で、265は1/2が残り研磨調整がみられる。267は土師器の椀で淡橙色～橙白色を呈す。268は鉄器で鎌状の刃物と思われる。全長19.8cm、幅3.3cmで刃部長は12cmほどであろう。他に8世紀代の須恵器の坏蓋片、皿片、土師器の壺片、取手、鉄滓65gが出土している。

SK036 (図26・27) B2南東 130×92cmの楕円形プランで深さ15cmほどのくぼみ状の土坑で、瓦器片が散乱するように出土した。埋土に白色粘土を含む。

出土遺物 256は須恵器の坏天井部に細い十字のへら記号がみられる。257は土師器の坏で器面荒れる。258から260は瓦器椀。258は器面荒れ、260は外面が黒色である。261は土師質の椀で内面に研磨調整がみられる。262から264は土師器の壺で264は内面の削りが顯著で器壁は薄目である。2次焼成を受け、外面は赤みかかる。他に須恵器の皿、土師器の取手があり数量が多いのは土師器壺片である。

SK037 (図26・27) B2南東 SK036の南に近接する。77×81cmの平面隅丸方形で深さ13cmほどである。壁、底に白色粘土がみられ、下面のSX080等との関連が考えられる。

出土遺物 269は須恵器の坏身で口縁部が一部歪む。回転などで調整が内外に明瞭に残る。270は土師器の壺で内面の削りが顯著で底が薄い。他に鉄滓8g出土している。

SX038 (図26) B2 SK035の東に近接し、ピットに切られる。明橙色粘質土と白色粘土、炭が70×45cmほどの範囲に広がる。厚さは2cmほどである。明橙色土に白色粘土が薄く乗り、炭は周囲に分布する程度である。土師器の壺小片が出土した。粘土を集積した下面で検出したSX080などと関連があるのかも知れない。

SK039 (図26・27) B2南東 SK037の南に近接する96×77cmほどの略方形の平面で深さ23cmである。埋土は橙色、白色ブロックを含む灰色砂質土で瓦器碗等を含む。

出土遺物 271から275は瓦器の椀と皿である。271は完形品で内外面に研磨調整がみられ黒色を呈す。273の内面、274の外面は黒色を呈す。他に土師器の壺片、取手、粘土塊4点、鉄滓102gがある。

SX041 (図26) B2 63×43cm、深さ7cmほどの浅い土坑の両側が熱を受けて黄緑色化し、その外側は赤色化する。埋土は炭粒を多く含む灰褐色土を主とする。土師器の小片と粘土塊1が出土している。鉄滓は見られない。

SK049 (図26・28) B3 上面遺構の南西端で検出した。平面195×122cmの長方形で西半は深さ20cmである。東側は深くなるが掘り過ぎの可能性が大きい。埋土上部は灰茶褐色粘質土で遺構面と区別が付け難かったが、白色粘土を含み検出できた。上部を中心に土器が出土している。

出土遺物 277は須恵器の坏身の小片、278は坏底と思われる。他は土師器である。279は浅い鉢状で外面に刷毛目を施す。280、281は坏。280は薄手で外面をなで底に調整工具の端部痕がいくつか見られる。281は厚手で胎上は砂粒が多い。282は手捏ね状の小鉢に取手が付く。1/4強の残りで両側に取手が付くかは不明である。283～285は壺で283は2次焼成で外面は赤みがある。286は壺で外面の刷毛目は木目が細い。須恵器は示したのみで他に土師器片が多い。鉄滓115gが出土している。

SK052 (図26) B3 西端中央部のSC062付近を下げる最中に確認した172×80cmほどのくぼみ状で灰褐色土を覆土する。遺物は土師器の厚手、薄手の破片が出土した。

SK1622 (図26・27) D7 SD001の南西端部3-1区で001を切る。52×34cm+a、深さ9cmほどの小さな掘り込みで、東側は001掘削時に切り崩してしまった。床は大きな石にあたる。黒色土器276が出土した。

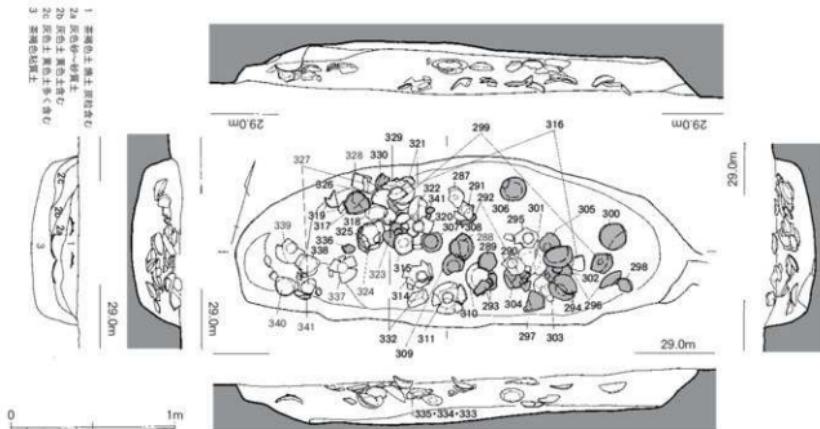


図29 SX040実測図 (1/30)

出土遺物 276は内面が黒色、外面は淡橙色を呈す。内面は研磨痕みられる。

S K O 4 0 (図26・28~30) B 2 調査区中央西よりで検出した平面285×103cmほどの平面長方形で深さ32cmほどである。瓦器、土師器が多く出土した。覆土は灰色砂質土だが、上部には黄褐色土、焼土を含む。遺物は完形か完形に近いものが多く、小片を除いた56点を図化した。椀49点、壺7点である。瓦器と土師器は分け難い。黒色のものをアミで示した。黒色にいぶしたもののは23点でそのうち両面黒色が17点、内面のみが3点、外のみが3点である。これ以外は33点でそのうちやや灰色をおびるもの7点である。ここでは黒色、灰色かかるものを瓦器、橙色～淡橙色の物を土師器とする。黒色とした内には銀色がかるものもある。器面調整はおむね横方向の研磨である。図、巻頭写真5のように東側に黒色の瓦器が集り、西側に淡橙色の土師質が集まる。また、土層や断面、写真13に見られるように高低の差がみられ、ある程度の段階を経て埋まった状況にある。ただし瓦器、土師器ともに下部にも上部にもあり埋没段階に明確な差は見られない。出土状態は正置のものが多いが倒置したものも瓦器、土師器ともにある。上部の方が、斜めに入る傾向にあるが、埋没時の床の状況にもよるのだろう。ただし離れて出土した破片が接合した例は上部であり、廃棄の仕方に違いも感じられる。調査中は完形品が多いこと、色調で分布に違いがあることから何らかの意識的な行為として残されたことも想定したが、生産、使用後の何度かの廃棄の重なりからも生じうる状況であろう。いずれにしても色調を意識した廃棄が行われている。今日の瓦器、土師器としている分類している認識に近い意識が当時にもみられる例ではないだろうか。

図30には構造の土層付近より東側出土品をおよそ上部から出土したものから下部で出土した順に掲載した。したがって器種等は考慮していない。287から294は焼土を含む1層からの出土である。また312と313は覆土中の破片からの復元である。図31は西側出土で図30と同様に配した。314、315、325は焼土を含む1層からの出土である。337～341は西端に集まるもので下部からの出土がほ

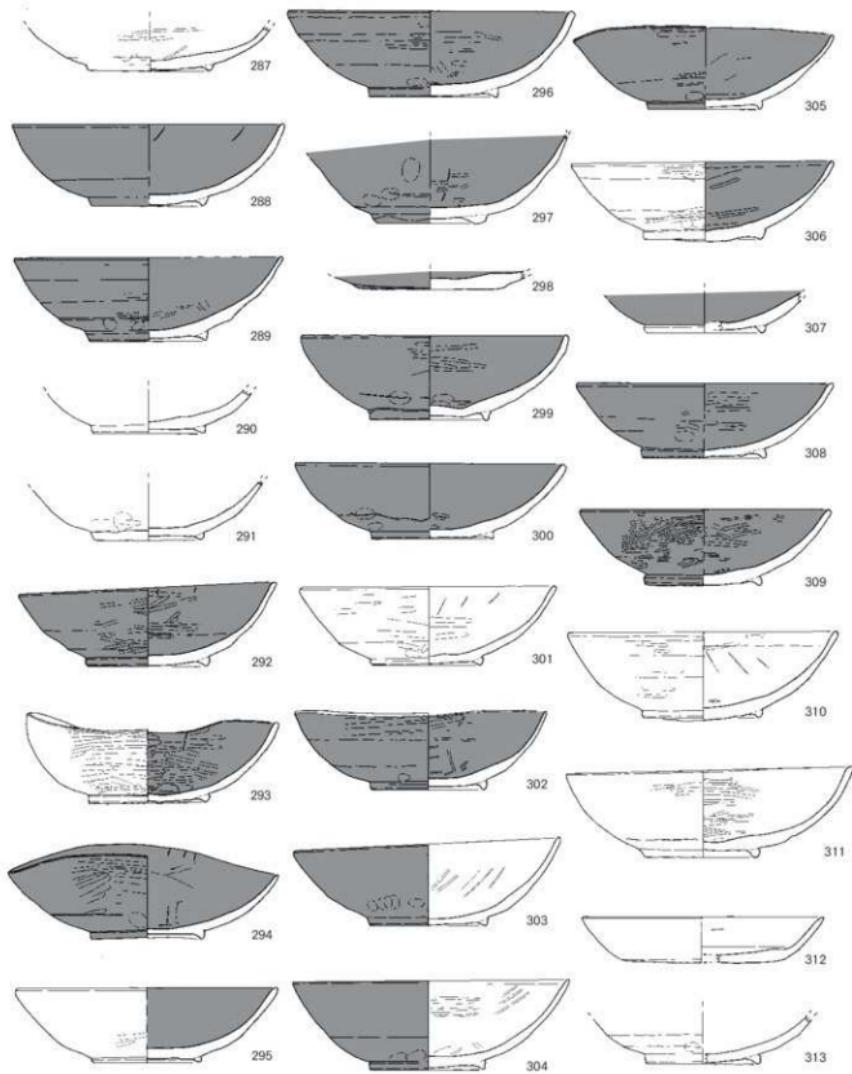


図30 SX040出土遺物実測図1 (1/3)

0 10cm

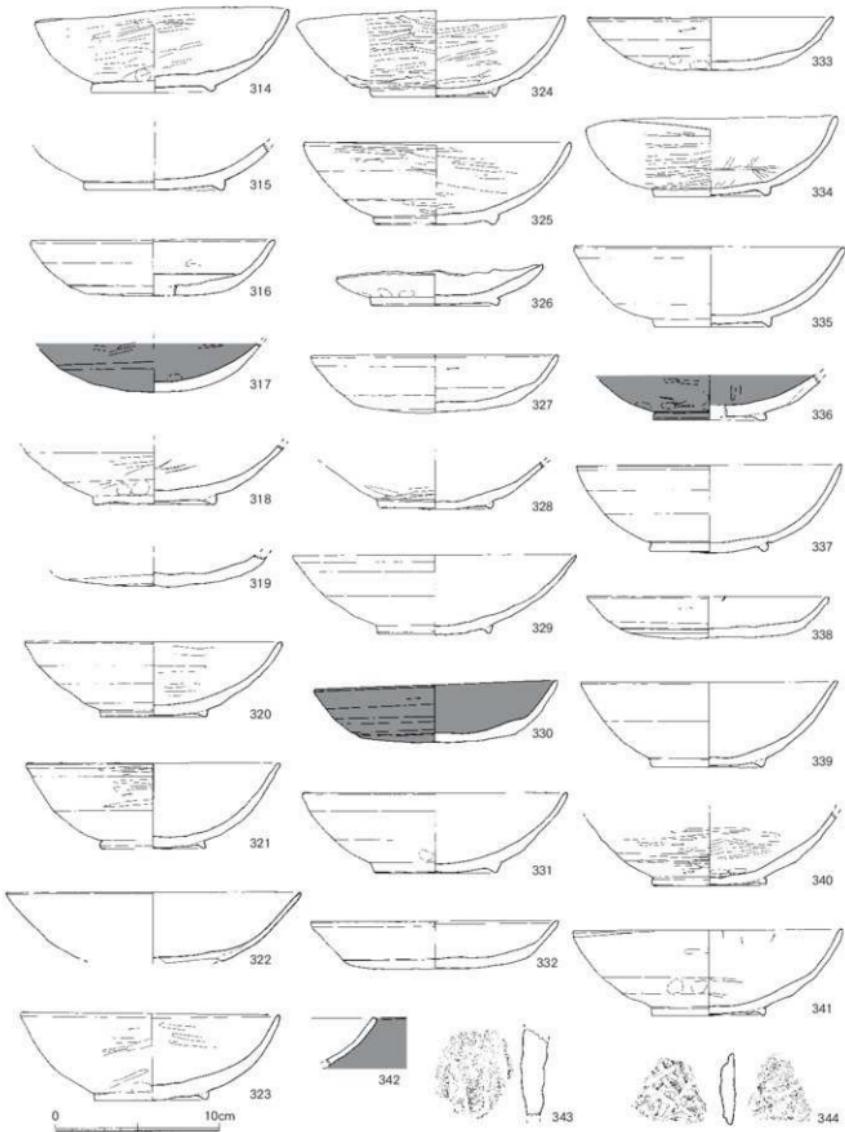


図31 SX040出土遺物実測図2 (1/3)

とんどであるが中央部との重なりはわからない。343と344は灰茶色の粘土塊で植物繊維の圧痕が残る。粘土塊の量は多くない。この他に未接合の挽坏小破片、土師器甕片、取手2、須恵器の小片、鉄滓216gがあり、覆土への混入もある。

SX050・051 (図32・33) B3東端 調査区中央付近で須恵器を中心とした土器が4×1.5mほどの範囲にややまとまって出土した。標高29.0m前後15cm内で、6・7層に相当すると考える。北側の集中を050、南側を051として遺物を取り上げた。6層は包含層ではあるが他には集中するところではなく、遺構を想定したが検出できなかった。下面ではSC072の東にあたり同じ範囲に遺構は確認できない。SX080、081とした白色粘土だまりがSX050の東西両側にある。

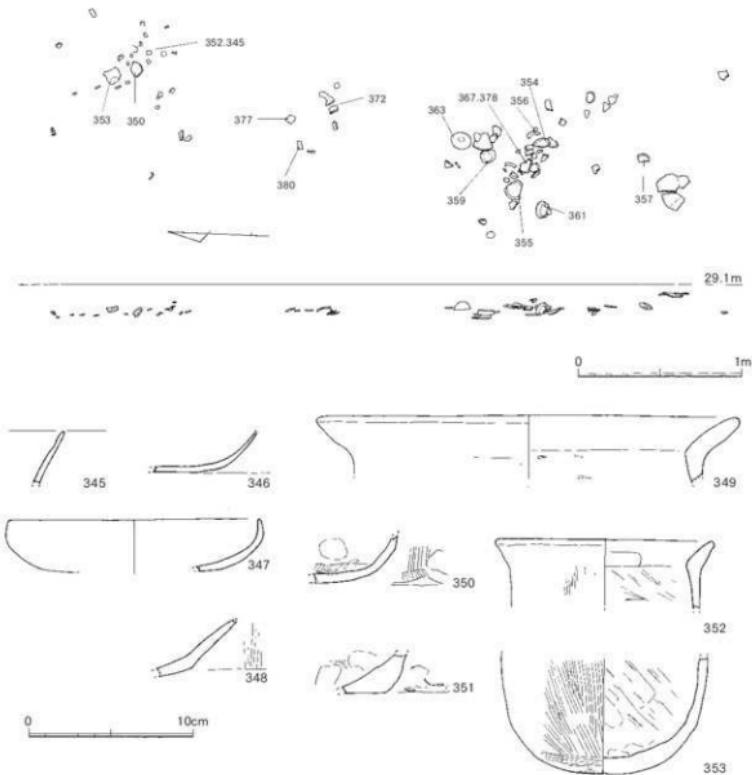


図32 SX050・051、出土遺物実測図 (1/30・1/3)

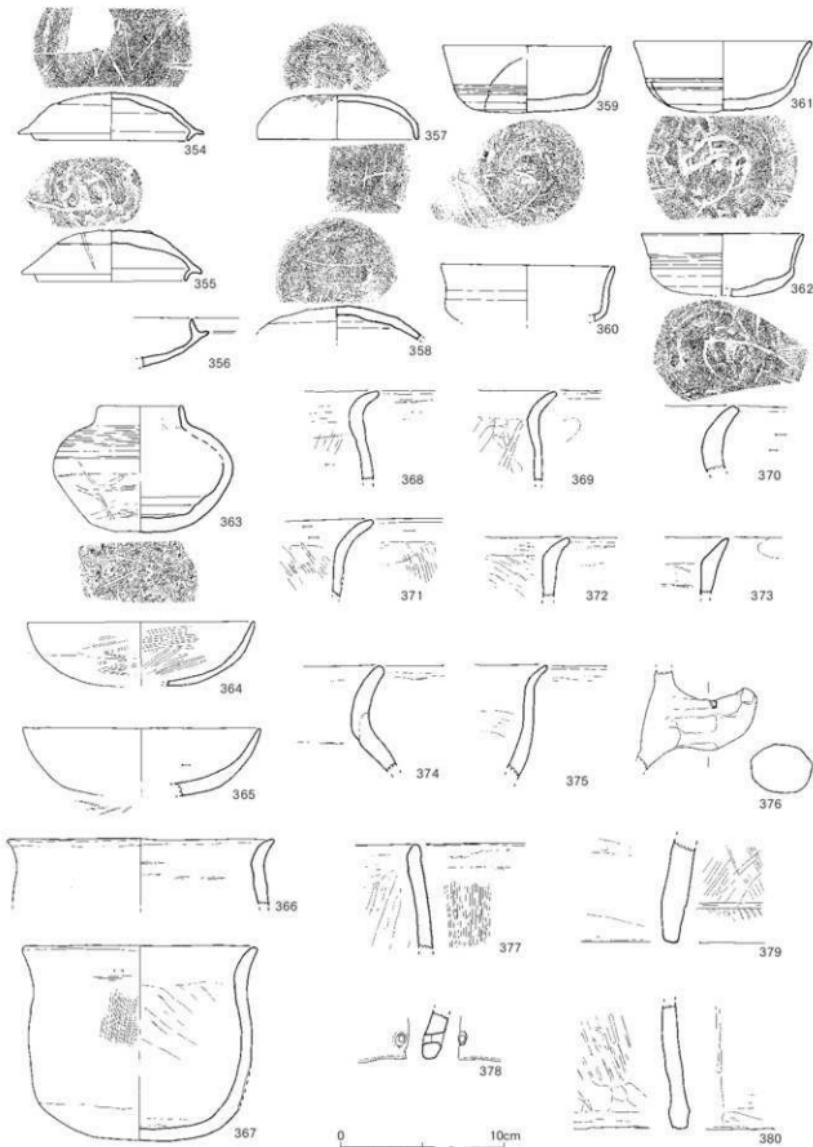


図33 SX051出土遺物実測図 (1/3)

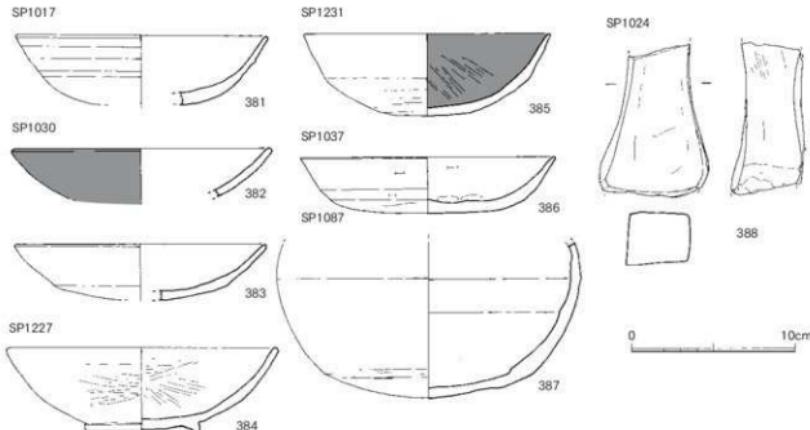


図34 上面ピット出土遺物実測図（1/3）

出土遺物 345から353は北側のSX050の出土。345は須恵器で壺。346、347は土師器の壺。348は土師器で高壺としては粗く、底としては径が大きい。349から353は土師器の壺で352、353は同一個体と思われる。鉄滓44 gがある。図33は南側の051の出土で051に比べて須恵器が多い。354から363は須恵器で、362までは壺蓋と身。361は3/4が残り、357、359、362は1/2ほどが残る。へら記号を施すものが目立つ。363は完形の小壺。364から380は土師器である。364、365は壺、366から375は壺である。377は内面の削りの方向から端部を上に図示した。カマドなどであろうか。378は瓶の底で焼成前の穿孔がみられる。379は厚手で胎土に砂粒を多く含む。外面は刷毛目で1本の沈線が入る。カマドの底と考えている。380は外面に底が剥げたような跡がみられる。カマドの底部であろう。他に鉄滓3 gなどがある。

(4)上面ピット

小ピットは全域で検出した。灰色砂質土を覆土とするものが多く、北東側にやや集り南北方向に並ぶようであるが建物として把握できなかった。この辺りは瓦器片を含むものがあり12世紀ごろの建物が存在した可能性がある。鉄滓を含むものも全域に見られるが製鉄炉周辺に集中する。周辺の土壤の影響であろう。以下、目立った遺物を記す。

381はSP1017 (C1) 出土の土師器の壺で胎土は粗く橙色を呈す。382、383はSP1030 (C2) 出土の壺で382は外面黒色の瓦器壺、383は土師器の壺。384はSP1227 (B2) 出土の瓦器碗。385はSP1231 (B2) 出土の内黒で外面は橙色の淡橙色の器面に橙色のスリップ状が残る。386はSP1039 (C2) 出土の土師器の壺。387は須恵器の壺か。焼きが悪く灰黄色である。388はSP1024 (C2) 出土の砂岩製砥石で4面を使用する。ほかにSC019 (C1) を切るSP1112からは鉄滓が充填したように密に出土した。

5. 下面の調査

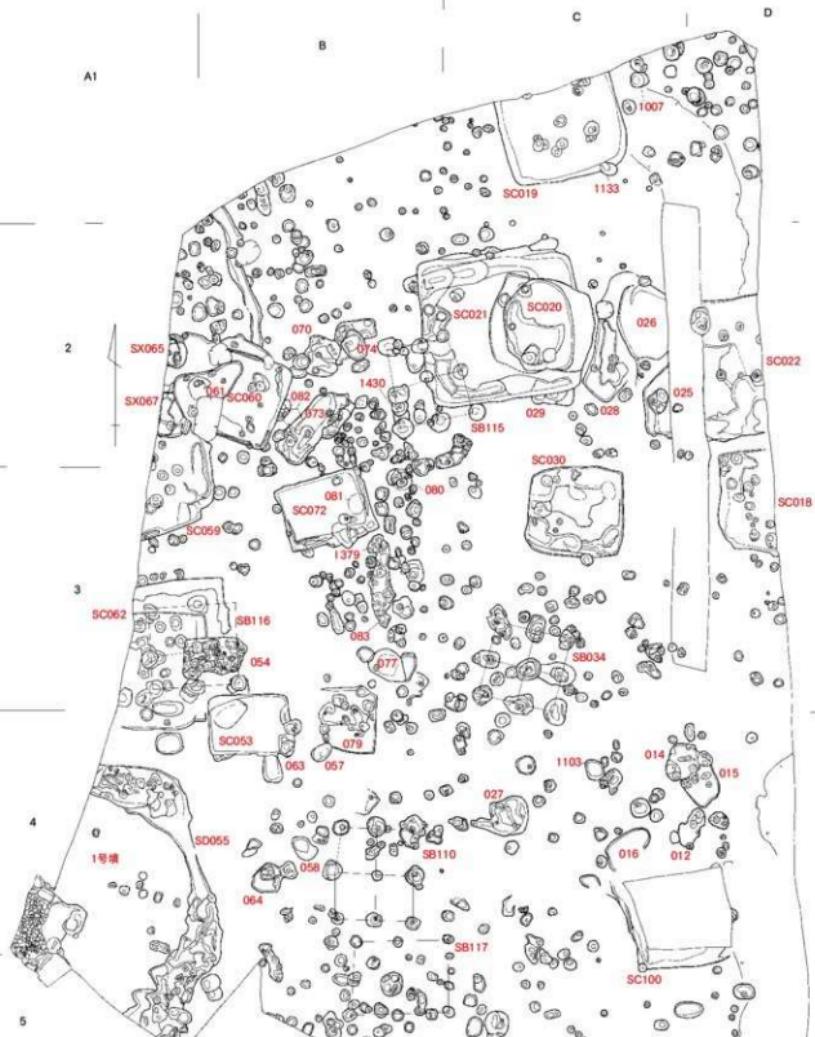


図35 下面遺構配置図：北半（1/200）

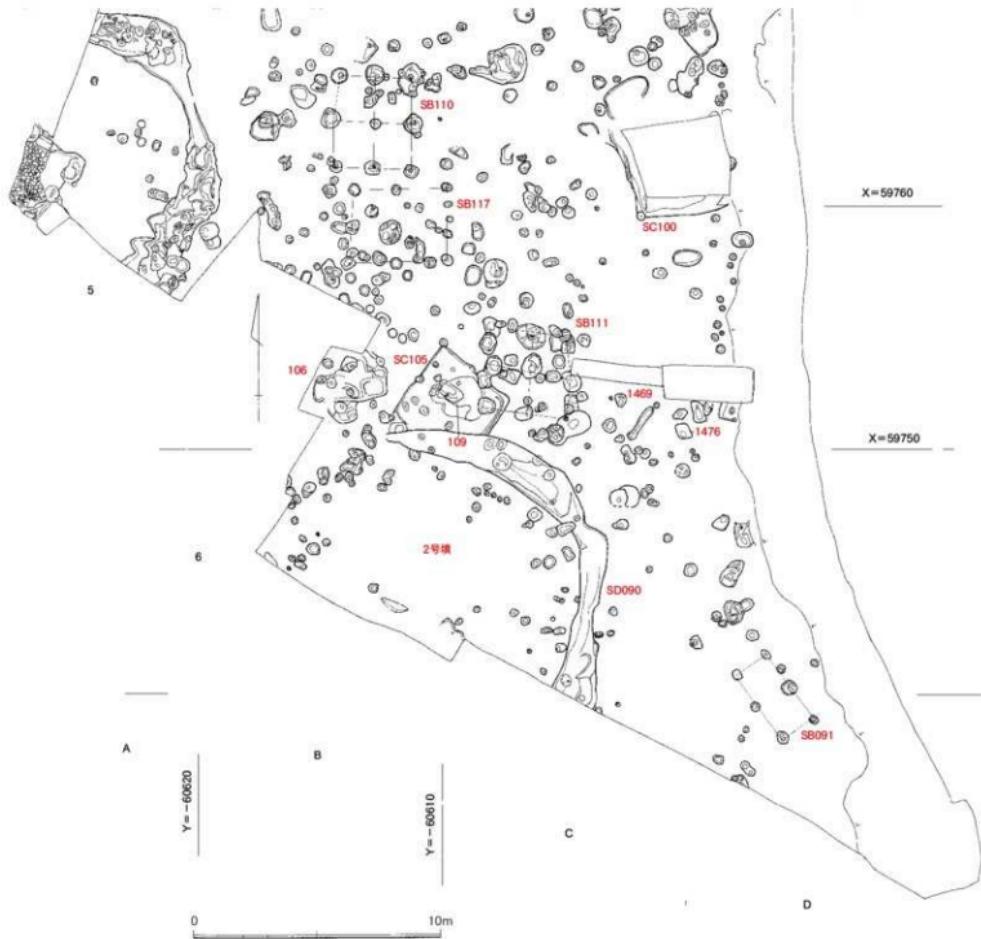


図36 下面遺構配置図：南半（1/200）

上面の調査を終え、6、7層を重機で除去した8層を下面とした。前述したが8層の灰白色砂質土面には茶褐色・黄褐色・黒褐色粘質土、暗褐色・灰褐色砂質土などの部分があり、遺構検出が難しい箇所、遺構と間違えやすい箇所があった。見落とし、掘り過ぎ等も少なからずある。遺構面は図7の等高線のように北西に向かって下がり、南側の調査区隅に沿って尾根頂部となり古墳が築かれている。南側は古墳の削平、堅穴建物が少ないことを勘案すると削平が大きいと予想される。西壁際のA2・3付近は遺構も集り全体がくぼみ状となる。検出したのは概ね7世紀代までの遺構群である。以下、堅穴建物、掘立柱建物、土坑等、古墳、ピットの順に記す。

(1) 窓穴建物

S C O 1 8 (図38・39) D3 調査区東壁にかかり、北東側をSD001に切られる方形の窓穴建物で南北4.05m、東西2.28 + a m、深さ30cmが残る。埋土は砂礫を含む暗灰褐色で検出面では地山の黄褐色土とは区別が付けやすかった。床面は一定ではなく、土層のように地山様の薄い層があり貼り床であったと思われる。

出土遺物 403 から406は須恵器で405までは壺身と蓋、406は碗である。407は土師器の取手。他に須恵器の壺胴部片がある。摩耗が強い高台片、鉄滓10gがあるがSD001の混じりか。遺構の時期は7世紀代に求められる。

S C O 1 9 (図37) C1 調査区北壁にかかり、SD001に切られる方形の窓穴建物で南北3.85 + a m、東西5.0m、深さ63cmが残る。埋土は検出面から大部分を占める暗茶褐色粘質土が中央では床面まで溜まる。主柱穴は4本で北側2本は北壁にかかる。床は北側で一部高くやや砂が混じり硬化している。南側は茶褐色土と地山の黄白色土が混じた貼り床を掘り過ぎた可能性がある。東側には径25cmほどの焼土面があり周辺に同一個体と思われる厚手の土師器壺片があった。床には小穴が多く、25×10cmほどの紡錘形が並ぶようにも見える(巻頭写真12)。土師器片2片が出土した。現地では跡等の痕跡かと考えた。また南東にはSC019を切る径60cmほどのピットSP1133があり遺物と一緒に示す。

出土遺物 391から393は床上として取り上げた。391から393は須恵器の壺蓋身で393には深い3本のへら記号がある。394は土師質の高台で北壁等からの混入と考えたい。395から398は土師器で396は須恵器の高壺を模したもの。他は壺である。399はSP1129出土で須恵器の壺身で浅い2本線のへら記号を施す。400は主柱穴SP1130出土で須恵器模倣の土師器の高壺の脚部。401はSC019を切るSP1133出土で須恵器様の形態で土師質の高壺である。倒置した状態で出土した。SC019埋土からは他に須恵器壺小片等少量、土師器壺胴部片がある。鉄滓18gは混入か。窓穴の時期は6世紀末から7世紀初めに求められる。

S C O 3 0 (図38・39) C3 方形の窓穴建物で平面4.0×3.9m、深さ25cmほどが残る。埋土は粗砂混じりの灰茶褐色粘質土で検出が難しく砂粒の混じり具合で遺構範囲を確認できた。床面は中央が高く周囲は幅80cmほどが低い。中央部は砂混じりの土が面となりやや硬化する。南側に主柱穴になりそうな小ピットはあるが北側には確認できていない。北東側に40×60cmの範囲に焼土混じりの土が広がるが薄い。西側中央にも床のレベルに35×15cmの範囲に焼土面がみられる。周囲に土師器の壺がありカマド等火床があるとすればここでであろう。焼土の下は他の壁沿いと同様に下がる。東半では須恵器の壺が、西側中央から南で土師器の壺が出土した。

出土遺物 408から411は須恵器の壺身、蓋。412は須恵器で直口の口縁部。413から416は土師器の壺である。413、416は須恵器様の作りである。413は小片からの復元。416は外面叩き、内面當て具良の後になんで、外面に薄く炭化物がみられる。以上の遺物はいずれも床近くの出土で時期もまとまる。6世紀後半から末。

S C O 2 0 (図40) C2 大部分がSC021と重なりプランが確認し難かった。また、表土掘削時に包含層として下げたために北、西側の上端プランは東側を除いて標高28.4mの下がったレベルでSC021埋土中での確認である。さらに10cmほど下げた時点でSC021の床面レベルとなり明瞭な南北にやや長いプランを確認した。最下のプランは023の番号で遺物を取り上げている。西、南壁は各レベルで確認したプランから復元した。以上を踏まえて規模は南北3.85 + a × 東西4.25 + a mで深さ60cmほど

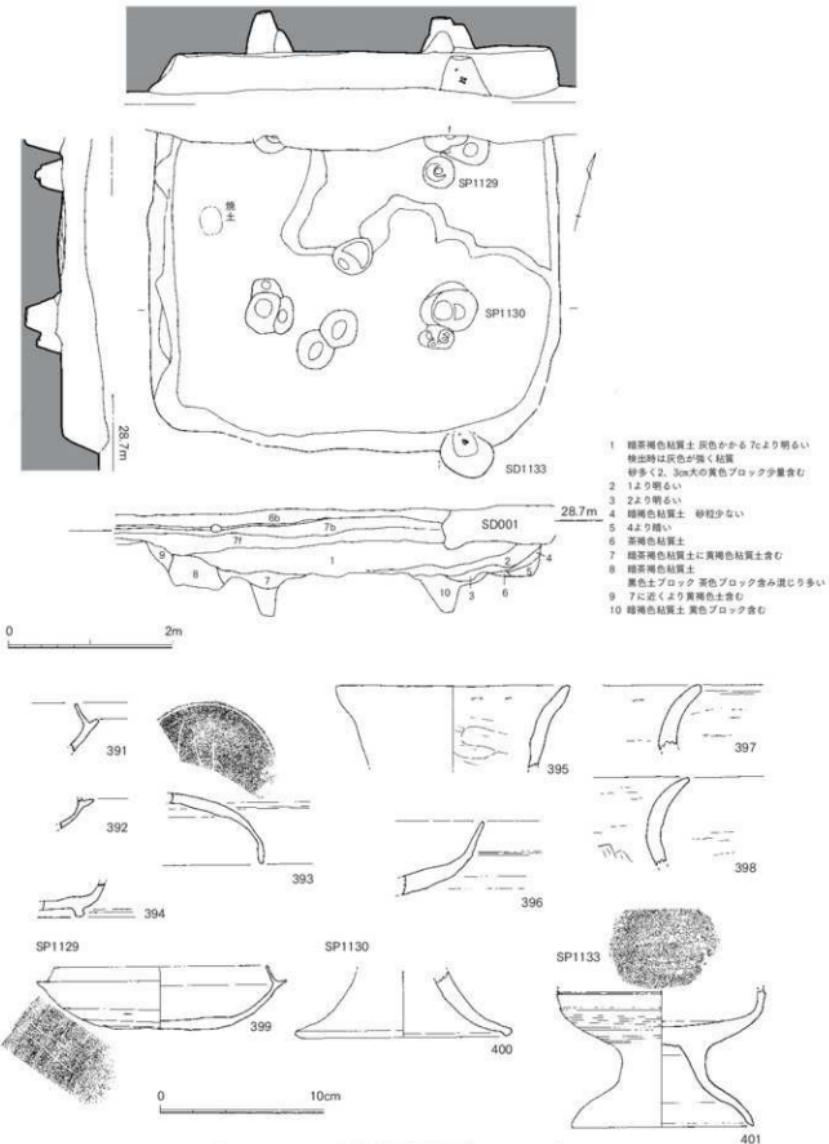


図37 SC019、出土遺物実測図 (1/60、1/3)

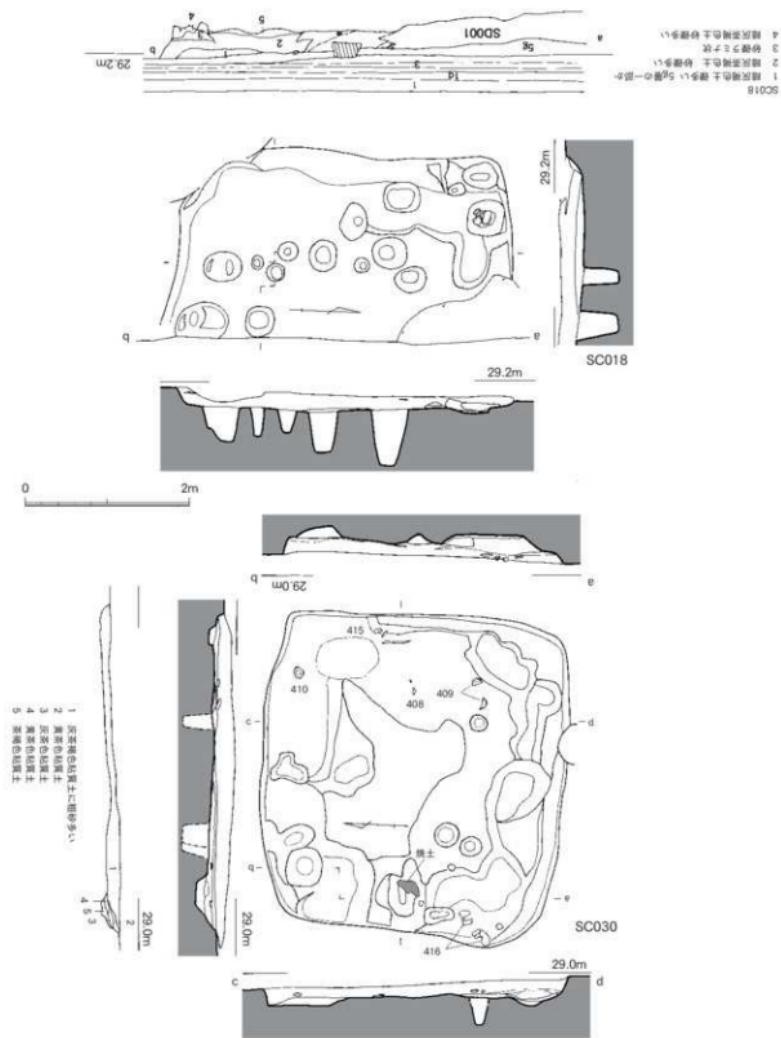


図38 SC018、SC030実測図（1/60）

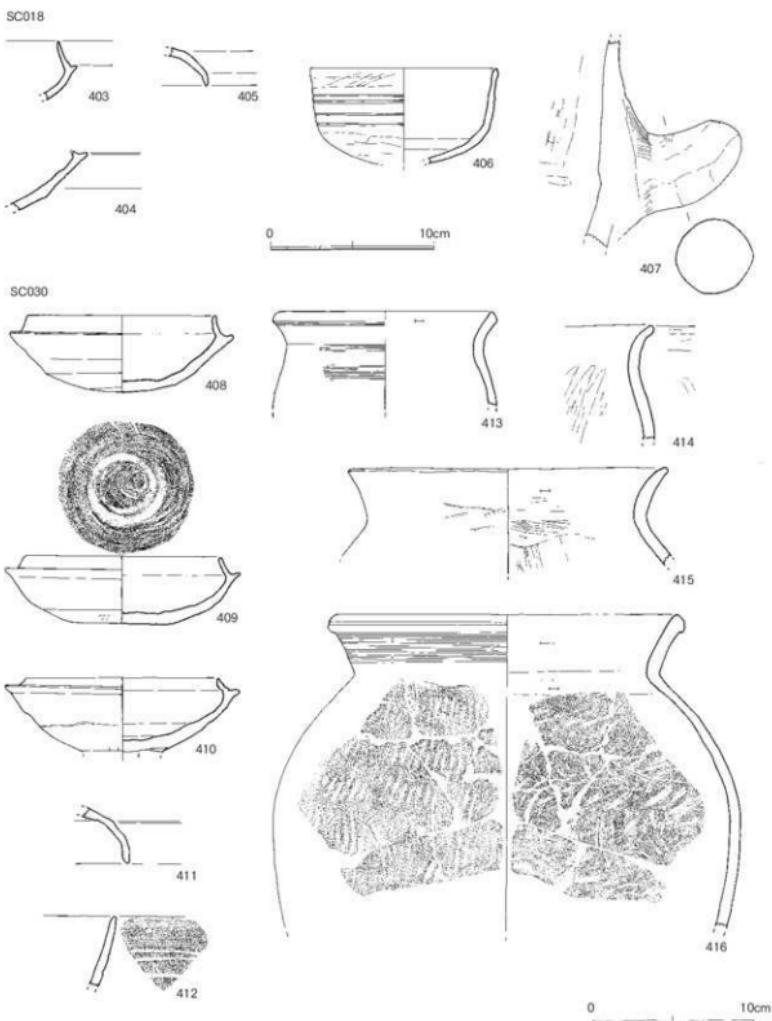


図39 SC018・SC030出土遺物実測図（1/3）

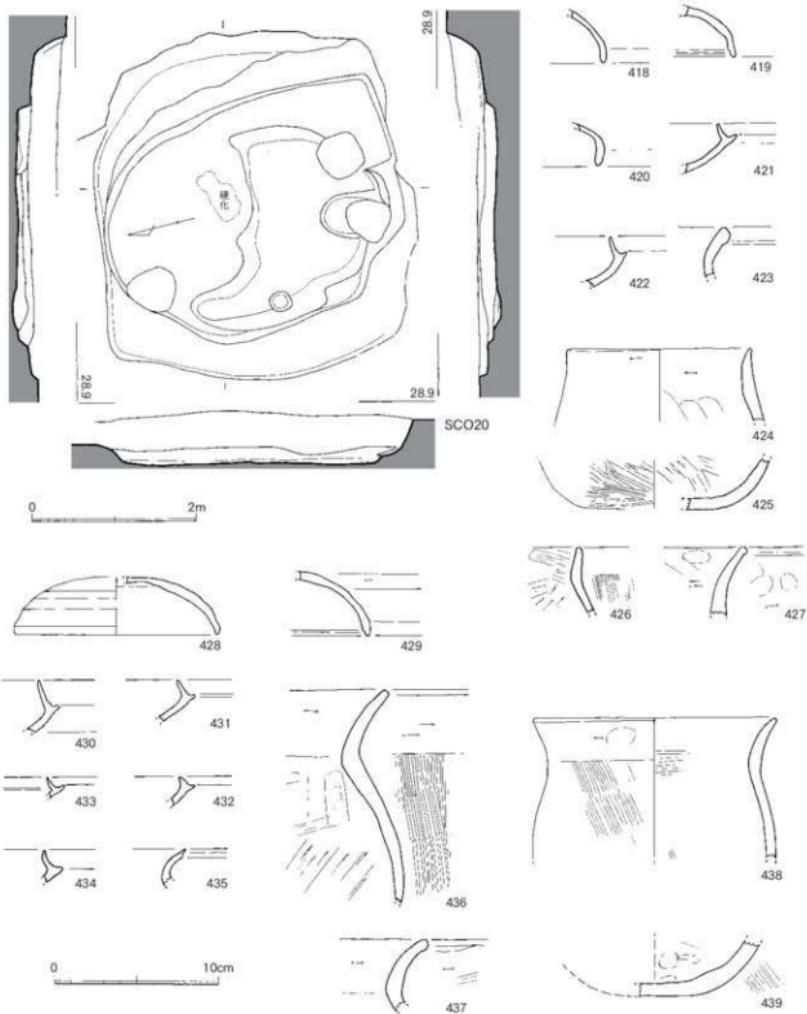


図40 SC020、出土遺物実測図 (1/60、1/3)

である。床面中央の65×33cmに硬化した範囲がある。

出土遺物 418から427は下段出土で023として取り上げた。418から422は須恵器の壺蓋身、423は生焼けの須恵器の壺、424から427は土師器の壺である。428から439は中段以下の出土。434までは須恵器の壺の蓋身で431、434は生焼け。435は土師器質だが口縁部等つくりがシャープで須恵器的。436から439は土師器の壺である。遺物は土師器壺の破片が多い。他に須恵器の壺片がある。また埋

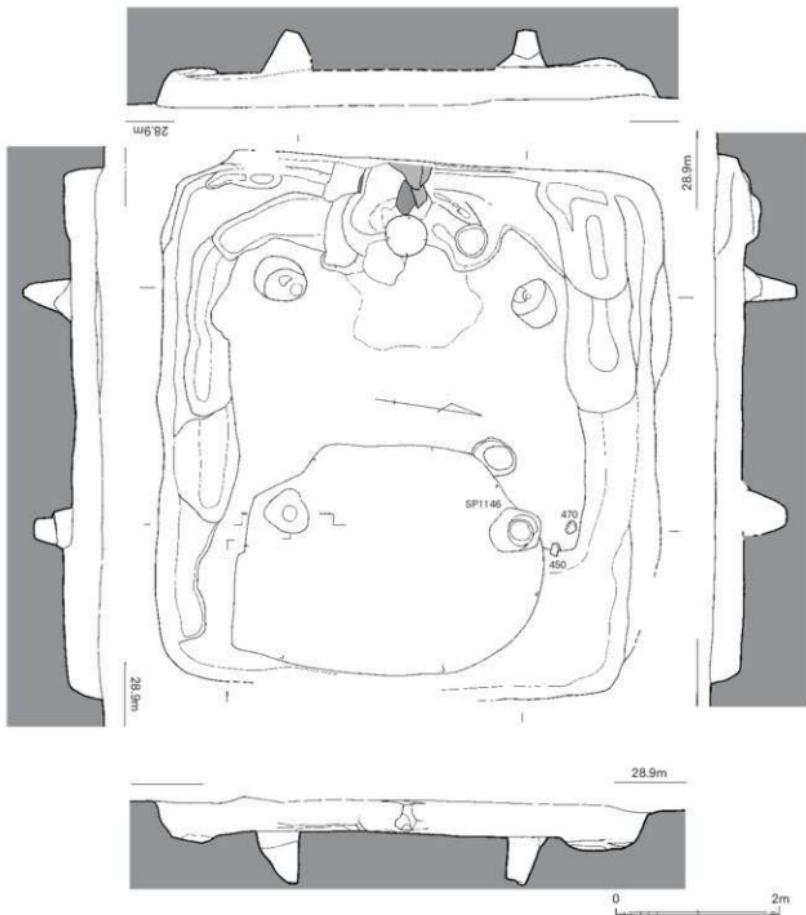


図41 SC021実測図 (1/60)

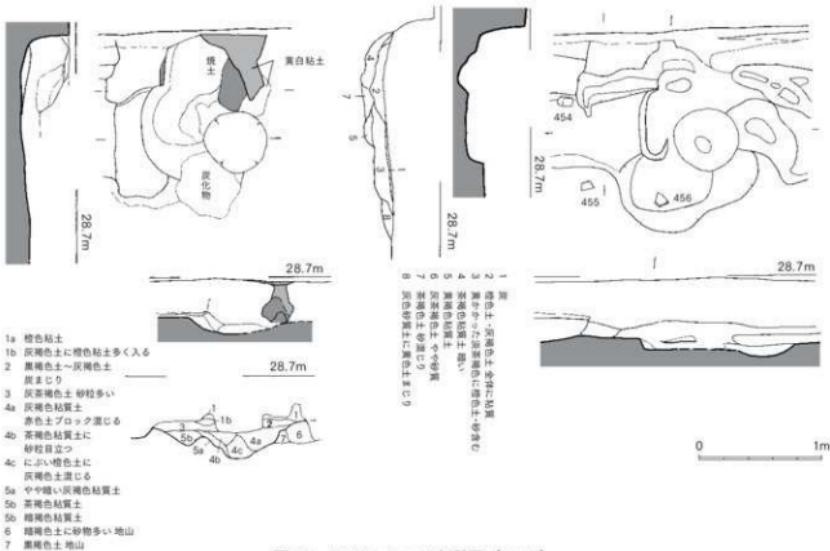


図42 SC021カマド実測図（1/40）

土下部から $16 \times 13 \times 11$ mmの炭化した種子が出土した。桃と考えられる。鉄滓121g。7世紀前半。

SC021 (図41~44) C2 方形の堅穴建物で東側をSC020に切られる。西壁中央にカマドを持つ。東西6.45m、南北6.0mと大型で深さ45cmほどが残る。表土掘削時に包含層として下がた。主柱穴は4本柱で、掘方の径50cm前後、深さ50~70cmである。1区で検出し西壁上端は2区での確認であったが、1区の範囲で西壁もほとんど出ており、写真20などはほぼ全景である。壁際には幅50cmほどの帯状の側溝がめぐる。硬化面は見られない。床面にはSC019と同様の多数のくぼみがある(写真21)。カマドは両袖の北側のみが比較的残り南側は下部の焼けた壁が残るのみであった(図42左)。2区調査時に南側の袖部分に大型のピットを確認し、これに切られていたことが分かった。袖部は黄白色の粘土で構築し、内側が赤変する。その前面の東側の50×45cmには薄く炭化物が広がる。カマド下には地山の底との間に暗褐色の砂質土が貼られる。カマドを除去して地山の面では周溝がめぐり、前面に浅いくぼみがみられる(図42右)。遺物は遺構の大きさの割には少ない。

出土遺物 440から450は床面直上の出土である。440から447は須恵器で444までは壺の身と蓋、445は高杯の脚、446は提瓶の一部。447は壺の肩部である444と447は器面が赤い焼成である。448は土師器の手捏ねで壺状を呈す。449、450は壺である。451から456はカマドとカマド前面から出土した。451から453はカマド内出土の土師器である。451は椀状で口縁部は横なでが数条の沈線状を呈す。胎土が細かく器面は平滑に仕上げる。452、453は丸底壺で研磨調整を施す。454から456はカマド前面出土で454、455は土師器の壺、456は赤く焼けた須恵器の壺である。457から462は側溝出土である。457から459は須恵器で焼きが悪い。457と458は壺の蓋身、459は壺の口縁である。460と461は土師器の壺、462は同じく取手で上方に切れ目が入る。463から469は埋土出土で463から467は須恵器の壺蓋身。468と469は土師器の壺で器面は荒れる。470は床面に接して出土した砂岩製の叩き石で側

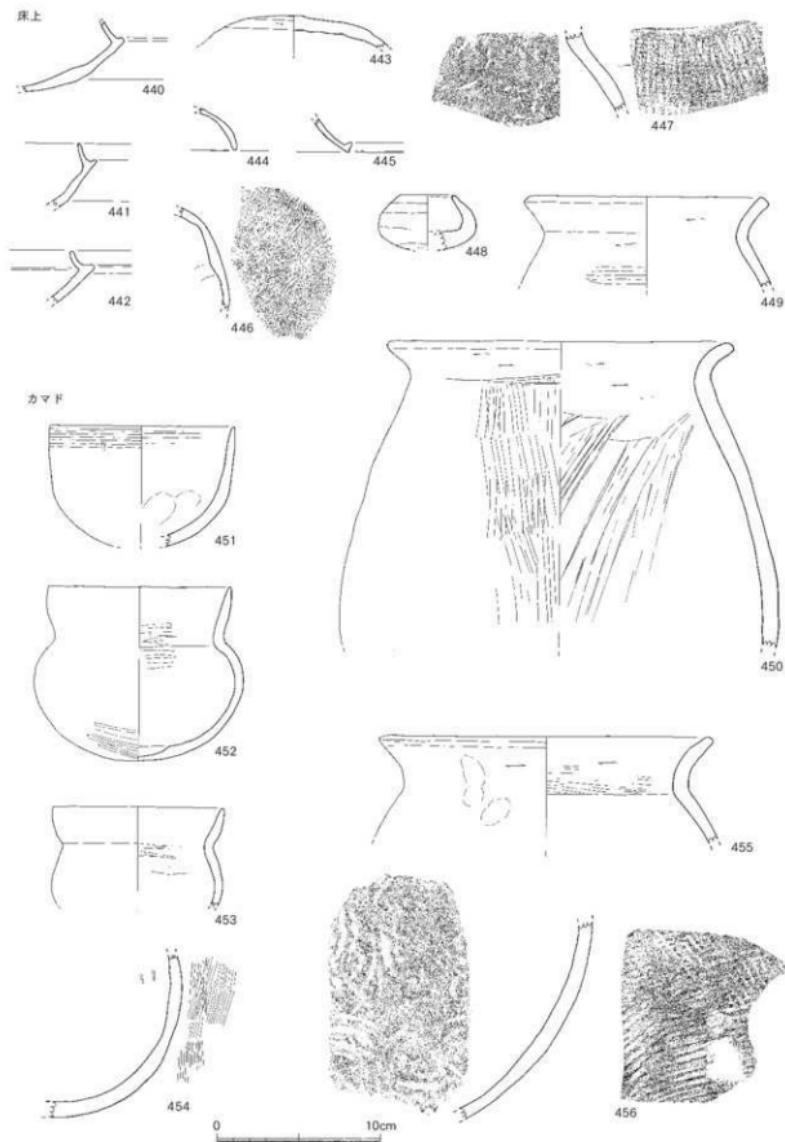


図43 SC021出土遺物実測図1 (1/3)

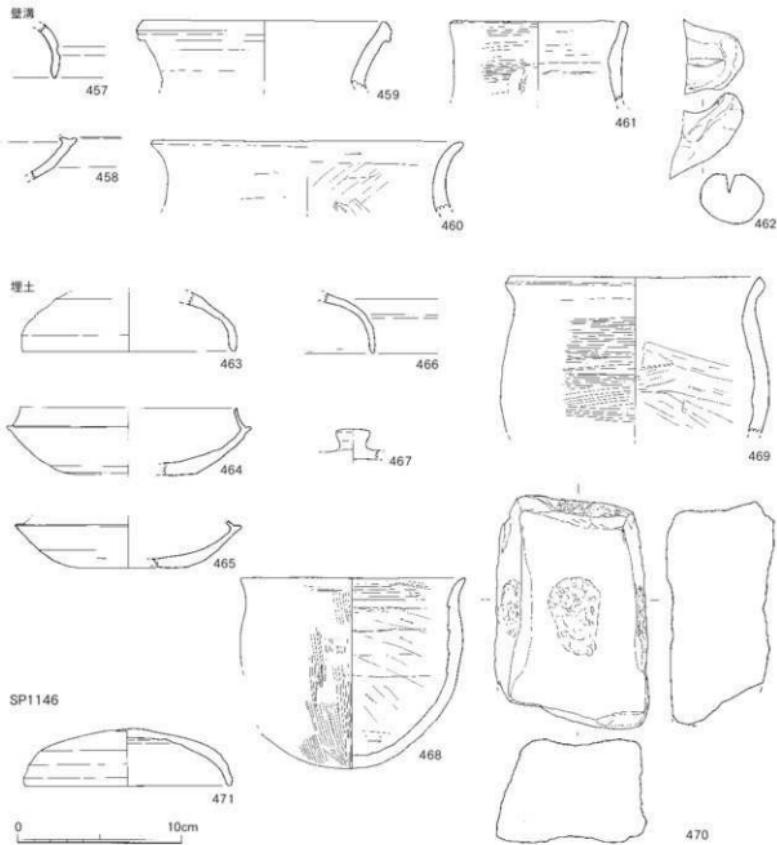


図44 SC021出土遺物実測図2 (1/3)

面に使用によるくぼみがみられる。471は主柱穴SP1146出土の須恵器の壺蓋で十字の細いへら記号を施す。遺物は造構の大きさの割には少ない。量的には土師器の壺片が多い。鉄滓83gは混じり込みか。須恵器の壺はⅢbが目立つが側溝の458はやや新しい特徴を持つ。6世紀後半から末。

SC022 (図45-46) D2 調査区東壁と試掘トレンチに挟まれたSC018の北側で、SD001掘削後の床面に平行する東西方向のプランを検出した。南北幅570cmほどで方形の竪穴建物を想定した。検出面では北側の壁沿いに焼土が広がり、濃く残る2ヵ所を炉1、炉2とし、これらを残して掘削した。中央部は30cmほどで地山となる。周囲はさらに10~15cmほど下げたが、周辺は地山の色が暗茶

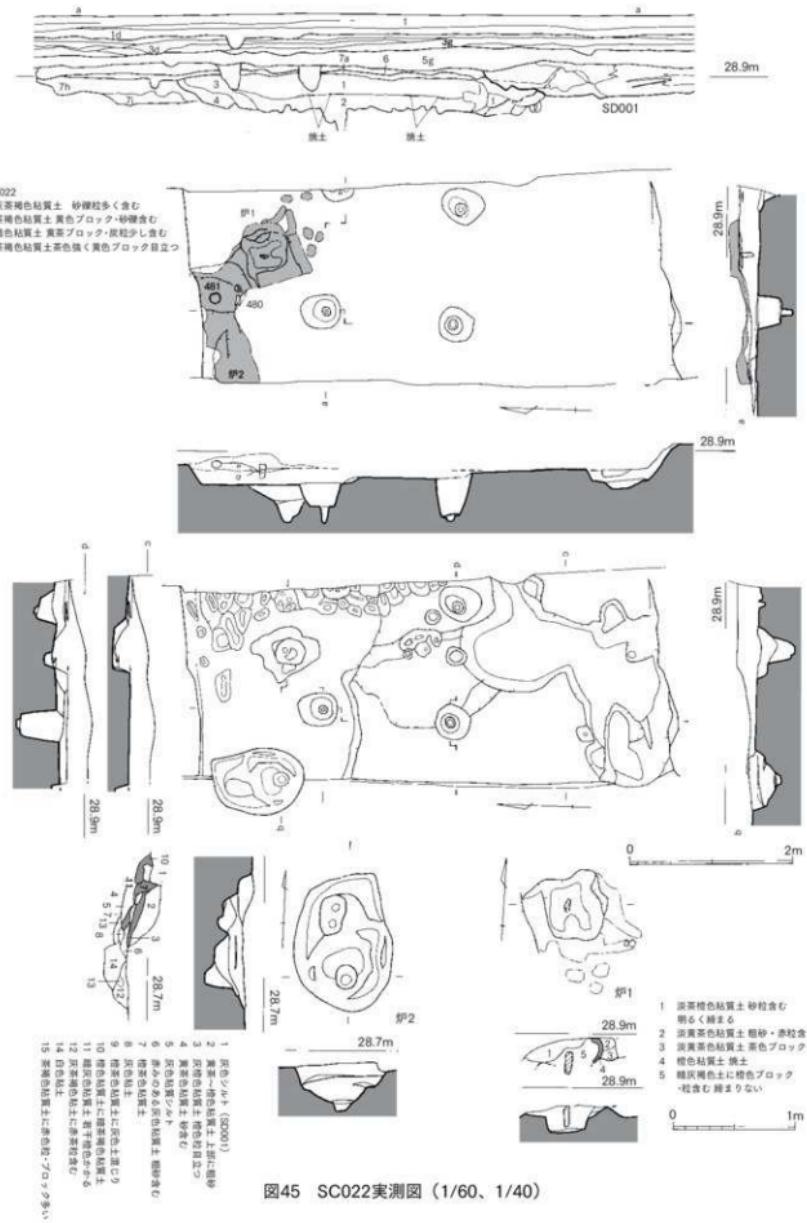


図45 SC022実測図(1/60、1/40)

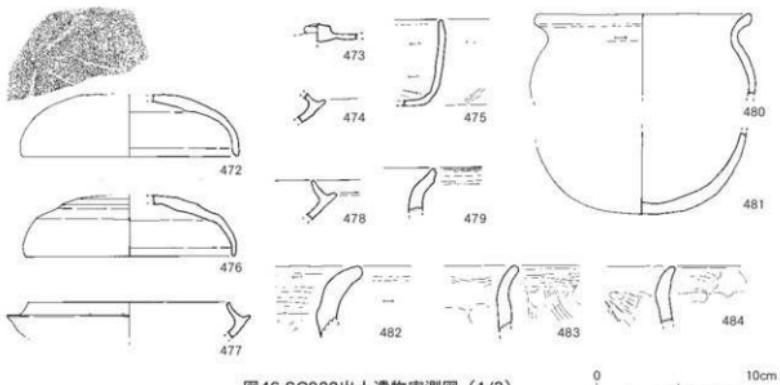


図46 SC022出土遺物実測図 (1/3)

0 10cm

褐色、黄褐色、黒色など部分的に異なり、南側と東側のくぼみ状は掘り過ぎている可能性がある。南側では少量の遺物が出土したが東側ではない。さらに南側の壁のプランも確認したが地山の違いである可能性がある。焼土は南北断面のように中央部のレベルとほぼ同じで、東壁SC022の1層下の水平に近い土層線に現れている。この面が竪穴建物の床面と捉えることができよう(上面)。炉1はこの面から径35cmほどの掘り込みがあり中央に長さ20cmほどの礫を立て、土層の2、3層を袖とするカマドと考えられる。ただし北壁からは60cmほどの距離があり竪穴プランと整合しない。炉2とした焼土は下部にある112×80cmの土坑に北から入る。北側は地山まで下げる炉1下にピットがあり、周囲からも遺物がある。床面東壁近くはSC019でみたようなくぼみが多数ある。また4本柱と思われるピットが並ぶ。上面と地山面が別造構なのか、4本柱が上面に伴うものなのかななどはっきりできていない。また、東壁上層では北壁の立ち上がりが明確ではなくレンズ状に上がり平面プランとの整合が付かない。造構を正確に掘れなかったが、カマドを持つ竪穴建物1棟はあることは明らかである。

出土遺物 472から478は須恵器の壊である474までは全体の覆土出土。474は南側下部出土。476から478は北側下部出土である。479は北側下部出土の土師質の壺で口縁帶がある。480、481は焼土直下で出土した土師器の壺、482から484は北側下部出土の土師器壺である。他に炉1周囲の焼土出土に厚手の壺片がある。良好な出土状況の遺物に欠くが焼土以下ではⅢb期までの須恵器がみられ、上層に7世紀代の物もみられる。造構の時期は6世紀後半から7世紀前半の間。鉄滓53g。

S C 0 5 3 (図47) B4 方形の竪穴建物で南壁東寄りに張り出したカマドを有す。竪穴は平面250×345cmで深さ38cmほどが残る。埋土は暗灰から灰褐色の粘質土である。東側はピット、SK063に切られる。床面北西には巨礫が頭を出し、160×85cmの広い範囲を占め、高さは最大で10cmほどである。カマドは113×83cmの縦長で深さ32cmが残り、竪穴建物の床より5、6cm高い。北半の東西の壁が赤く焼け、床に焼土が溜まる。その中央には長さ21cmの礫が立つ。その周囲に遺物が集まる。カマド前面はくぼむがやや掘り過ぎている。

出土遺物 485から490は竪穴建物出土。485は須恵器の壊、487は須恵器の高台で焼きが悪い。486、488は丸底壺で研磨調整を施し赤茶色を呈す。489は土師器で径が30cmほどと想定され、削りの方向から口縁部として図示した。やや内傾している。490は土師器の壺。491から494はカマド出土の土師器の壺である。495、496は竪穴床面近く出土の鉄製品で495は刀子か。7世紀後半。鉄滓23g。

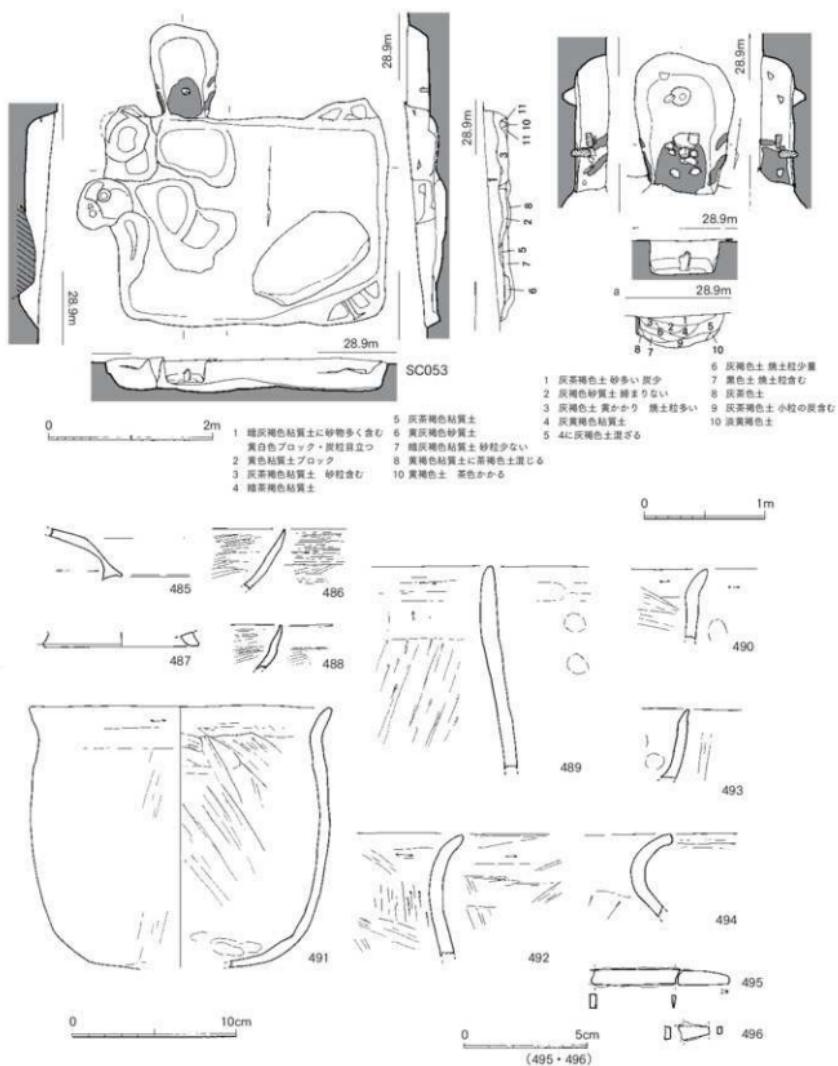


図47 SC053、出土遺物実測図 (1/60、1/3、1/2)

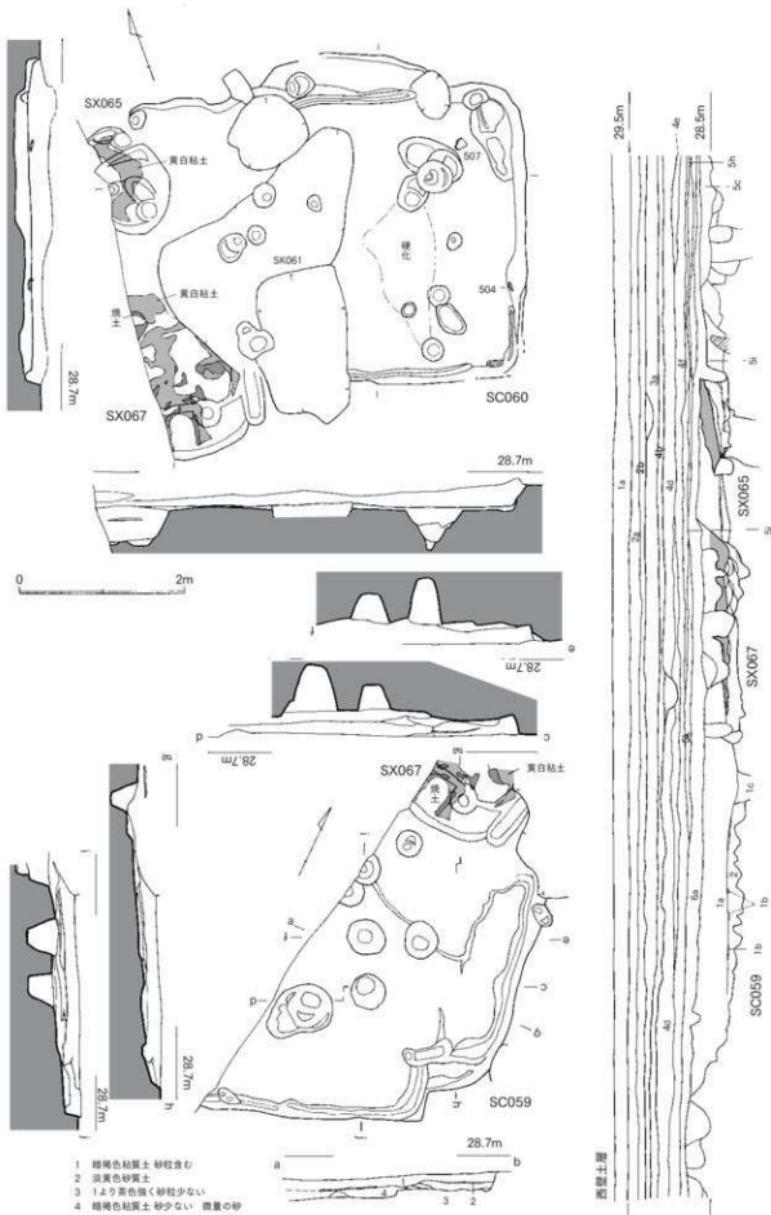


図48 SC059、SC060、西壁土層実測図（1/60）

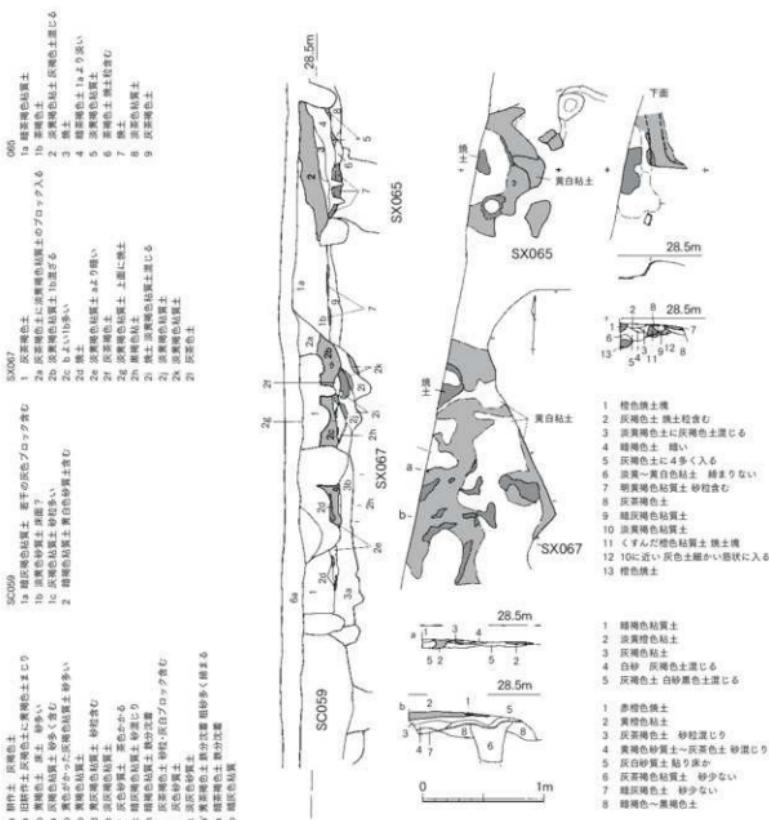


図49 SX065、SX067実測図（1/40）

SC059・SC060・SX065・SX067 (図48・49) 調査区北西隅で標高が最も低い箇所に遺構が集まる。西壁土層図48に竪穴の立ち上がりとカマドと思われる黄白色粘土、焼土の重なりをみることができる。土層では標高28.6mほどで遺構埋土だが、ある程度のプランが見える標高28.5mまで下げて遺構確認を行った。土層を見ながら検出した遺構毎にふれる。

SC059 (図48・50) A3 方形の竪穴で西側は西壁で、北は攪乱や別造構との切り合いでプランを確認できなかった。南側に二つのコーナーがあり2棟の可能性があるが、切り合いは確認できず一括している。南側と東側には壁溝があり、東壁沿いの溝は確認できた北端で曲がるようである。これに合わせて北壁も屈曲するのであれば南北3.2m、東西3 + a mの規模になる。想定した北

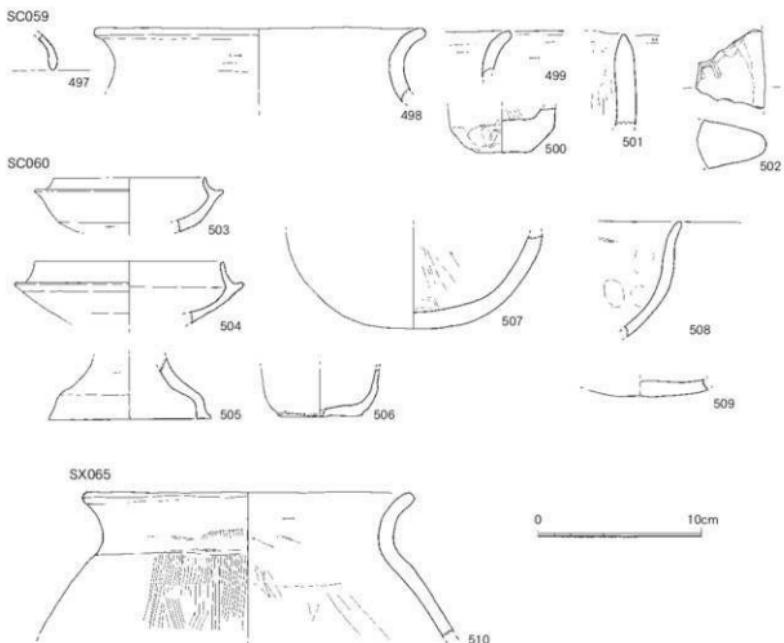


図50 SC059・060、SX065出土遺物実測図（1/3）

壁は北側に広がる粘土・焼土SX065に接する位置になる。床面は東側で壁から80cm付近で小さな段があり、南壁沿いの壁溝の屈曲の延長にあたり、切り合いの痕跡の可能性もある。深いピットもあり主柱穴であろう。埋土は暗灰褐色粘質土で下部は黄色から茶色ブロック、黄白色砂質土を含む。地山面には細かな凹凸があり下部は貼り床とも考えられられる。上下層の差は明確ではないが、想定したレベルは北側の1層下面にわずかに見られる黄白色土層と一致する。SX065がSC059のカマドの可能性も考えたが関係は不確かで別遺構とした。遺物は少ない。

出土遺物 497は須恵器環蓋の小片、498、499は土師器壺片である。500は厚い底部状で外面に明るい橙色の顔料底も含めた全体に残る。天地不明。501は直口の土師器で径は7cmくらいか。502は砂岩の砾石。他に叩き、刷毛目調整の壺胴部片がある。

S C 0 6 0 (図48・50) B3 SC059の北東に方形プランを確認した。南北長3.6mで西側は搅乱、SK061などに切られ不明である。壁沿いには壁溝がめぐる。北壁の延長にSX065に達する落ちがありSX065または067をカマドとする可能性も考えたが北壁の壁溝の曲がりなどを見るとほぼ方形のプランを考えた方が自然である。柱穴は北東に深いピットがあるがまとまらない。中央から南に砂を多く含む硬化面があり、深さ21cmほどが残る。硬化面から地山の灰白色砂質土まで7、8cmが貼り床である。北側は硬化面がなく地山まで下げている。埋土は暗褐色粘質土を主とする。また東壁中

央部に白色粘土だまりSX082があり当初カマドと考えたが、後世の別遺構である。

出土遺物 須恵器の壺身504、土師器の壺507が床面直上である他は埋土出土である。503は須恵器の壺身で西壁際の床面直上である。505は同じく台付き壺等の脚部、506は須恵器で小鉢状である。507は土師器の壺の下部で、外面は2次焼成で赤変している。508、509は同一個体と思われる土師質の鉢である。丸平底で他に見ない。他に須恵器の壺の破片、土師器の壺片がある。鉄滓5gがあるが混じり込みか。

S X 0 6 5 (図49・50) A2 西壁際で100×50cmの範囲に黄白色粘土塊を確認した。黄白色粘土を下げるに西壁際が下がり（東西土層国1～6層）東側に袖状の高まりを確認した。床と袖状の内側が焼けて赤変し、その前面の40×30cmの範囲に炭化物が広がる。この状況から南側に開くカマドと判断した。対応する西壁では黄白色粘土5層下の焼土7層の南側延長が1b層下面に焼土として伸び、さらに南はSX067に切られる。この範囲を埋土とする堅穴建物のカマドと考えられる。その北壁に構築されたとするとSX065から東へ2mほど伸びる段落ち（図48上）は堅穴プランの候補と言えよう。SC060との関連を検討したが横長のプランとカマドの方向が合わないと考えた。東側は攪乱、他遺構もあり確認できなかった。

出土遺物 炭化物の広がりの横から土師器の壺の破片510が出土した。外面刷毛目、内面削り調整である。他に土師器壺、瓶片がある。

S X 0 6 7 (図49) A2 SX065の南側、西壁沿いに、100×200cmの範囲に途切れながら黄白色粘土と焼土が広がる。東側はSK060と攪乱に切られる。南側では残っていた粘土は厚くとも5cmほどでb土層の3から5層は堅穴建物の貼り床ではないかと考える。焼土の塊があり、西壁にはくぼみに溜まる焼土の上に20cmほどの黄色粘土がみられる。この部分がカマド本体になると考えられるが、表土掘削時に削っている。その北側の土層には遺構の立ち上がりがあり、SX065と同様に北壁にカマドを持つ堅穴建物と考えられる。SC059とは西壁土層で明瞭な違いがみられず、このカマドとすれば一辺5mの規模となる。遺物は土師器片が少量出土している。

S C 0 6 2 (図51) A3 西壁沿いのSC059の南で検出した堅穴建物である。南側の1号墳周溝とは60cmの比高差がある。SK054に切られる。北東にコーナーを持つ方形プランを確認した。南側は西壁土層のように次第に北へ下がりはっきりとした壁がない。わずかにみえた段を南壁としたが不確かである。また北側も土層では標高29.75mで確認できるはずだが、表土剥ぎで29.55mまで下げて検出している。北から東側の壁際には幅25～50cmほどの壁溝がめぐり、底には20cm大の浅いくぼみが途切れなくみられる。北壁から120cm、東壁から80cmの内側は壁と平行に7cmほどの方形の落ちがあり側溝との間はベッド状となる。図には示していないが、ベッド状およびその内側の床にも細かなくぼみが多いが溝内ほどではない。ベッド状の内側の地山は黄白色の砂質土に礫が露出し、南側は暗黒色土が地山の一部である。径100cm以上の大型のピットと60～70cmほどの小型のピットがあり、大型のものは別の建物の可能性があり掘立柱建物の項で扱う。4本柱を想定しているが特定できない。また西壁のSC062の1層の下面には黄色砂質土がみられ、掘削時には所々にこの土が点在する状況があった、これはベッド状と同じレベルであり、この面が床とすることも想定されよう。その場合、2層は貼り床またはベッド状の内側は別の遺構となる。

出土遺物 遺物は少ない。511から516は須恵器の小片。514までは壺で512は赤焼けである。515は壺、516は薄い器壁に2条の沈線を施す。517から519は土師器で517、518は壺、520は削りの方向から口縁にしたが天地不明。521は鉢状。他は土師器小片がある。6世紀末から7世紀初めか。

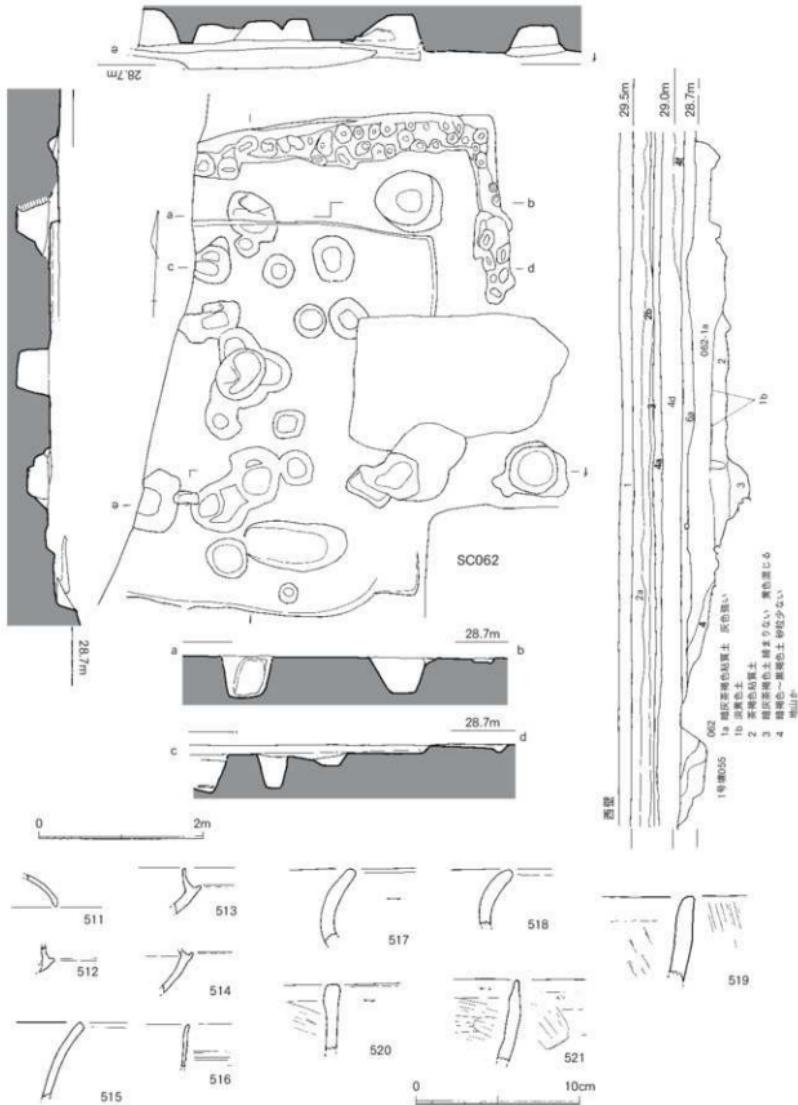


図51 SC062、出土遺物実測図 (1/60、1/3)

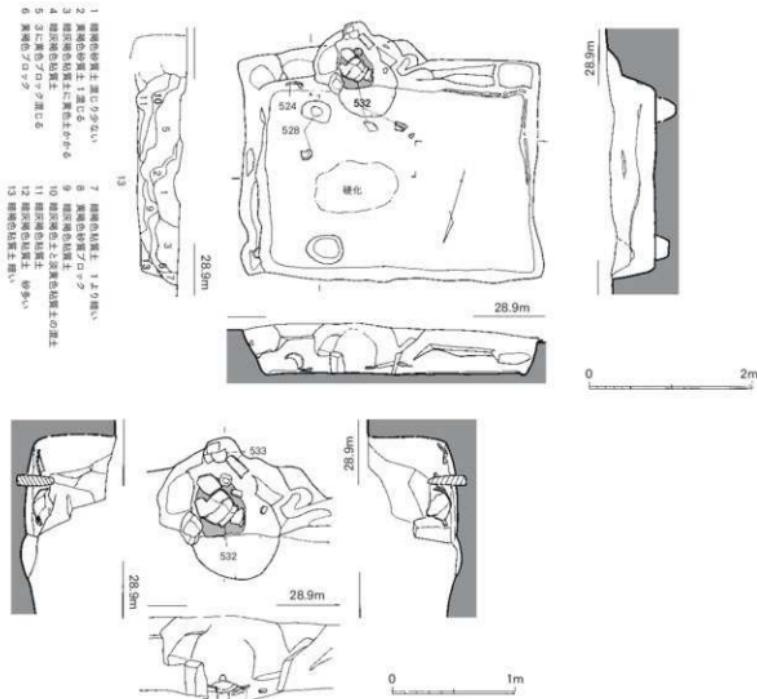


図52 SC072実測図（1/60、1/40）

SC072 (図52~54) 平面長方形の堅穴建物で南側にカマドと棚状の段がある。2.95×3.55m、深さ62cmが残る。覆土は暗灰褐色粘土質を主とし、土層のように壁際から埋まる。床の南西隅付近には細く浅い側溝がみられるが他では確認できなかった。中央東よりの100×60cmほどの範囲が硬化している。主柱穴となるビットは確認できなかった。南壁東よりにカマドがあり、両側には奥行き20~25cmの棚状が設けられる。カマドは前方が幅60cm、奥行は70cmほどで奥壁はやや被り気味である。写真では奥に横穴を掘っているが黒色の地山を掘り過ぎている。東側の袖には幅18cm、高さ40cmほどの石を立てる。西側も丁度その範囲が空いており立石を袖としていたと思われる。中央底は炭混じりの橙色の焼土が溜まる。中央には先が尖り気味の幅10cm、長さ33cmほどの支石がみられ、その前面には壺532、後ろには瓶533が割れて横たわっていた。遺物は他の堅穴建物と比べると多い。

出土遺物 522から531は下層出土で概ね床から10cmほどからである。228までは須恵器。522は坏蓋の小片、523は小鉢、524は高坏で南壁を背に立った状態で出土した。やや焼成が甘い。525は壺、526は坏。527は小片からの復元で径は不確か。器壁は薄手で外反する。528は床上とビットの破片が接合した。鉢でやや焼成があまい。529は土師器の坏で厚手で暗灰褐色を呈す。内面に刷毛目が顯

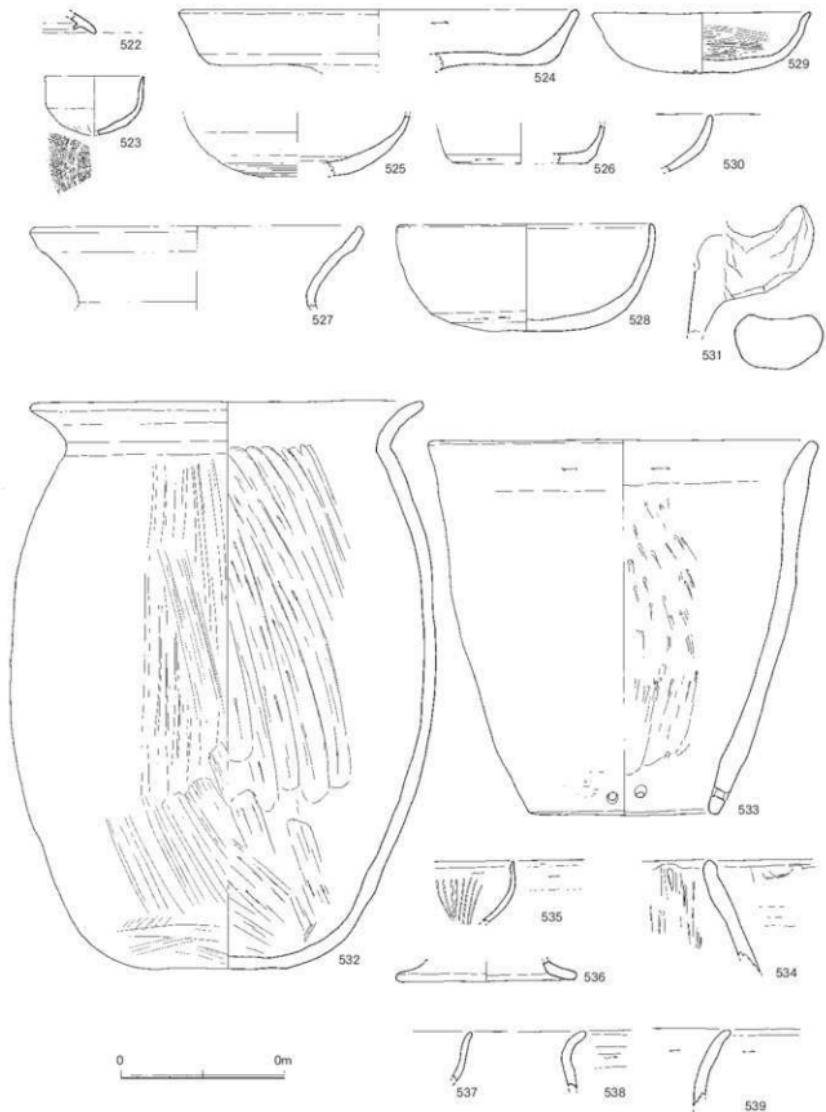


図53 SC072出土遺物実測図1 (1/3)

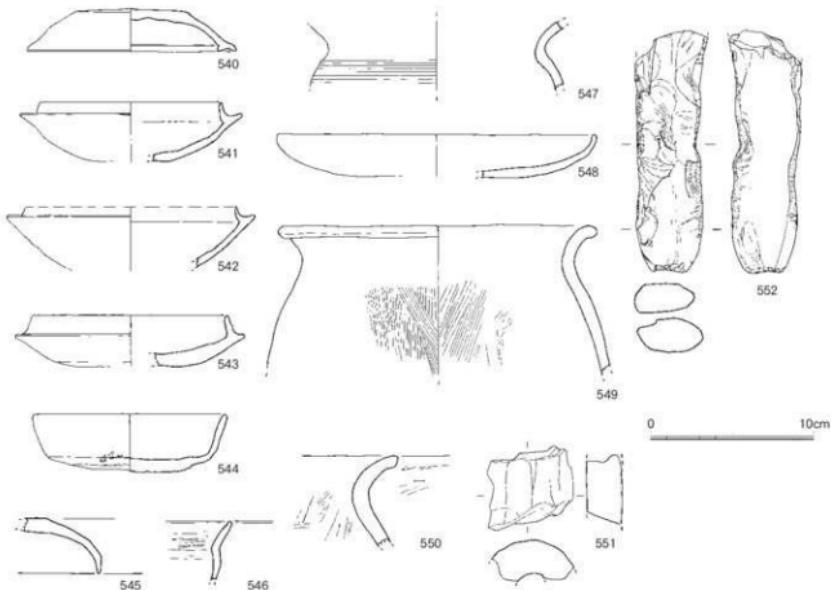


図54 SC072出土遺物実測図2 (1/3)

著。530は土師器の壺。531は取手。7世紀後半か。

532から539はカマド出土である。532は立石の前の破片とカマド前面の堅穴床の破片が接合した。厚手の壺で2/3が接合した。533は立石の後ろから出土した壺で1/4が残存する。底近くに焼成前に穿孔するが数はわからない。535から538はカマド奥の出土。535は都城系の土師器の壺で内面に暗文がみられる。536は土師器の脚部で胎土は精製。537は外反する須恵器で高壺か。538は土師器の壺。534は土師器で削りの方向から図化した。口径17cmほどである。539は土師器で薄手だが壺か。

540から552は埋土上層出土である。545までは須恵器の壺で540は完形。550までは土師器。547は土師質の壺で肩部に搔目を施す。548は浅い壺で胎土が精良。549、550は壺である。551は羽口で胎土は細かい。552は粘板岩の石器で両側を打ち欠いて握りに丁度良い形にしている。先は破損する。片面を後から砥石として使用したようである。鉄滓は95g。

SC100 (図55) C4 2区と3区の間で電柱の支えがあったため残地として残した範囲の周りに方形の落ちを確認した。確認できたのは2面のみであり堅穴建物であるか不確かである。東側はS D001で、北は田面で削られている。南北は3.7m + a、東西3.5m + aほどで深さ30cmほどが残る。埋土は灰茶褐色土である。西側に壁溝状がみられるが途中で立ち上がり伴うものかも不確かである。東西土層の東の立ち上がりが緩やかで違和感がある。南北土層は拡張する前のもので平面図とは合わない。遺構とは関係ないが、南北土層に水田を広げる前の落ちがみられる。

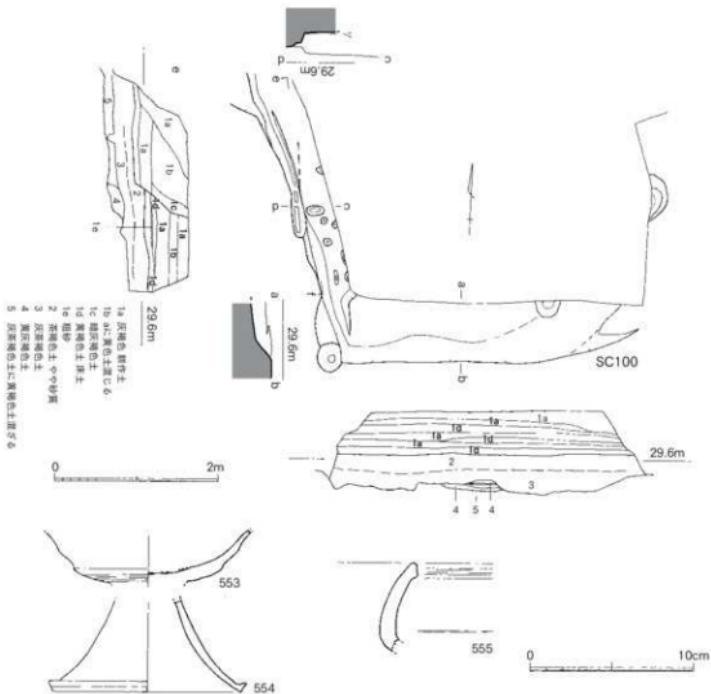


図55 SC100、出土遺物実測図（1/60、1/3）

出土遺物 553、554は土師質の高坏で接合しないが胎土、色調が同様で同一個体と考えられる。器面は荒れ気味。坏外面に搔目状がみられる。内面は荒れる。555は須恵器の壺で焼きが甘い。

S C 1 0 5 (図56) C5南側の高い位置にあり2号墳の周溝に切られる。堅穴建物で最も古い。平面 3.65×3.45 mの方形プランで深さ25cmほどが残る。埋土は黒褐色から灰褐色土で他の堅穴より黒い。床面には東壁に側溝がみられる。中央から北へ下がるが5cmほどである。小ピットはあるが主柱穴は確認できない。東側に須恵器のかたまって出土した。

出土遺物 556、557は土師器の高坏である。556は刷毛目調整のあとに暗文風に研磨を施す。脚部内面は細かな刷毛目が残る。557外面は端正な縱刷毛目の後、下部に横方向に3本の研磨筋を施す。焼成前の穿孔を3方からになりそうな位置に2ヶ所施す。558は台付き鉢の脚か。粗い刷毛目である。559は西側に正置された土師器の鉢で外面は粗い刷毛目と擦痕、内面はなでて木口痕がみられる。560は土師器の鉢で器壁が薄く口縁部は不整形で波打つ。内面には深く鋭い擦痕がみられる。他は小片のみである。5世紀。

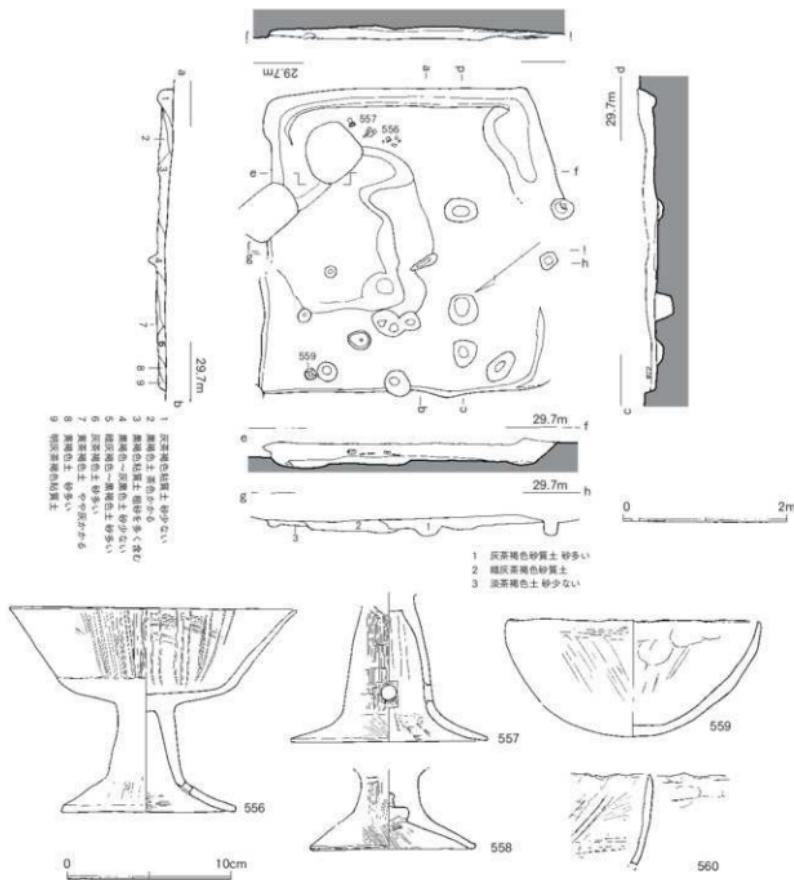


図56 SC105、出土遺物実測図 (1/60、1/3)

(2)大型土坑

竪穴建物の一部にもなりそうな規模の土坑をまとめる。

SK054 (図57) B3 SK052に切られSC062を切る。平面240×190cmほどの長方形不明瞭なプランで、深さ5cmほどで40、50cm大のピットと10~20cm大のくぼみが密にみられる。覆土は黄色土と暗褐色土灰白色土が混ざる。大ピットは深く、別の遺構に伴う可能性もある。他の竪穴建物の床に細かなくぼみがみられ、その一部を想定した。

SK061 (図57・58) B2南西端 調査区北西側でSC060、SX067を切り擾乱に切られる。平面

がやや丸みを帯びた三角形の浅い土坑で方形堅穴の床一部の可能性もあるのではないかと考えている。方形であれば2.8×3.0m以上となろう。深さ15cmほどで埋土は暗褐色で砂質が強い。

出土遺物 561から564は須恵器で561、562、564は壺身と蓋、563は壺の底部である。565は土師器の甕。566、567は床出土の鉄製品で566は断面円形、567は隅丸方形に見える。同一個体として取り上げたが接合しない。他に土師器甕、坏片、鉄滓308gがある。8世紀代の遺物があり切り合は整合する。

SK079 (図57・58)B4 SC053の東で方形プランを確認した。西側は斜面で失われる。南北270cm、東西220cm以上の規模で深さ10cmほどが残る。覆土は暗褐色粘質土で少量の炭を含む。中央部が深さ20cm前後不整形にくぼみ、深いピットも見られる。西側に40×30cmの範囲に焼土面がみられるが間連があるかは不明である。

出土遺物 568は須恵器で瓶底か。569土錘で胎土が細かい。他に土師器甕、瓶片がある。

SK106 (図57・58) B5 調査区南側の2号墳周溝に近接する。南東隅にあたる方形区画を確認し調査区を拡張したが西側、北側ははっきりとしたプランを確認できなかった。暗灰褐色土を埋土

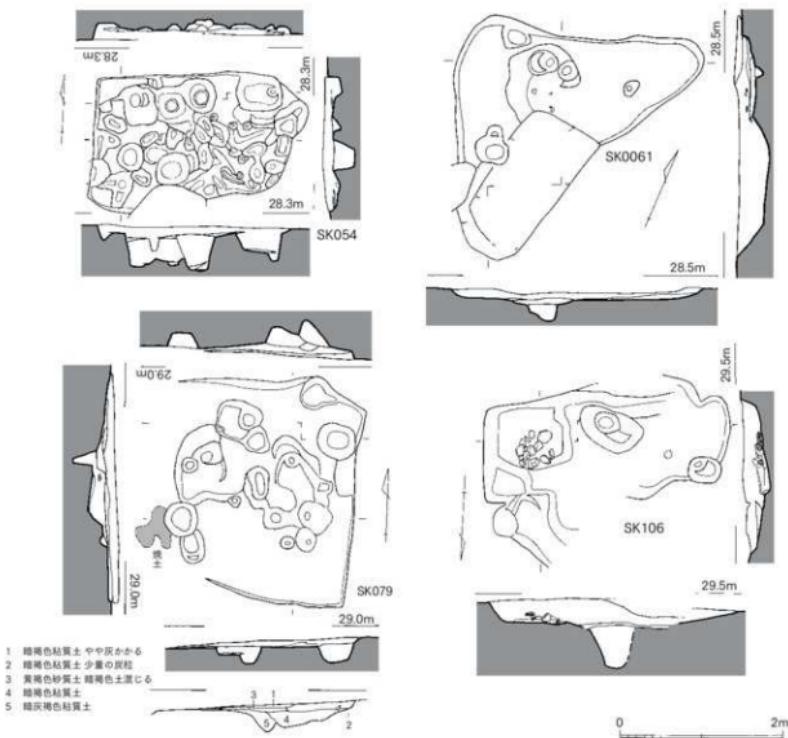


図57 SK054、061、079、106実測図（1/60）

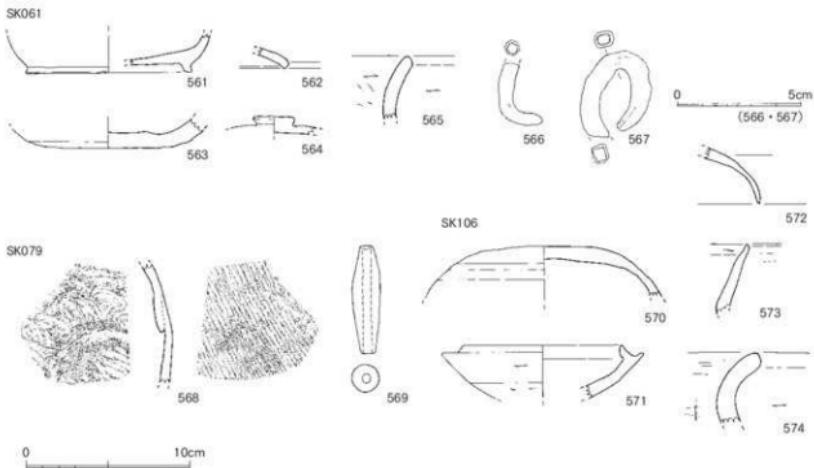


図58 SK061、079、106出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

とし、深さ25cmほどである。南東隅の60×50cmに15cm大までの碟の集中があった。焼土、炭化物の集中はない。

出土遺物 570から572は須恵器の坏。573は土師器で丸底壺か。胎土は細かな砂が多い。574は土師器の壺。他に土師器壺片、鉄滓54gがある。いずれも埋土出土である。

(3) 挖立柱建物

掘立柱建物7棟を復元したが疑問があるものもある。また概要にも記したがピットが集まるものの建物として展開できないものがある。検出できなかったピットもあると思われる。

S B O 3 4 (図59・62) C3 調査区中央で確認した2間2間の総柱建物で長軸はN-13° -Eをとる。建物規模は南北3.1m、東西3.0mほどである。柱間隔は南北140~170m、東西150~160mとややばらつきがある。柱穴は隅丸の方形か長方形で、1辺60から110cm、深さ45~65cmと比較的大きく深めである。柱痕跡は確認できていない。出土遺物は少なく小片のみ。575、576は須恵器の坏で576は器面明橙色。577は土師質で外反する口縁部に口縁帯を作る。578は土師器の壺。579は鉄の極薄い板状で4×2cmほどの外形のどこが生きているのか不明。他に土師器片がある。

S B O 9 1 (図61) D6 調査区南端部で確認した1間×2間の掘立柱建物で長軸はN-37° -Wをとる。建物としてよいのかやや疑問が残る。建物規模は桁行3.25m、梁行1.55mである。柱間隔は桁行1.5~1.75mとばらつきがある。柱穴は円形で、長径30から40cm、深さ15~45と比較的小さく浅い。出土遺物は土師器の小片3点、鉄滓91gのみである。

S B I 1 0 (図59・62) B4南 調査区中央で確認した2間2間の総柱建物で長軸はN-3° -Wをとる。建物規模は南北3.8m、東西3.2mである。柱間隔は南北1.8~1.95m、東西1.4~1.6mとほぼ一定

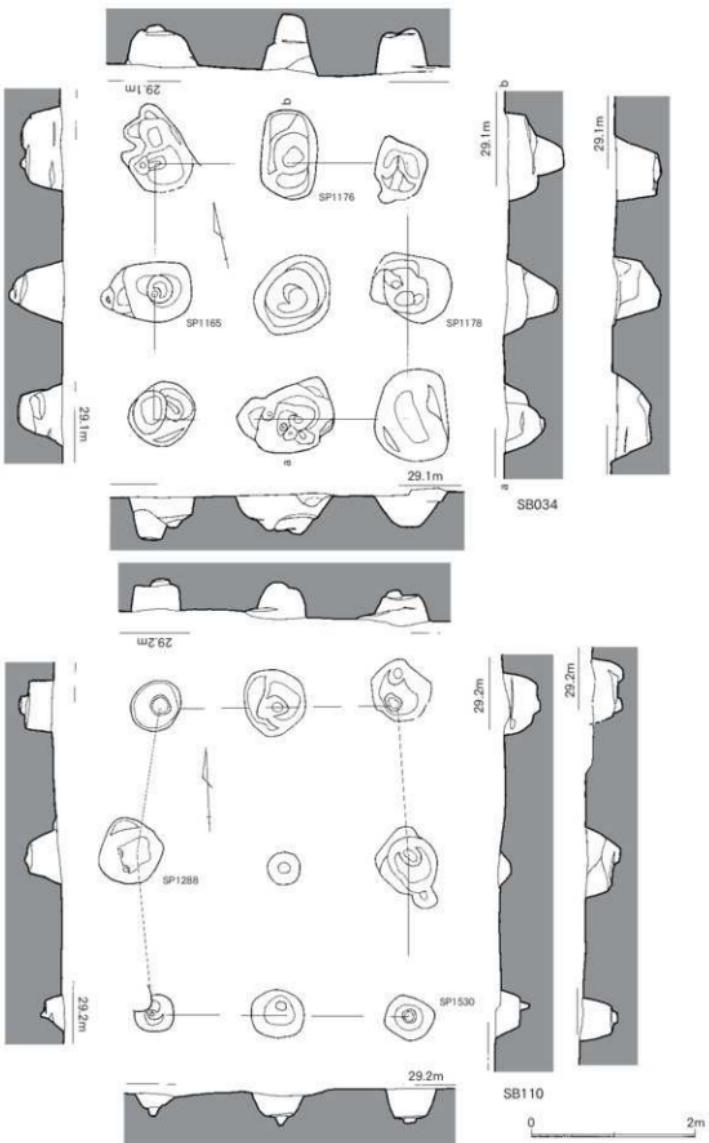


図59 SB034、110実測図 (1/60)

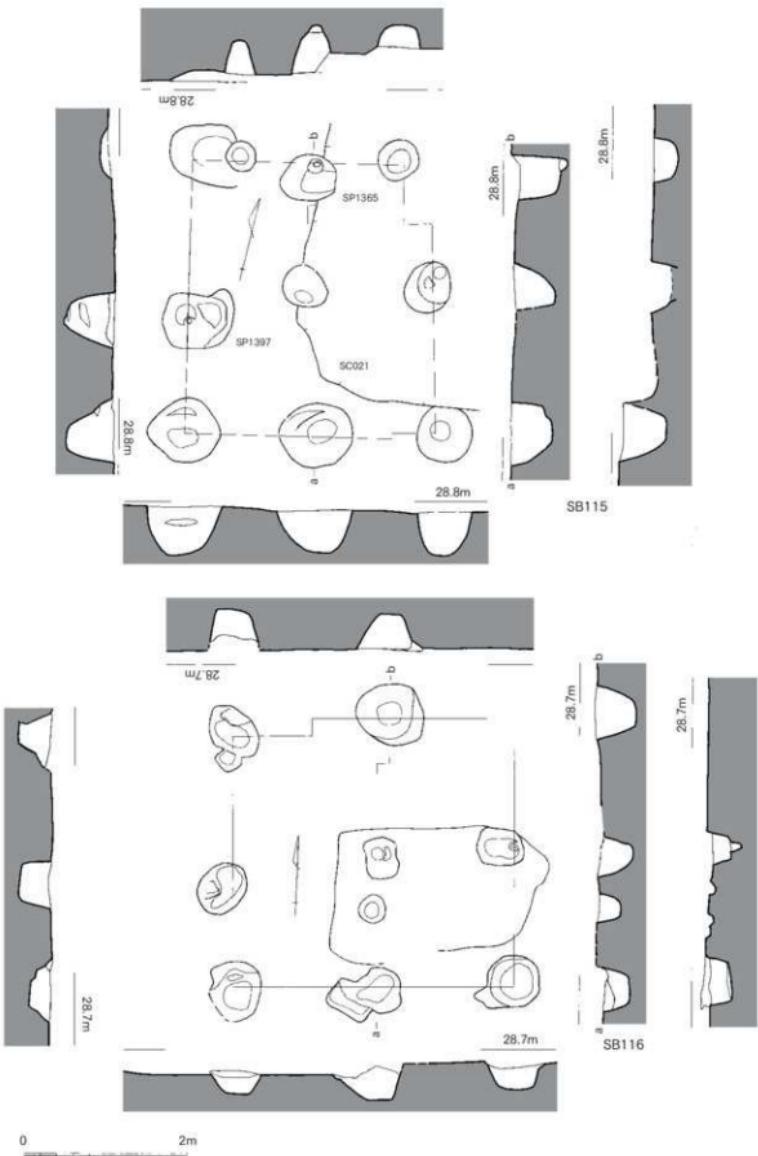


図60 SB115、116実測図 (1/60)

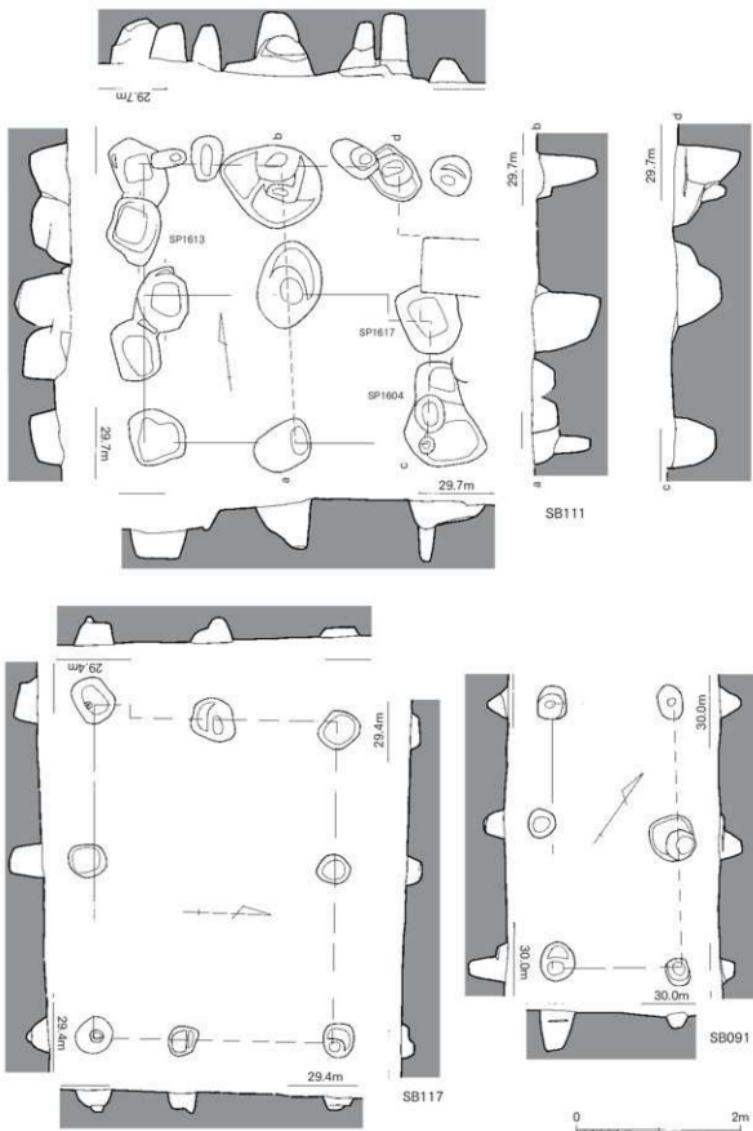


図61 SB111、117、091実測図 (1/60)

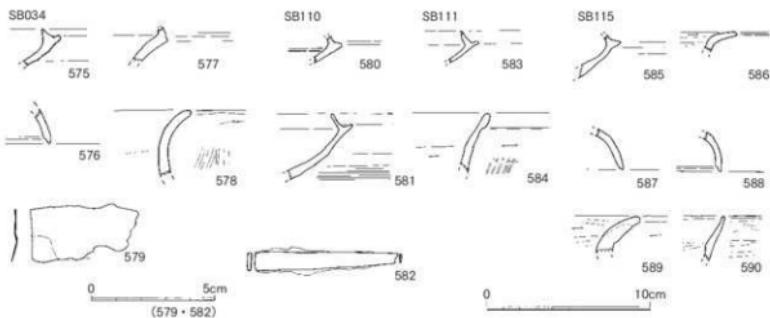


図62 SB034、110、111、115実測図（1/3、1/2）

である。柱穴は円形か不整楕円形で、長径80から50cm、深さ35～45で、南側は小さく浅い。中央の柱穴は径40cm深さ15cmでさらに小さく浅い。出土遺物は少なく小片のみである。580、581は須恵器の坏身。582は鉄製品で長さ5.7cmが残る。刃部ははっきりとは確認できない。他に坏の天井部、土師器小片、鉄滓5g（SP1209）がある。

S B 1 1 1 (図61・62) B5 調査区南側、2号墳の周溝に近接して確認した2間2間の総柱建物である。一帯の地山は複雑で、遺構面を下げながら検出した。柱筋が揃わぬ疑惑もある。また大きめの深いピットが他にもあり、合わせて図に示した。長軸はN-8°-Wをとる。建物規模は南北3.4m、東西3.3mほどである。柱間隔は南北150～180m、東西1.4～1.7mとばらつきがあり、そもそも揃わない。柱穴は不整円形か不整形で、50から90cm、深さ50～80で比較的深い。出土遺物は極少ない583、584は須恵器で坏身と甕である。他に土師器の小片がある。

S B 1 1 5 (図60・62) B2 調査区中央北側で設定した2間2間の総柱建物で長軸はN-12°-Wをとる。大型のピットが集まる場所で、南側の並びから建物を想定した。北東側の4基はSC021を切り、2基はその床で検出したものである。北西隅では相当する位置は地山の色が遺構覆土と近く、検出を重ねて掘削もしたがピットを確認できなかった。以上の前提で想定した建物である。規模は南北3.3m、東西3.1mである。柱間隔は桁行1.4～1.7m、梁行1.1～1.7mとばらつきがある。柱穴は円形か不整形で、南側、西側は径80cmとやや大きく、他は50cmほどである。深さ65cm前後で近い。出土遺物は少ない585から588は須恵器の小片で585は坏身、86は外反する口縁部か。587、588は坏蓋。589は土師器の甕、590は土師器の丸底甕で研磨調整である。他に土師器の破片、鉄滓3基から27gがある。

S B 1 1 6 (図60) A3 調査区中央西壁沿い2間2間の総柱建物を想定したが、北東隅には柱穴を確認できていない。SP1278以外はSC062、SK052内検出で、切り合いは不確かである。長軸はN-87°-Eをとる。建物規模は南北3.2m、梁行3.5mである。柱間隔は西側が南北は130cmと170cmと不揃いなほかは160cm前後と一定で、東西170～180mと一定である。柱穴は不整円形で、幅50から75cm、深さは65cm前後で揃う。出土遺物は土師器小片3点とわずかである。

S B 1 1 7 (図61) B5 調査区南側のSB110の南で想定した2間2間の建物で長軸はN-88°-Eをとる。建物規模は桁行4m、梁行2.9mである。柱間隔は桁行1.7~2.1m、梁行1.1~1.8mとばらつきがある。柱穴は不整円形で、径35から45cm、深さ10~40と比較的小さく浅めである。出土遺物は土師器の小片、鉄滓14gのみである。

(4) 土坑等

S K O 1 2 (図63) C4 不整形の40×45cm、深さ8cmほどのくぼみ状に礫が集まる。遺物は埋土から出土した。少量でほとんどが土師器壺の小片で須恵器壺状の小片がある。

S K O 1 4 · 0 1 5 (図63・64) CD4 平面楕円形で270×145cm、深さ15cmほどのくぼみ状で中央に段差があり番号を分けたが遺構であるかは不確実である。埋土は灰茶褐色砂質土である。床でピットを確認した。591と592は須恵器の壺と壺か。593は土師器の壺で黄白色。594は土師器の鉢、595は取手。他に須恵器、土師器の壺片がある。

S K O 1 6 (図63・64) C4 平面楕円形で210×110cm、深さ15cmほどのくぼみ状で形を残した土師器が出土した。堅穴建物の床にならないかと考えている。埋土は灰茶褐色土である。

出土遺物 596と597は須恵器の壺蓋と高杯の脚。598は土師質で壺の口縁部。599、600は土師器の壺。600は器面淡黄白色で胎土はよく7割が残る。

S K O 2 5 (図63) C2 平面楕円形で試掘トレンチに切られる。直線的な平面プランで296×100cm、深さ20cmほどである。中央でピットを確認した。埋土は茶褐色土で当初SC022の南、西壁かと考えたがSC022の4本柱を中心にするところまで及ばない。むしろ地山の暗褐色部分ではないかと考えられる。遺物は土師器の細片2点である。

S K O 2 6 (図63・64) C2 平面楕円形で試掘トレンチに切られる。290×210+a cm、深さ13cmほどである。くぼみ状で壁から床はなだらかで中央最深部の40×30cmの焼上がみられる。埋土は黒色に近い暗褐色粘質土で炭化物を含む。比較的多くの遺物が埋土から出土した。603から610は須恵器の壺の身と蓋。610は茶色を呈す。611は須恵器の短頸壺で焼成悪く灰白色を呈す。612は土師質の高杯で体部外表面は搔目状、脚との接合部に当て具状の痕跡がある。614から615は土師器の壺と取手、617は丸底壺で器面荒れわずかに研磨が見える。他に須恵器壺、土師器壺片、鉄滓254gがある。

S K O 2 7 (図63・65) C4 平面不整形で150×145cm、床は細かな段があり深さ40cmが残る。西側に溝状があるが伴うものか不明である。遺物は埋土から出土した。621から623は須恵器で壺蓋と身。624は土師質の壺か。外面搔目状で淡橙色を呈す。625は土師器の口縁部。626から629は土師器の壺または鉢片。630は泥岩の砥石で2面が残る。鉄分が付着し観察しづらいが擦痕が見える。他に須恵器の壺、瓶の小片、土師器壺、鉄滓10gがある。

S K O 2 8 (図63・64) C2 直線的なプランを確認したが溝状のくぼみと思われる。40cm大と20cm大までの礫が集まる箇所がある。埋土は砂を含む暗褐色土である。遺物は少ない。601は須恵器の壺蓋、602は壺身。他に須恵器片、土師器壺片がある。

S K O 2 9 (図63) C2 SC021の南東端で切られる。平面不整長方形で段を成して下がり、ピットの集まりのようでもある。深さ30cmが残る。埋土は混じりのある黄茶色で締まりがない。遺物は土師器小片のみである。

S K I 1 0 3 (図63・64) C4 平面不整円形で70×80cm、深さ13cmが残る。遺物は埋土から出土した。618から620は須恵器の壺身、高杯脚、壺底部である。他に須恵器の壺片、壺片、土師器片がある。

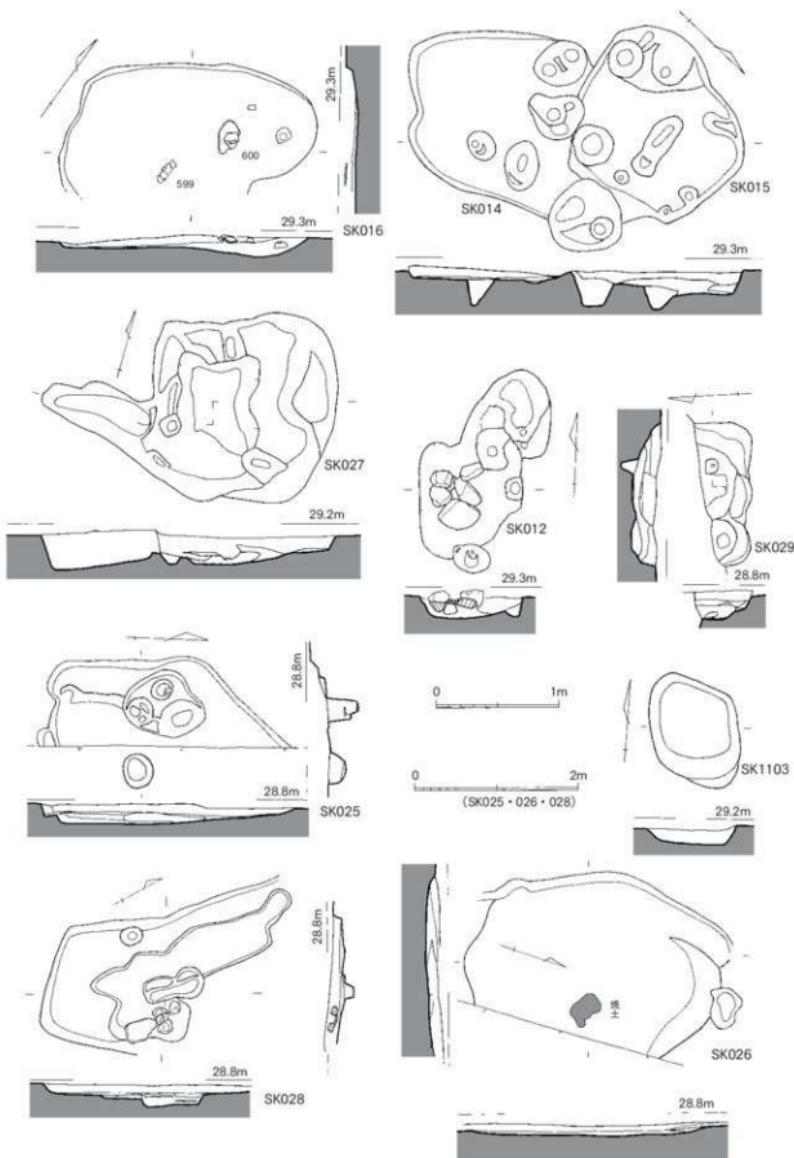


図63 下層土坑実測図1 (1/40、1/60)

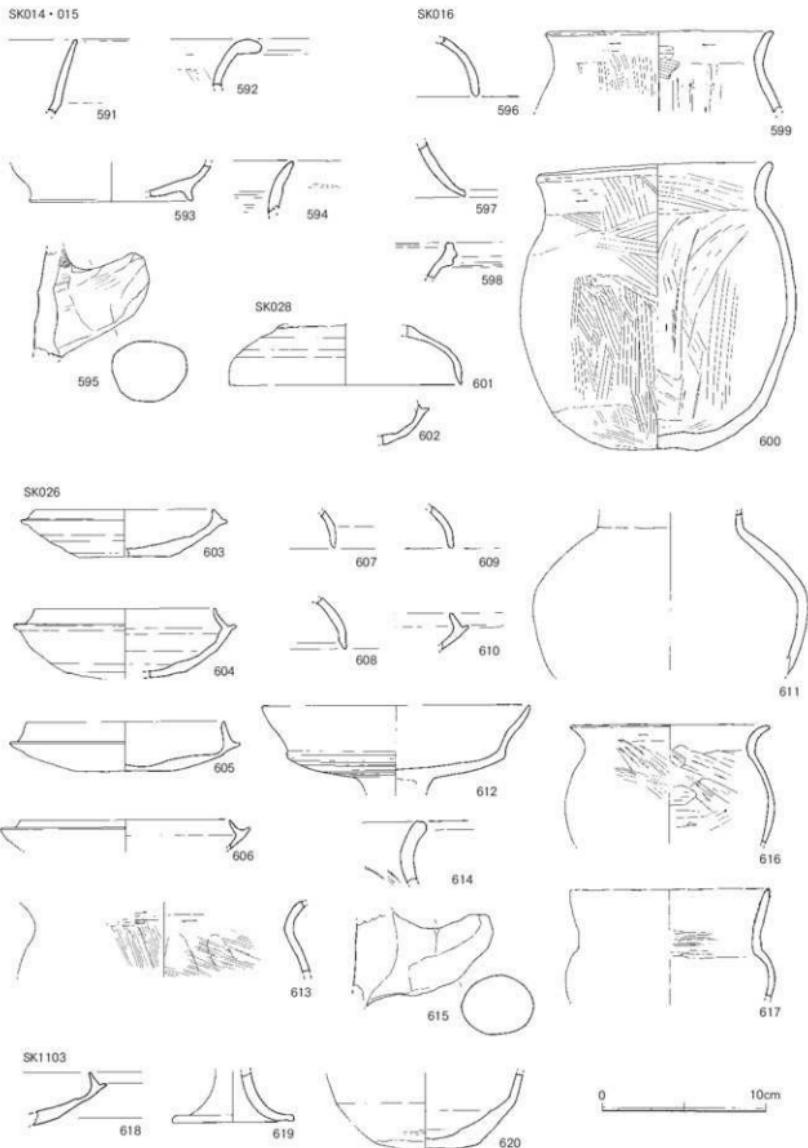


図64 SK014、016、026、1103出土遺物実測図 (1/3)

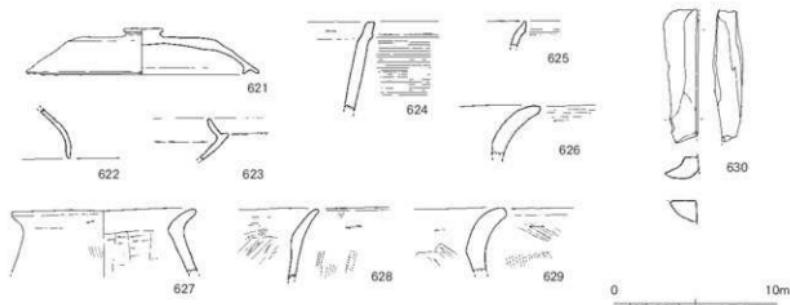


図65 SK027出土遺物実測図（1/3）

SK057 (図66・67) B4 平面楕円形で90×54cm、深さ7cmの浅いくぼみ状に遺物が出土した。SK079と一部重なるが切り合は不明である。埋土は暗茶褐色粘質土である。遺物は631が土師器の壺で1/4からの復元。他に土師器の瓶片、鉄滓534gがある。

SK058 (図66・67) B4 平面楕円形で117×70cm、深さ13cmほどの浅いくぼみ状で土師器の壺片と礫が出土した。埋土は淡い茶褐色土である。壺の破片は1個体の1/3に接合し、口縁部は北西側、底部は南東側の破片である。632は外面に刷毛目、内面に削り痕が明瞭に残る。

SK063 (図66・67) B4 SC053の南東隅を切る平面不整長方形のピット状で東壁がややハングする。西側はSC053を先に掘削し不明。100×60cmの不整長方形で南側はピット状に下がる。深さ50cm。埋土は黄茶土で炭粒が混じる。遺物は底から土師器の小型壺片、取手が出土した。

SK064 (図66・67) B4 平面不整円形で120×60cm、深さ15cmほどである。埋土は淡い灰褐色である。北寄りがピット状にくぼむ。遺物少ない。633、634は須恵器の壺身蓋。他に須恵器の壺肩部片、土師器胴部片がある。

SK070 (図66・67) B2 平面不整円形で160×150cm、床は北へ下がり最深で50cmである。床面は一定で 瞬急に立ち上がり、遺物は埋土から出土した。635から637は須恵器の壺、638は土師質の高壺脚で胎土が細かく橙色を呈す。639は土師器の壺、640、641は土師器の瓶と壺か。642は取手で上から孔を開ける。胎土が精良。他に土師器壺小片、鉄滓78gがある。

SK073 (図68・69) B2 調査区北西側に位置する。縦長の大型土坑で370×135cmの規模で、底の深さは北東で30cm、南西側の深い箇所で60cmほどで、南西へ下がる。埋土は暗茶褐色粘質土を主体とし上部は炭化物を含む。北東半の上部は特に多く、図のように遺物が散乱した状況があった。南西側ではやや深い位置に土師器の壺がつぶれた状態で礫と須恵器片が出土した。東北半上部は埋土に炭が多く遺物の出土状況から浅い別の遺構を考えたが、この上層と南西側下部の須恵器が接合し、同一のものである可能性が高まった。

出土遺物 651から657は北東半上層出土で654までは須恵器である。654は南西下部の661と一緒に出土した破片と接合した椀で底を削る。655、656は土師器の壺である。657は図の遺構プランから少

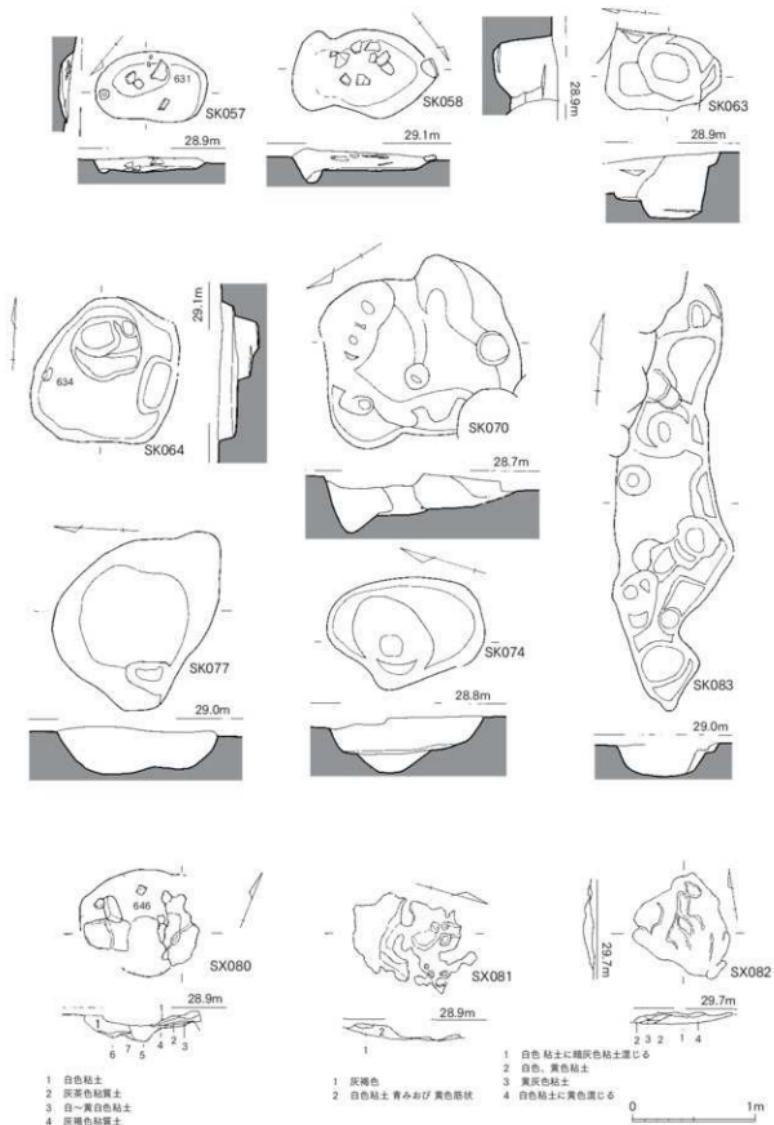


図66 下層土坑実測図2 (1/40)

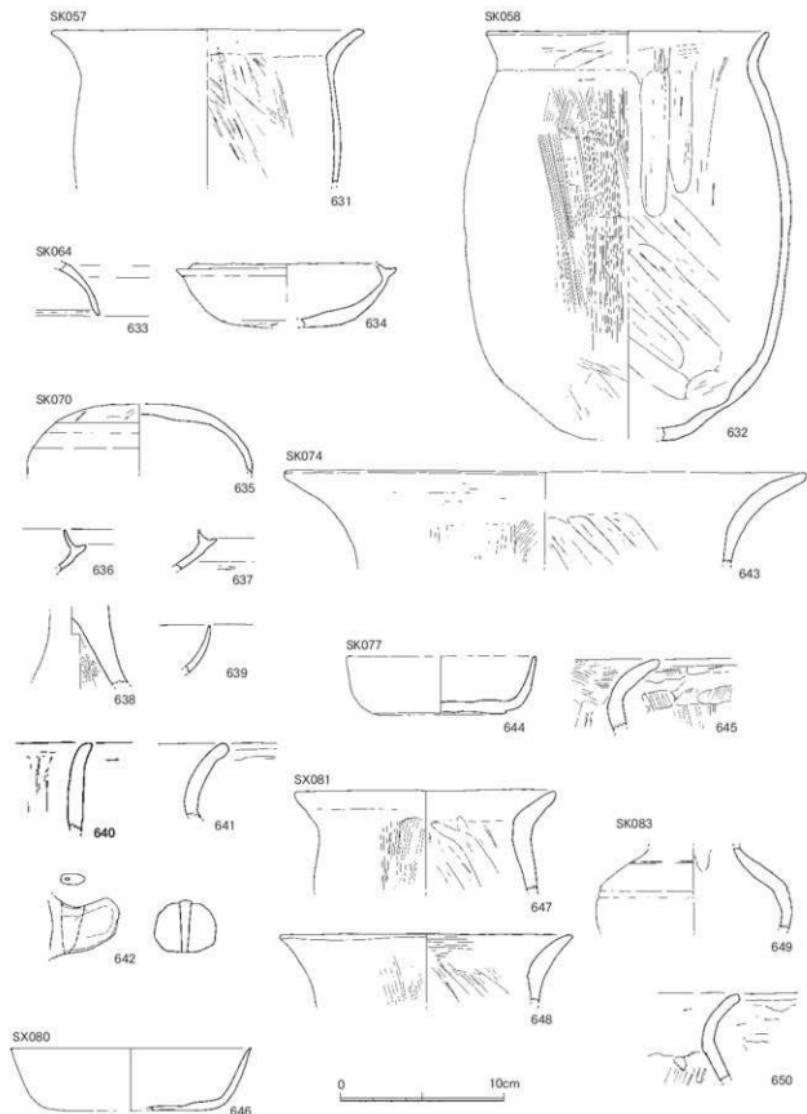


図67 下層土坑出土遺物実測図（1/3）

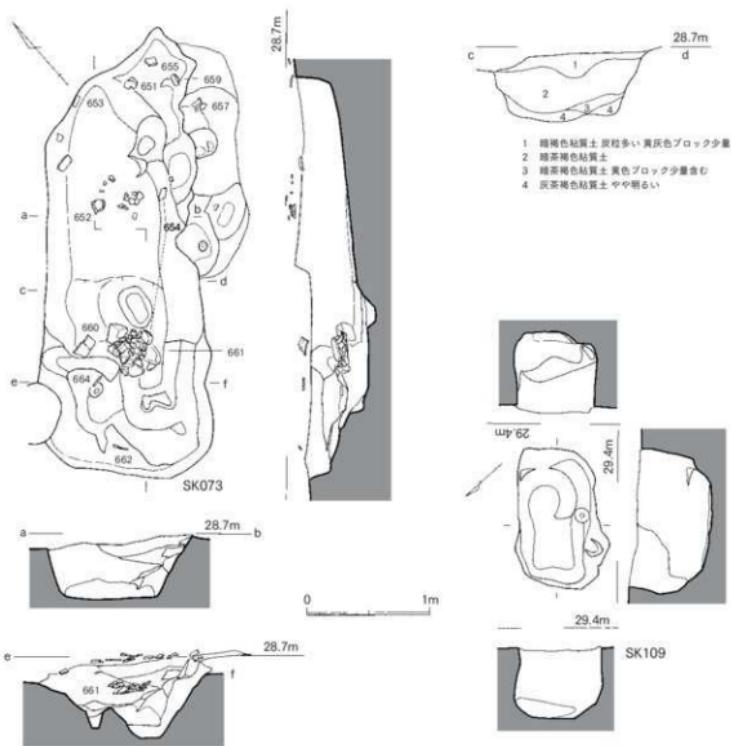


図68 SK073、109実測図（1/40）

し外れるが同じ層出土で土師器の管状で図の左は本体に接合し、右端は破面である。器面は削りで整形する。取手か。658、660は南西半の上層出土の須恵器壺身と土師器壺。659は下層の須恵器蓋である。661は南西下部でつぶれた状態で出土した。壺の2/3弱が残る。622から624は南西側出土の鉄製品で断面長方形で刃部はない。鉄滓70g。

SK074 (図66・67) B2 平面楕円形で130×88cm、深さは中央のくぼみで44cmである。遺物は埋土から出土した。643は土師器の壺で器面橙色である。他に須恵器の壺蓋、壺の小片、土師器の壺、取手、壺、壺がある。

SK077 (図66・67) B3 平面不整円形で160×110cm、断面すり鉢状で深さ40cmが残る。埋土は淡灰茶色土である。遺物は埋土から出土した。644は須恵器 壺。645は土師器の壺で外面の成形は荒い。他に土師器の口縁部7点、須恵器の壺口縁片がある。

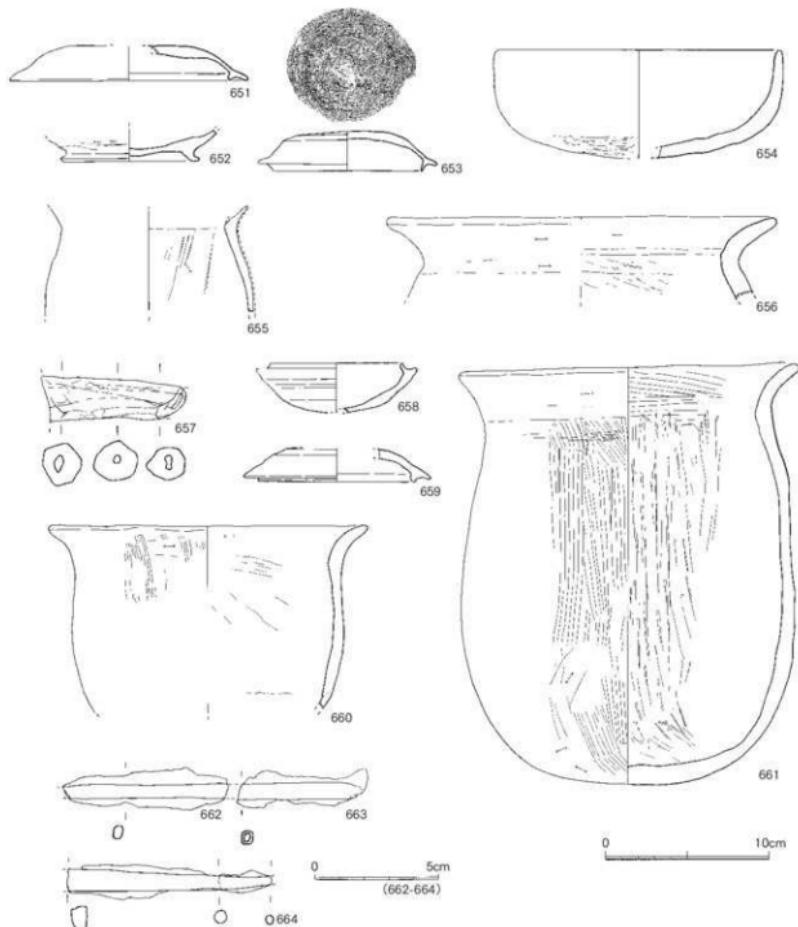


図69 SK073出土遺物実測図 (1/3、1/2)

S X 0 8 0 (図66) B3 SX081の東1mに位置する。平面90×80cmほどのくぼみに白色粘土が溜まる。粘土は東西に分かれ、厚い箇所で10cmほどである。焼土、炭粒は見られない。080と081の場所は上層で土器だまりSX050、051を検出しており関連も考えられる。また上面でやや北にあるSK037、036には白色粘土が多く入っていた。同様の土坑の堀り残しの可能性もある。遺物は埋土から出土した。646は土師器の壊である。他に土師器小片がある。

S X 0 8 1 (図66) B3 SC072の東壁上で確認した白色粘土だまりで100×70cmの円形の範囲に広

がる。南側は厚さ8~10cmほどあり、西側は薄く散る。粘土は白色、黄白色、灰色土まじりが混じり、焼土、炭は見られない。底はレンズ状でくぼみ状に置かれたと考えられる。粘土中からは土師器壺片647、648が出土した。他に土師質の叩き痕のある壺片、坏片がある。

S X O 8 2 (図66) B2 SC060の東壁とSK073の西壁上に広がる白色粘土で隅丸三角の範囲70×85cmの範囲に厚さ最大で10cmが残る。粘土の色調等は081に同じ。底はレンズ状で土坑内にあったと思われる。遺物は土師器小片と移動式カマド片がある。

S K O 8 3 (図66・67) B3 構造で長さ3.45m、幅は最大で90cm、深さ25cmほどである。底と側面にはピットがあり切り合いはわからなかった。埋土は暗褐色土である。床面は一定で壁急に立ち上がり、遺物は埋土から出土した。649は須恵器の壺、650は土師器壺。他に土師器の薄手の坏がある。

S K 1 0 9 (図68) C5 SC105の床面で検出した平面長方形の土坑で113×63cm、深さ60cmの規模。埋土は黄褐色粘質土で均一である。遺物は出土していない。この埋土と同じ土は地山面の各所で見るが、風倒木状やくぼみ状で遺構とならない。縄文時代以前の遺構ではないかと考えている。

(5) 古墳

調査区南西端、南端中央で2基の古墳の周溝を確認し、1号墳は横穴式石室の一部が残っていた。南端部は調査区では最も高く、道を挟んだ南側は狭い谷が入るため狭い尾根上に古墳が築かれている。古墳周溝も残りが悪く、大きな削平が想定される。

1号墳 (図70~74) A4

2区の表土剥ぎは南西端からはじめ、水田土壤(4b層)直下の地山8層で周溝および主体部の床を確認した。ただしこの段階で水田土壤が被っていた腰石、床石の一部を除去している。調査区内で確認できたのは周溝1/4と石室の1/2以上で残りは南、西側隣地に延びている。当初設定した調査範囲では図70の石室の断面までの確認であったが、全景写真後に石室部分を可能な限り拡張した。主体部は南側の谷に向いた南西に開口する。

周溝 SD055と呼称している。全周の1/4が調査区内で主体部の東側背面にあたる。底近くのみが残存し、広いところで幅1.5m、北東側は底の痕跡のみであった。底に小さな段やくぼみが多い。石室の中央付近から周溝東側端部までが6.5mで、墳径13mほどが復元できる。覆土は灰茶褐色から暗褐色の粘質土である。南壁土層では055-2、-3層が周溝の埋土で-1層は黄色土かかる水田の影響を受けた土壤で周溝の内側に80cm入る。西壁では4d層が周溝埋土に被り、周溝内側に2m入る。この4d層の時期には古墳周囲を掘削し耕地化していたと考えられる。石室部分はおそらく残っていたのではないだろうか。遺物は少なく、南壁際に破片が集まっていた。礫は特に見られなかった。周溝内側にははっきりした遺構は見られず、SP1261からは須恵器の壺片が出土したが4d層の範囲で墳丘の一部掘削後の物であろう。

出土遺物 665から668は南壁際の集中部からの出土。665、666は土師器の壺で同一個体であろう。器面橙色で荒れる。小破片が固まって出土したが摩滅し接合できなかった。667は別個体で壺、668は須恵器の壺。669は東半の埋土出土の須恵器壺蓋。670から675は西側からの出土の須恵器である。670、672、673は壺身片、671は壺口縁部から肩の一部に緑色の自然釉がかかる。674は壺で茶色を呈す。675は鉢か。摩耗し淡灰色を呈す。他に須恵器・土師器壺片、鉄滓11gがある。6世紀末から7世紀はじめまでにおさまる。石室内の遺物より新しい。

横穴式石室 前述の通り東側の石材を表土剥ぎ時に除去している。調査区を拡張し奥壁の割れた

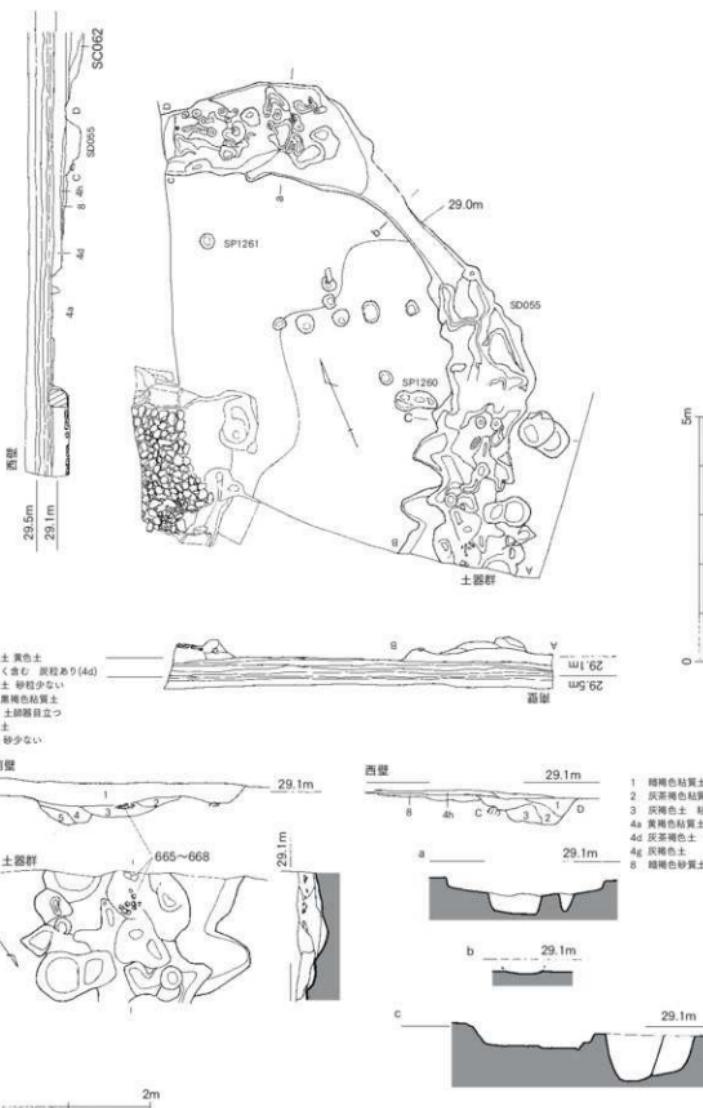


図70 1号墳実測図 (1/100、1/60)

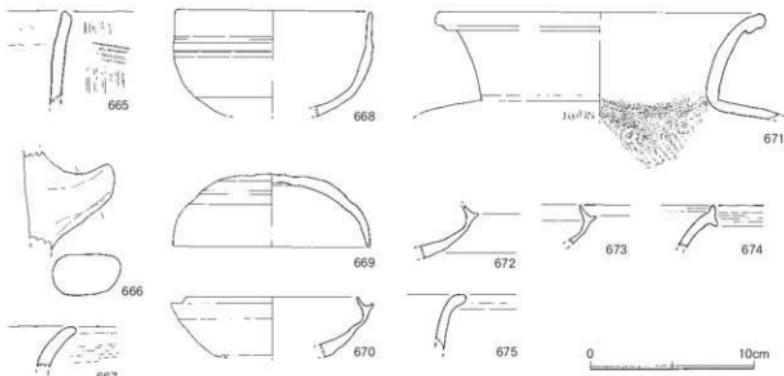
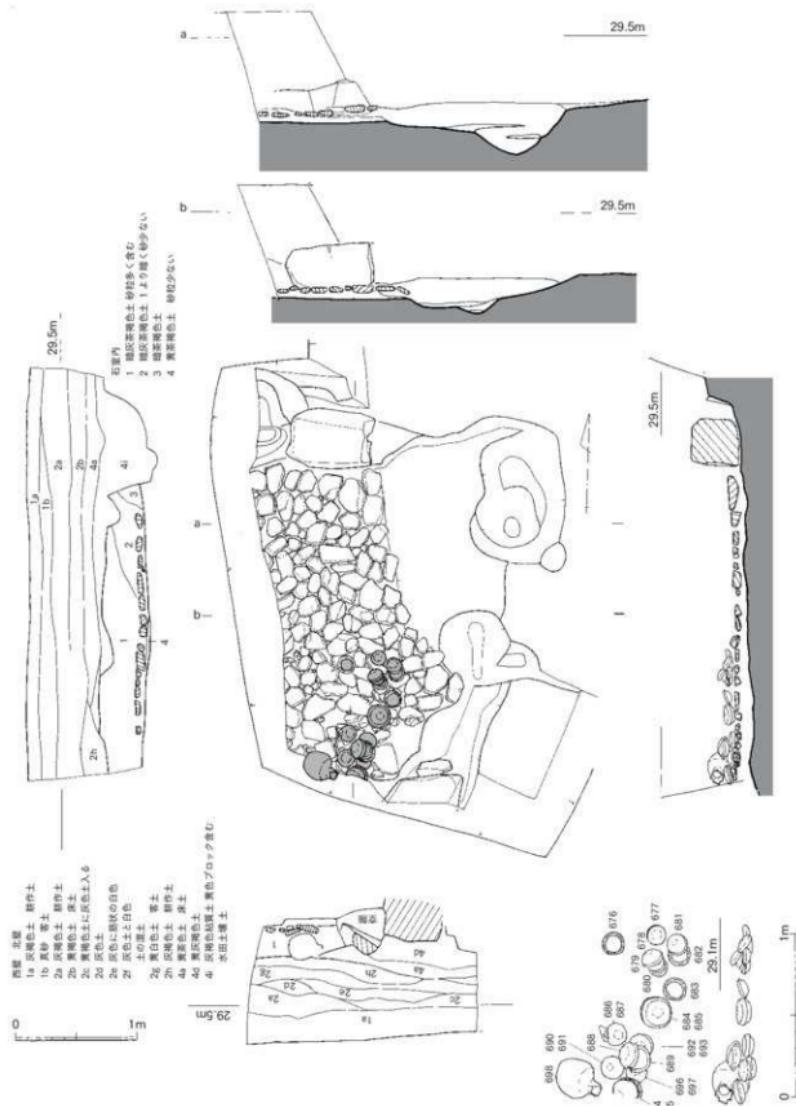


図71 1号墳周溝出土遺物実測図（1/3）

腰石1個と敷石を確認した。東側側壁は確認するには至らなかった。東側壁があった箇所には奥壁から直角方向にくぼみがあり、腰石をすえた痕跡である。除去した腰石が3個あり、その横幅は60、70、80cmで、60cmのものは奥壁に残った腰石の片割れで元は横幅120cmとなり、他の2個が東側壁として残っていたと考えられる。腰石は全て花崗岩である。奥壁と東側側壁の痕跡から石室主軸方向N3°-Eが想定できる。なお残った奥壁の西側には石材を抜いた跡があり水田土壤が入っていた。次に南側では南東隅に石室側に張り出した腰石がみられ、袖石と考えられる。その西側の調査区の壁には上から落ちたであろう板石状が横たわり、その下は空洞となる。この付近までは敷石があるが、空洞部分には見られなかった。仕切り石も確認できていない。攪乱を受けている可能性もある。南壁付近を玄室の入口と考えると、石室の奥行260cmとなる。奥壁の幅は、確認できている範囲で180cmが想定され、残った奥壁の中心を折り返すと200cmほどとなる。敷石は20cm大の礫を中心に30cmまでの礫を密に敷き詰める。掘方床までは2~5cmほど黄茶褐色土がみられる。南側の袖石付近には12cm大前後の小さ目の礫を用いている。石室の掘方は奥壁、袖石部分で見る限り、下端は石材との間に隙間はない。栗石も見られなかった。

遺物は玄室側の敷石直上に須恵器の壺22個、壺1個がまとめて出土した。壺身2個が正置、蓋1個が倒置で、身蓋の9セットが蓋を被せた状態で正置して出土した。セットの一つは蓋2個を被せている。割れてないセットには土が入らないものもあった。またセットが重なった箇所があり、片付けた行為を思わせる。壺は壺の西側に横に倒れて出土した。このほか床面、敷石下までの土壤を水洗し、敷石下からガラス小玉の破片が出土した。他に黒曜石の微細碎片23点を採取した。

出土遺物 676から697は敷石上に出土した須恵器の壺である。出土位置のおよそ北側から並べてある。676、683は単体正置の身、677は同じく倒置の蓋である。位置が近い676と677がセットであろうか。678から680は蓋二つが被っていた。上の678は683とのセットとも思われる。推測した二つのセットは径が合い丁度被る。壺は2つを除いてほぼ完形である。径は蓋で16.3~12.3cmとばらつきがある。壺蓋は口縁部の外縁の段が明瞭なものと沈線状となるものがあり、口唇部内面の段には有無



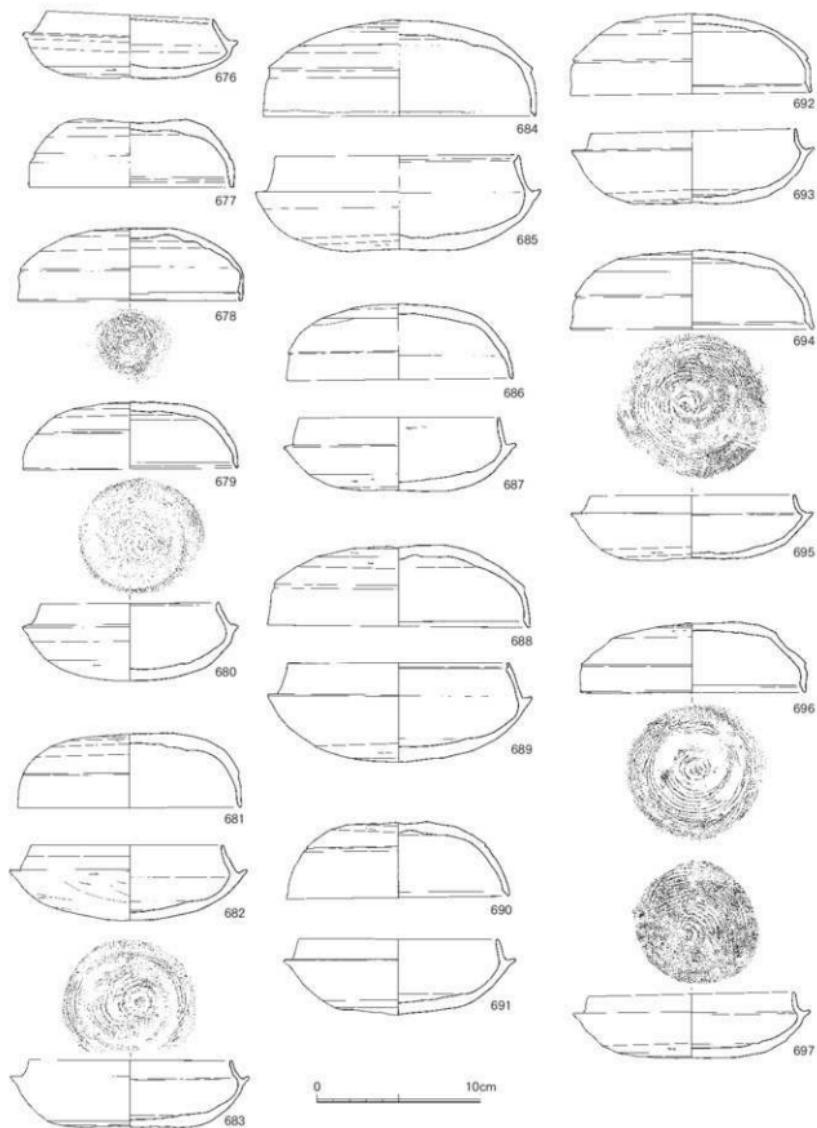


图73 1号墳石室出土遺物実測図（1/3）

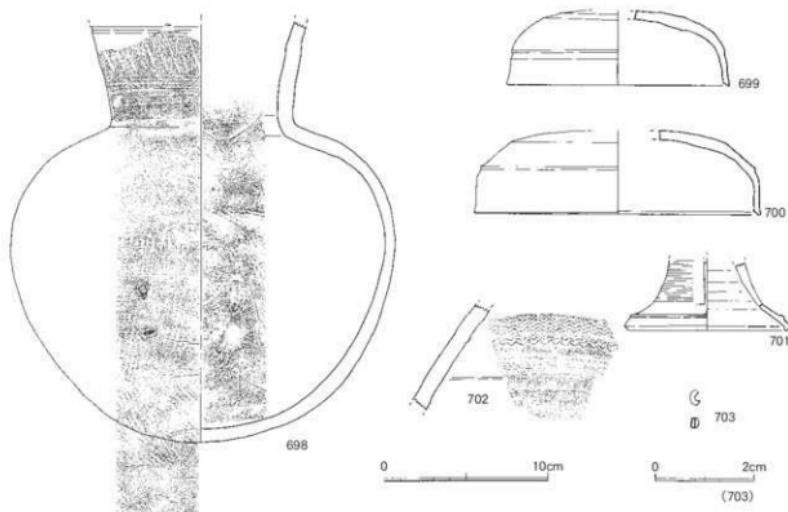


図74 1号墳石室出土遺物実測図（1/3、1/1）

がある。坏身は立ち上がりが高い。口唇部の段には有無がある。特徴的事項を記す。色調や胎土はばらつきが多いがセットで似るものが多い。676は底にわずかだが自然釉がみられる。身で最小である。679は口縁部の1/4を欠く。680は胎土が細かく灰白色を呈す。682体部外面を手持ちのへら削りで仕上げる。684と685は最も径が大きなセットで口径は蓋16.3cm、身15.0cmで胎土に砂粒多い。しつかり重なり中には水が溜まっていた。686は口縁部1/3、687は1/4を欠く。同時に破損したものか。688、689は2番目に大きなセットで口径は蓋16.0cm、身13.7cmで胎土に砂粒多い。678、680、683、695、696、697の内面には同心円状の當て具痕が残る。698は須恵器の壺で口縁部を欠く。頸部外面には波状文を施し、胴部は平行叩きの後になる。内面には當て具痕が残る。699は床面直上出土の坏蓋片1/4からの復元。700は石室埋土と上部の水田土壤出土片が接合した坏蓋。701、702は石室埋土出土。701は高环脚部片1/6からの復元で、透かしは3方に入ると考えらえる。702は壺の頸部で波状文を施す。703は敷石下の土壤を水洗した際に確認したガラス製小玉の破片である。赤茶色で径3mmほどである。ソーダ石灰ガラス製と推定されインドバシフィックビーズの一種で赤い「ムチサラ」と呼ばれるタイプと考えられる（附編報告参照）。石室出土遺物は6世紀中頃から後半のⅢa期の中でとらえられる。

2号墳（図75、76）BC6

調査区南端中央で周溝（SD090）のみを検出した。遺構面が西に下がると共に上端が下がり途中で完全に削平されている。確認できたのは全周の1/3ほどである。南壁部分で幅1.9m、深さ30cm、

北東で幅1.5m、深さ20cmほどが残り、途中東側では幅60cm、深さ10cmとなる。墳径15mほどが復元できよう。埋土は灰茶褐色土から暗褐色の粘質土で南東部、東部で遺物の集中部があり土器群1、2として図示した。周溝は南壁では30cmが残り、石室との関係が1号墳と同様であれば、2号墳の石室の床は現存遺構面のわずかに上であったことになる。壁沿いのSP1624は深さ3cmほどの水田土壤が溜まる。腰石の抜き跡の可能性を考慮し南側を拡張したが痕跡もなかった。遺構面は水田土壤の直下で、削平の時期はわからない。周溝内側でピットを掘削したが、遺物が出土し人為的と考えらえるものは周溝から1m内にあり周溝内と同様の須恵器が出土している。1号墳と同様に墳丘裾から削った結果か。また、周溝西端の延長上に連なるSP1582から1590からは須恵器の壺片、IV期の坏が出土しており、周溝内のピットやくぼみの痕跡とも思われる。

出土遺物 704は土器群2で出土した土師質の壺の頸部から口縁部で口縁部を口縁帯状に立ち上げる。同一個体の胴部と思われる破片がまとまって出土したが摩耗して接合できない。705は埋土出土の須恵器の壺の口縁部。709から713は土器群1の出土である。709から711は須恵器の壺。709は平行叩きの後に搔目を施す。710と711は同一個体と考えらえる。外面平行叩き、内面當て具がない下にわずかに見える。711は天地傾き不確かで径56cmくらいの大型品であろう。712、713は須恵器の壺で、生焼けで接合しづらい。頸部の突起と浅い沈線の間2段に波状文を施す。713は外面平行叩き、内面當て具がわずかに残る胴部片。径、傾きは不確か。接合しない破片が多い。707、708はSP1590、1588出土の須恵器坏身で周溝延長の遺物である。706は土器群1で出土した鉄器で断面円形である。

(6) ピット等出土遺物

下面のピット出土遺物は6、7世紀の土師器、須恵器の小片を主に出土している。ここでは目立つものを少し取り上げる。715は北東隅のピットSP1007と上面ピットSP1030(C2)出土が8m離れて接合した。須恵器の坏身で内面に當て具痕、外面天井部に一方向の深い擦痕がみられる。719はSC072の南東のSP1379出土の土師器の完形の小型の鉢。716から718はSB115に切られるSP1430出土で土師器の鉢と須恵器の外反する坏部と蓋。720はSP1476(D5)出土の壺底部。721はSB111東のSP1469出土の瓶で1/2残存。

(7) そのほかの遺物

遺構面、包含層、表探でも多くの遺物が出土している。そのうち土器類はこれまで触ってきた遺構出土遺物にないものを取り上げる。石器は本来の時期ではない遺構出土も含む。

722は染付椀の小片で明代か。723は白磁皿片、724は青白磁のやや大型の合子の小片である。725は657に近い。726から728は砥石である。728は砂岩で4面を使用し1面は破面、727は破片で1面が残り擦痕がみられる。泥岩か。726は泥岩で4面のうち1面のみ使用する。729は結晶片岩の薄い疊で表裏の同じ位置に沈線を入れる。割る目的であろう。730は土鍤と思われる。長さ2.75以上、外径1.3cm、孔径3.5mm、4.5g。731から733は鉄製品。731は断面楕円形の棒状を曲げる鱗状鉄製品で端部は破面である。732は極薄い板状で磁着は強い。横方向の外形は生きていると思われるが全形は不明である。733も同様で全面破面と思われる。734は绳文時代の石斧の基部で石材は蛇紋岩である。735から738は弥生時代の石斧。735は頁岩製で刃部以外は破面で器面に擦痕がみられる。736、737は玄武岩製の石斧である。736は刃部を欠き器面は摩耗する。厚さ3.8cm。737は刃部側で器面は摩耗するが細かな敲打痕がみられる。738は頁岩の柱状片刃石斧の破片で敲打痕がみられる。

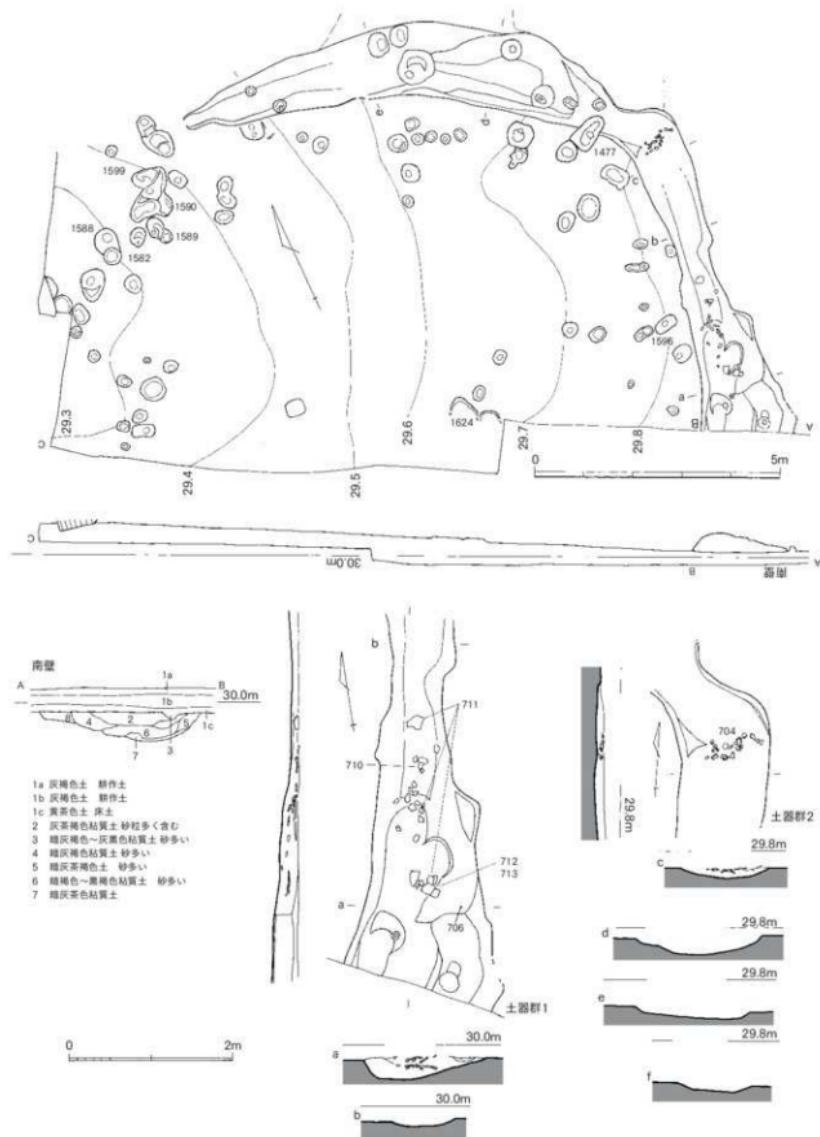


図75 2号墳実測図 (1/100, 1/60)

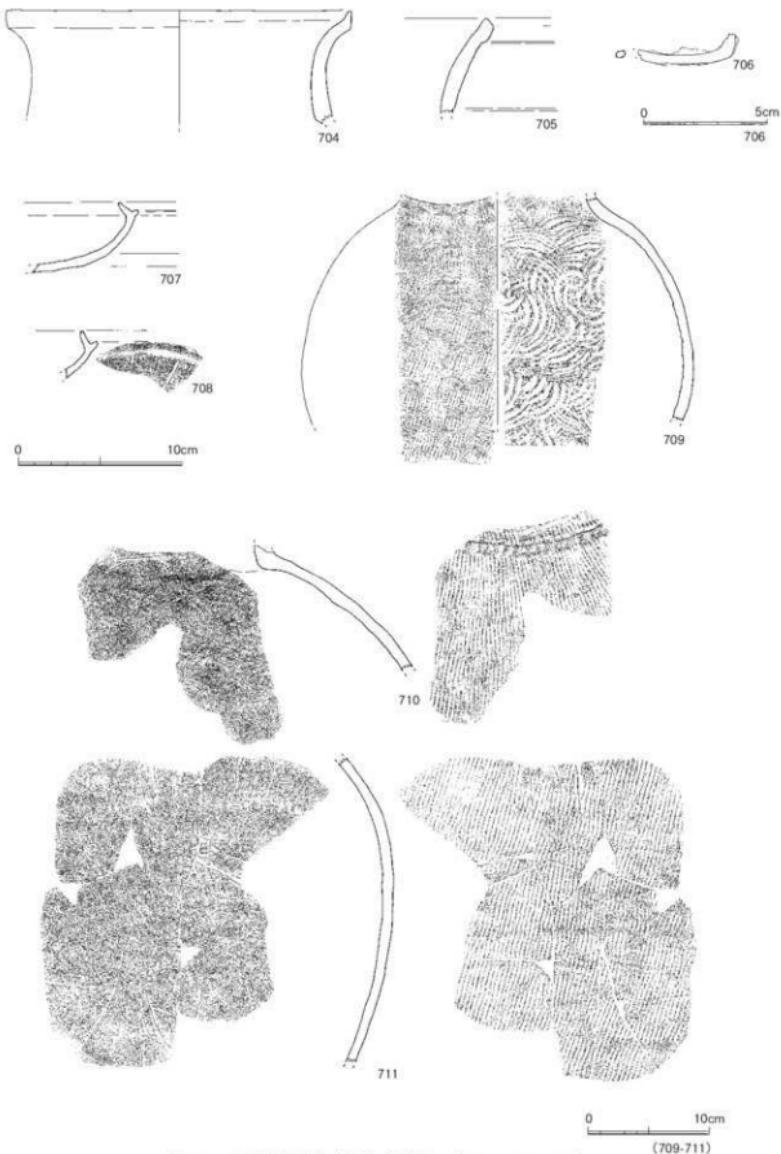


図76 2号墳周溝出土遺物実測図1 (1/2、1/3、1/4)

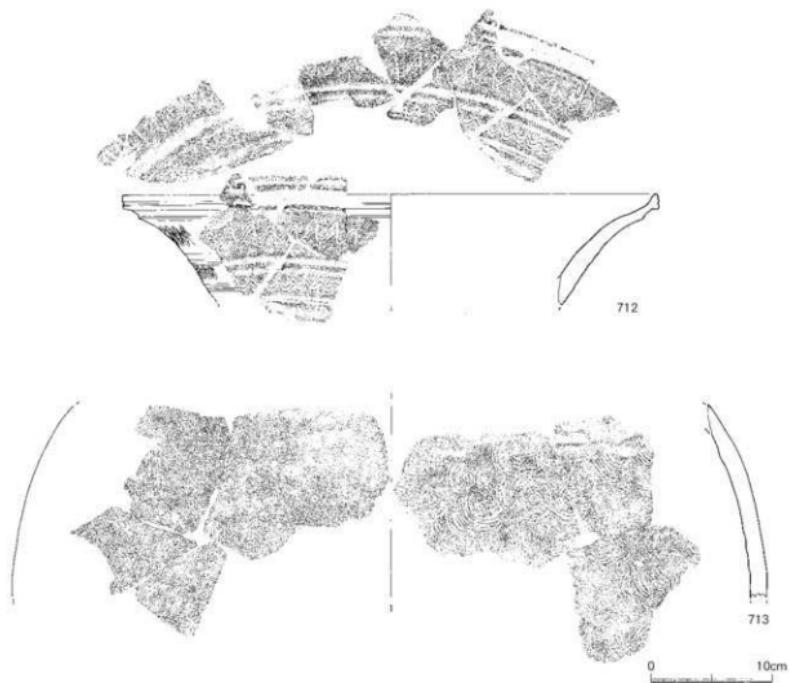


図77 2号墳周溝出土遺物実測図2 (1/4)

(8) 縄文時代、弥生時代の土器

調査区の各所で少量ではあるが縄文時代、弥生時代の土器が出土した。特に弥生時代の土器は可能性があるものも含めて2、3点である。縄文時代でも小片で判別し難いものもある。特に触れた以外は後の時代の造構、検出面等の出土である。

739は轟B式の深鉢で外面に3条の低い細隆起帯を持つ。口唇部には施文具による浅い刻み状の圧痕がありそうだが不明瞭。2号墳周溝内側の検出時に風倒木状に溜まった黄色粘質土で出土した。他に遺物はない。740は平面三角形の刺突文が2段に見られる。器面は淡茶色でなで調整。741から746は深鉢の口縁部である。741は外面条痕で小さな圧痕、気泡が多い。742は胎土に砂粒が多い。743は横方向の擦痕がみられる。744は内外面条痕の後、外面には沈線状の斜線がみられる。745は細かな気泡状が多い。746は口縁帯があり横方向の調整を施す。明るい淡橙色を呈す。747から751は深鉢の胴部片。747は横方向の隆起がみられるが調整によるものであろう。748は外面削り状の横方向の擦痕、内面は横方向のなで状の調整。749は外面削り状の後なで、内面横方向の削り状である。750、751は105出土で同一個体と考えられる外面

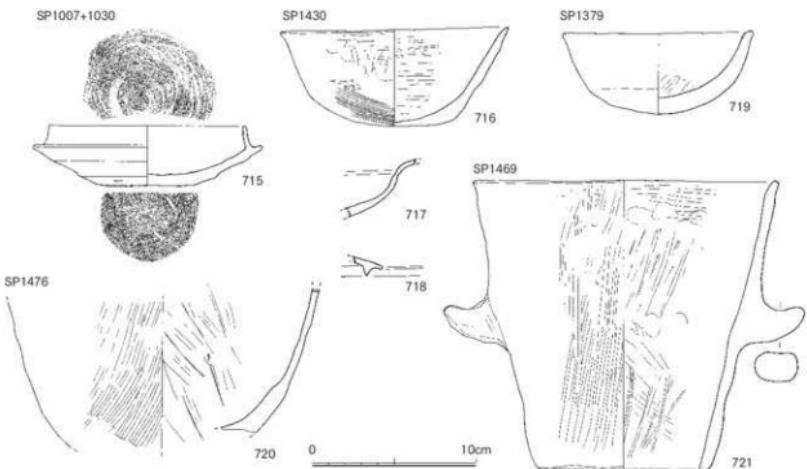


図78 上層ピット出土遺物実測図（1/3）

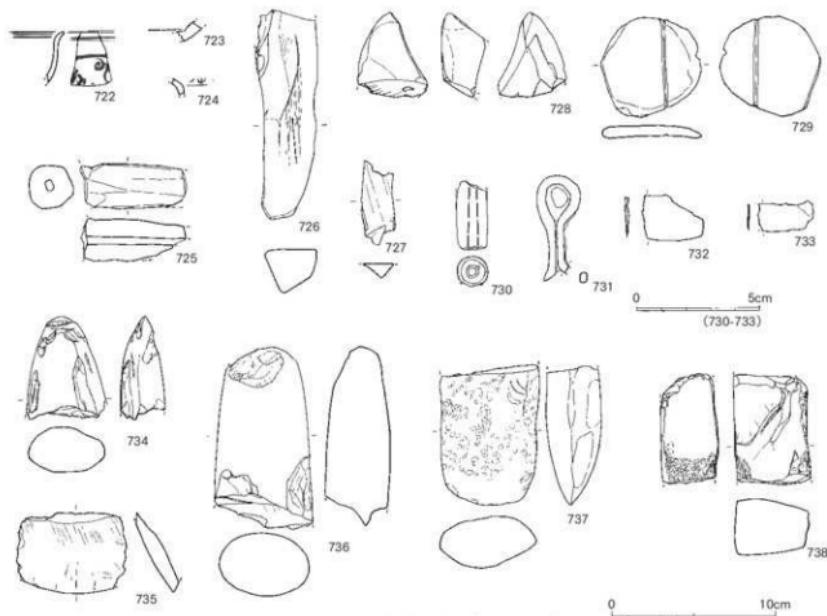


図79 そのほかの遺物実測図（1/3、1/2）

は斜方向の条痕、内面横方向のなで器壁に圧痕、気泡状が多くみられる。明るい橙色である。752から755は黒色磨研土器の浅鉢である。755は焼成後の穿孔があり、内面にはすぐ下にも穿った跡がある。孔の位置を変えたのだろうか。756から759は刻目突帯文土器で757まではSC105、SK079出土で3区に集まる。756から758は小ぶりで2条突帯間が狭い。いずれも淡橙色から灰茶色で色調は近い。756と757は刻目が細く類似し、758はやや広めである。同一個体の可能性もあるが、内面のへらなでの単位などは異なる。759は突帯を口唇部から下がった位置に付ける。760は高めの突帯に木口による刻目を施す弥生前期の甕である。器面桃色で内面は荒れる。761から764は深鉢の底部。761は擦痕の上になで、762はSC105出土で内面底が広い。763は細かな圧痕、気泡状が多い。内面は炭化状がみられる。764は内面に擦痕がみられ外側は荒れる。765は尖底で器面は荒れる。後世の土器の可能性が高いが参考として取り上げた。

(9) 剥片石器

調査区各地点から剥片石器が出土した。いずれも後世の遺構、包含層の出土で原位置を留める物はない。1号墳石室埋土を洗浄した際に黒曜石の微細剥片がしたが、表には含んでいない。石器製作を行っていることはわかる。黒曜石には姫島産と考えられる灰白色2点806、807、他の産地の乳白色1点805がある。バティナが進んだ黒曜石の剥片、松浦産の円螺があり草創期の存在を思わせる。原石は2cm大の円螺である。805以下は巻頭写真に示した。

剥片石器組成

	安山岩	ハリ賀安山岩	黒曜石	計
石塵	11	3	9	23
石砕	3			3
スクレーパー	7		2	9
石核	3	1	15	19
剥片・鈎片	44	9	122	175
原石			1	1
計	68	13	149	230

石器計測表

出土位置	器種	石材	長cm	幅cm	厚cm	重g	出土位置	器種	石材	長cm	幅cm	厚cm	重g
771 3区001-1	石塵	黒曜石	3.09	2.06	0.32	1.59	791 023	石塵末成品	安山岩	3.42	2.23	0.82	4.98
772 3区001-1	石塵	黒曜石	1.55	1.68	0.39	0.62	792 1 区	石塵末成品	安山岩	3.55	2.74	1.02	10.77
773 3追削出面	石塵	黒曜石	2.14	1.42	0.31	0.72	793 060	石塵	黒曜石	5.02	4.32	2.17	3.93
774 022	石塵	黒曜石	2.27	1.30	0.32	0.58	794 1 区	スクレーパー	黒曜石	3.19	2.27	0.43	1.79
775 3 区 001	石塵	黒曜石	1.50	0.94	0.22	0.30	795 3区001-5	石核	黒曜石	1.98	1.30	0.63	42.87
776 009	石塵	黒曜石	1.17	1.19	0.36	0.44	796 3区001	スクレーパー	安山岩	6.22	2.05	1.08	15.61
777 2 区	石塵	黒曜石	1.05	1.16	0.30	0.48	797 1 区 001	スクレーパー	安山岩	5.43	1.98	0.38	3.12
778 3 区	石塵末成品	黒曜石	1.97	2.00	0.48	2.23	798 3 区	スクレーパー	安山岩	5.70	5.42	0.69	2.87
779 090	石塵	ハリ賀安山岩	1.92	1.40	0.42	0.92	799 097	石砕	安山岩	3.62	1.58	0.62	3.56
780 1号墳石室	石塵	ハリ賀安山岩	1.92	1.44	0.49	0.89	800 1 区	石砕	安山岩	8.28	4.92	0.82	27.84
781 061	石塵	ハリ賀安山岩	1.99	1.71	0.36	0.99	801 030	石砕	安山岩	11.30	4.42	0.93	33.57
782 3区001-1	石塵	安山岩	2.50	1.29	0.49	1.42	802 092	スクレーパー	安山岩	3.05	4.04	0.72	11.22
783 1 区	石塵	安山岩	2.70	1.77	0.36	1.32	803 3区001-1	スクレーパー	安山岩	4.90	5.34	0.70	20.15
784 3 区 001	石塵	安山岩	2.18	2.10	0.60	2.18	804 3区001-1	スクレーパー	安山岩	4.64	7.00	1.32	46.55
785 1344	石塵	安山岩	1.82	1.50	0.28	0.50	805 030	剥片	黒曜石	2.71	3.30	0.63	3.61
786 095	石塵	安山岩	2.00	1.83	0.32	0.98	806 2 区	剥片	黒曜石	3.49	1.67	0.47	2.41
787 090	石塵	安山岩	2.31	2.28	0.51	1.84	807 表採	砂片	黒曜石	1.00	1.61	0.26	0.27
788 090	石塵	安山岩	1.50	1.31	0.32	0.53	808 1 区 001	剥片	黒曜石	3.22	2.09	0.73	5.45
789 079	石塵	安山岩	1.23	1.31	0.33	0.76	809 1 区 001	剥片	黒曜石	1.58	2.18	0.22	1.03
790 3 区	石塵	安山岩	1.40	2.18	0.40	2.57	810 1620	剥片	黒曜石	2.72	3.23	0.93	8.66

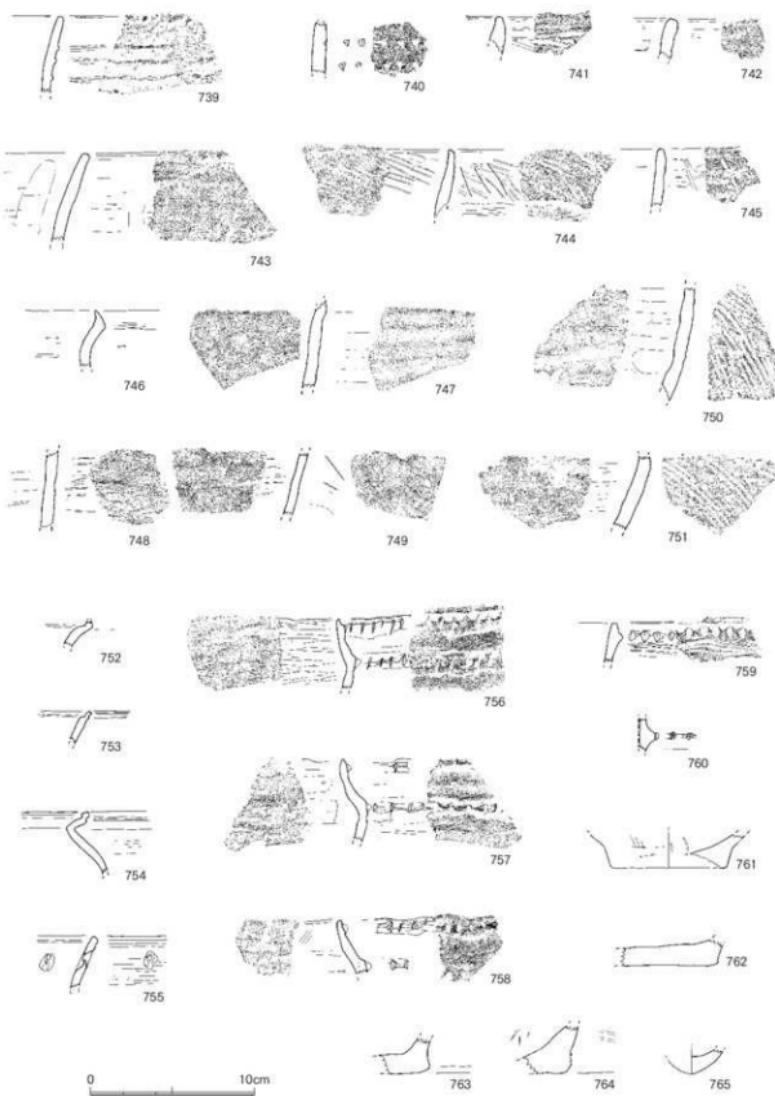


図80 縄文土器、弥生土器実測図（1/3）

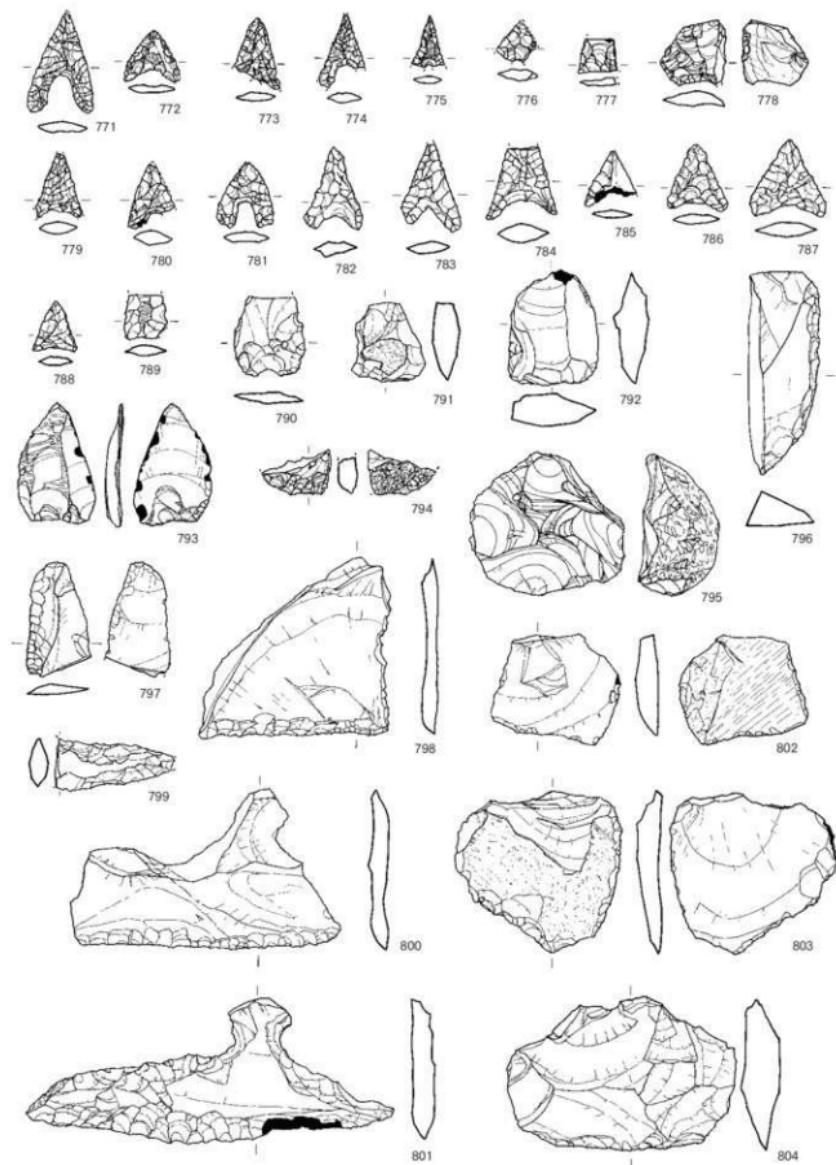


图81 剥片石器实测图 (3/4)

IV 終わりに

1 造構遺物の変遷

縄文時代から12世紀までの遺構、遺物を確認した。最後に時代ごとにたどり補足を行いたい。

縄文・弥生時代 遺物のみで調査区全域で出土し分布する。時期が分かるものでは早期の鉤形縄、轟式土器、晩期の黒色磨研土器、刻目突帯文土器がある。松浦産の黒曜石円礫は草創期が存在する可能性を示唆する。黄褐色粘質土を埋土とするSK109が縄文時代の遺構の可能性がある。早良平野ではレス堆積とされる黄色土が早期から晩期の遺構埋土、包含層になることが多い。本遺跡でも注意する必要がある。弥生時代では図示した760の他は可能性がある底部2点のみである。野芥遺跡南部での検出例は少なく、22次、4次調査で中期の土坑などが確認されているが密度は低い。

古墳時代 5世紀代のSC105が最も古い。ただし今のところ周辺に同時期の遺構は見られず、継続しない。その後に現れるのが1号墳である。石室出土のⅢa期の須恵器がまとまり、油山裾の古墳群に先立つ6世紀中頃に築かれる。2号墳は周溝のみの確認だが、1号墳と同規模での立地からも近い時期に築かれたと考えられる。2基が並ぶ調査区南端は、図82のように南側の前田池からの小谷と、調査区下面の北西への緩傾斜に挟まれた緩やかな尾根状にある。その北西側延長にはさらに古墳が存在する可能性があろう。南東に位置する山崎古墳群とは時期、立地が離れており、別の古墳群として認識できる。ところで「筑前国統風土記」には野芥村南長林に鬼塚25基の記述がある。長林の位置がわからないが、その数を考えると今回の古墳よりも油山寄りの古墳群のことと思われる。また図82の鴻ノ巣池の下の字名が塚原であるが谷状の地形にある。古墳があるとすれば池の北の丘陵上、または今回の古墳を示す可能性はないだろうか。本調査地点の字は前田である。また、昭和5年7月2日に田隈から梅林を踏査した浅田芳郎(注1)が、山裾に群集する古墳の石材が馬力に運び去られる様子を描写している。1号墳の石室は2枚以上の水田耕作土層に覆われており、近代以前に破壊されたものと考えられ直接は該当しないであろう。2号墳は現在の床土直下であり可能性はある。ちなみに浅田が掲載した古墳の写真が西油山古墳群Ⅰ号墳であることが調査中にわかった。古墳の石室天井部が、当時と変わらない様子で現在も露出している。

古墳時代集落 下面で検出した遺構のほとんどが小田Ⅳ期の集落に関わる遺構である。堅穴建物が10棟と、他に可能性があるものが3基ある。遺構の遺物は埋土出土がほとんどで堅穴の時期の確定はできないが、Ⅳa期の壺が出土するものが多く、6世紀末から7世紀前半に求められよう。その中でSC018はビットの遺物からⅢb期、SC053、072はⅣbに下るものと思われる。掘立柱建物は総柱建物5棟を想定したが、SB111、115は並びが悪く、116は隅の柱穴を欠き不確かである。時期は遺構埋土中のわずかな遺物からではあるが、Ⅳ期が想定される。周辺の調査では1、2、4、18、20、21次調査で6世紀後半から7世紀初めの堅穴建物が、2、22次では総柱建物が確認されており、油山裾の緩斜面に一斉に集落が広がる。西油山の古墳群と時期を同じくし、無関係ではないだろう。一世代前に築かれた古墳周囲に住まいし、これを祀り新たな古墳を造営した様子が想定される。

ここで遺構面について再度触れたい。下面遺構は6・7層を除去した面での確認であり、西壁土層でも堅穴の掘り込みを6層が覆っている。この関係から7世紀前半までの遺構は6層の堆積以前が想定される。ただし上層で確認したSX050・051、SK049では7世紀中頃の遺物が出土しており、把握できていない6・7層の古い堆積があるか、この時期に6・7層の堆積があったと考えられる。いずれにしても次に遺構がみられるのは6層上面の8世紀の製鉄炉であり、それまでに6・7層が堆積するイベントが生じたことになる。

このほか遺物ではSC072カマドから出土した都城系の土師器坏の出土が注意される。

製鉄関連遺構 4基のいわゆる鉄アレイ型の製鉄炉を確認した。平野から丘陵に突き当たり、水場も近い典型的な製鉄遺構の立地である。時期は遺構出土遺物と、近接し鉄滓が多く出土するSD001の遺物から8世紀代が求められる。SD001の遺物に幅があり細かな時期は特定しがたい。鉄滓はSD001上流の3区でも出土しており別の製鉄遺構の存在が予想される。早良平野では金武、乙石、東入部遺跡などで8世紀の製鉄炉が確認されており、これに連なる遺構である。また本文では遺構出土の鉄滓について記した。鉄滓は下層検出遺構でも調査区全体に分布し、古墳周溝の内側が空白であるくらいである。ただしほとんどが100g以下の少量で、堅穴建物のものは混じり込みと考えられる。ただし鉄滓の詳細な確認はしておらず、鍛冶などに伴う可能性もある。また羽口の出土は少ない。SD001出土の197-200とSC072の551の他はピット3基から小片、検出面で小片7個である。

SD001 8世紀を主体とした遺物を出土し、主に粗砂を埋土とする溝で、本文中で3区では複数の流れの重なりがあること、1区検出のSD001とは底の標高に差があることを記した。現在でも丘陵の裾をコンクリートで囲まれた水路が流れている。図82には水路とこれに沿った田がみられ、ある程度の幅のある低い地形が確認できる。流れは上流から北西に向かう谷から調査区の南東部分で北へ方向を変えている。やや不自然な方向の変化は前田池東側の尾根が19次地点へ延びていることによるのであろうか。そうであれば、自然の河川の流れであり、3区ではその一時期を001として確認したことになる。1区のSD001は図の流れの方向からは外れており、自然流路からの人工的な分流の可能性も考えたい。ただし3区と1区で遺物が接合した62の例もあり可能性に留める。3区では瓦が特に3-1区で目立って出土した。ここでは122、123のような土師器の坏もあり、9世紀代の時期を考えておきたい。周辺に瓦を葺く建物のがあった可能性もあるが、瓦窯の存在も想定できる。



図82 調査地点位置図（1/4000）昭和30年代

古代・中世の遺構 その他の上面検出土坑は黒色土器が出土したSK035、1622が10世紀代である他は、瓦器が出土する12世紀はじめの遺構である。ピットは南北方向にならび建物になりそうなものもあるが規模は大きくなない。その中でSK040の瓦器だまりは突出した存在である。

これ以降はわずかな輸入陶器などはあるが遺構は見られない。ある時期から水田化が進み、いつしか1号墳も壊され、現代の水田が広がる緩斜面の景観が作られた。

注1) 浅田芳郎 1932 筑前考古遊記(一)「福岡」No.58 東西文化社

2 出土鉄滓に関して

野芥遺跡第19次調査において、「鉄アレイ」型の製錬炉が4基検出されており、排滓坑や周辺から鉄滓が出土した。また製錬炉のすぐ東側の河川と考えられるSD001からも鉄滓が出土している。今回これら鉄滓を実見し、鉄滓の種類ごとに分類を行った。

今回、鉄滓を「炉底塊」、「炉内滓」、「流动滓」、「流出滓」、「炉壁付滓」に分類した(表)。炉底塊は各製錬炉及びSD001から出土しているが、出土量はSD001が最も多い。おそらく各炉から生成された炉底塊をSD001に捨てているものと考えられる。炉底塊自体は非常に重量がある。また一部には炉のコーナー部分が残っていたが、炉の大きさまではわからなかった。また各製錬炉の炉底塊の出土位置を見ると、SR005は東側土坑に、SR006・SR009・SR010は西側土坑に偏っている。これは操業後に炉を破壊し、炉底塊や生成された鉄塊を取り出す方向がそれぞれの炉で決まっていたものと考えられる。炉内滓及び流动滓の出土量が多い。炉内滓には木炭などが絡んでおり、ガラス質化しているものが多い。

今回の特筆すべき点としては、流出滓が他の遺跡と比べて非常に少ないとある。滓自体も緻密で重量感はあるが、小ぶりのものがほとんどである。鉄を生産する際は必ず鉄滓ができ、またそれを炉外へ流す必要がある。そのため流出滓はそれなりに出土してもいいと考えられるが、19次調査では明らかに少ない。近接するSD001に捨てたとも考えられるが、SD001からの流出滓の出土も少ないとともと流出滓が少ない操業であった可能性もある。

出土鉄滓の中には炉壁がついていたものもあり、その観察からスサや白色砂などの混入が見られた。鉄滓は多くがガラス質化している。ブロック状に炉壁を成形していたと思われる痕跡もあった。

今回確認された野芥遺跡を含む旧早良郡内では、これまで確認されている製錬炉は1遺跡1~数基程度であり、出土した鉄滓量から小規模の操業が行われていたと想定される。一方で旧早良郡内では鍛冶関連遺物の出土が多く、おそらく鍛冶作業に重点をおいた生産体制を取っていた可能性がある。第19次調査も同様の生産体制で行われていたものと考えられる。

【参考文献】

穴澤義功2005「用語解説(1)」「鉄関連遺物の分析評価に関する研究報告・鉄関連遺物の発掘・整理から分析調査・保存まで」(社)日本鉄鋼協会

長家伸2001「3.九州の鉄生産について」「我が国初の一貫製鉄所操業開始100年記念公開シンポジウム」(社)日本鉄鋼協会

各遺構からの鉄滓出土量(単位:個)

	炉底塊	炉内滓	流动滓	流出滓	炉壁付滓
SD001	31	多量	58	9	47
005西側土坑	0	168	99	12	13
005東側土坑	5	多量	51	6	3
006西側土坑	8	多量	55	10	2
006東側土坑	1	82	39	0	1
009西側土坑	4	多量	7	5	2
009東側土坑	0	11	3	0	2
010西側土坑	3	140	66	16	2
010東側土坑	0	15	45	55	8
010炉床	0	39	0	0	0

附編 野芥遺跡19次調査出土ガラス小玉の保存科学的調査について

福岡市埋蔵文化財センター 藤崎彩乃

1. 調査の目的

野芥遺跡19次調査出土のガラス製品を対象に、非破壊手法による保存科学的調査を実施した。資料は赤褐色不透明の小玉1点で最大長3mm、半分欠損した状態である。

今回は資料の製作技法と材質を特定することを目的に、顕微鏡観察及び定性分析を行った。

2. 調査の方法

製作技法の特定には実体顕微鏡とデジタルマイクロスコープを、材質の特定には蛍光X線分析装置を使用した。

分析前処理として、実体顕微鏡を用いて考古学的に必要な付着物の有無を確認したのち、資料を純水でクリーニングした。材質の組成が不均一な状態であることを考慮し、測定箇所は2箇所とした。調査に使用した機器と分析条件は以下のとおりである。

- ・実体顕微鏡 ZEISS Stemi 305
- ・デジタルマイクロスコープ HIROX KH-8700
- ・エネルギー分散型微小部用蛍光X線装置 (HITACHI EA6000VX)
 - 対陰極：ロジウム (Rh) / 検出器：マルチカソード検出器 / 印加電圧：15, 30, 50kV
 - 印加電流 $1000\mu\text{A}$ / 測定空気：Heバージ / 測定範囲： $0.5\text{mm}\Phi$ / 測定時間：180秒

3. 結果

顕微鏡により資料表面の観察を行ったところ、不透明であるため気泡は見られなかったが、孔と平行方向に黒い筋が幾本も入っており(巻頭写真 16・17 参照)、引き延ばし管切り技法によって製作されたものと推定される(小瀬 1987)。

定性分析では、主成分であるケイ素(Si)をはじめ、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、銅(Cu)、鉛(Pb)、スズ(Sn)、ストロンチウム(Sr)、ジルコニウム(Zr)などの元素が検出された(図1、図2)。ナトリウムは検出されなかったが、カルシウムのピークが高いことから、ソーダ石灰ガラスと推定した。ナトリウムは風化により成分が消失した可能性も考えられる。アルミニウムのピークは明瞭だが微弱であり、今回は定量値を算出していなかったため、含有量の多寡については判断できなかった。また、銅のピークが強く検出されているが、これは先行研究(肥塚 2003)によれば、赤色の着色が銅コロイドによるものであることが指摘されており、着色剤によるものと考えられる。

外観の特徴や分析で得られたスペクトル図から、本資料はインド・パシフィックビーズのムチサラと推定した。ムチサラについては先行研究がなされているが(大賀 2001、肥塚ほか 2002、関ほか 2016)、詳述されている特徴や分析結果に本資料も類似している。

ムチサラは紀元前3世紀から紀元後3世紀にかけてインド及び東南アジアで生産され、日本へ伝來したと考えられている。日本においては弥生時代後期の北部九州で出土し始め、古墳時代前期に一旦途絶え、古墳時代中期・後期前葉になると再び流通していたことが確認されている。本資料の出土遺構の年代は古墳時代後期(6世紀中頃)と推定されており、ムチサラが多量に流通していた時期のものであると考えられる。

4. おわりに

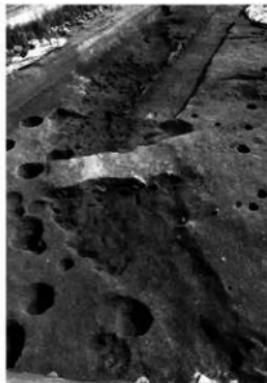
福岡市内では南八幡遺跡第9次調査や西新町遺跡14次調査などを始め、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての複数の遺跡から、赤褐色不透明のガラス小玉が合わせて十数点発見されている。

いずれもセンターにて収蔵保管しており、未分析の状態である。本調査において資料を肉眼・顕微鏡で観察し比較したところ、すべて同様の特徴を持っており、いずれもムチサラである可能性が高いと見ている。また、色調において本資料はやや黒味が強い印象を受けた。製作時すでにその色調であったのか、それとも経年により変色したのか現状は判断できない。今回は時間の都合上行うことができなかつたが、今後は既存資料の分析も行い、時期差・地域差によって成分が異なるのか、また成分の違いや含有量によって色調に影響があるのか否か、比較検討していきたい。

なお、今回の調査にあたっては福岡市文化財活用課比佐陽一郎氏のご教示・ご助言をいただいた。

【参考文献】

- ・大賀克彦 2001「4. インド洋の紅い風 mutisalah beadsの東伝」『ガラスのささやき 古代出雲のガラスを中心に』平成13年度企画展「古代の技術を考える」島根県立八雲立つ風土記の丘
- ・小瀬康行 1987「管切り技法による小玉の成形」『考古学雑誌』第73巻 第2号
- ・肥塚隆康・大賀克彦・比佐陽一郎・高妻洋成 2002「弥生・古墳時代のMutisalahに関する考古学研究」『日本文化財学会第19大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会
- ・肥塚隆康 2003「日本出土ガラスの考古科学的研究 -古代ガラス材質とその歴史的変遷-」『考古科学の総合的研究 研究成果報告書』奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター
- ・間 晃史・中村晋也 2016「石川県内遺跡出土ガラス資料の自然科学的研究① -材質・製作技法からみたガラス資料の再検討-」『石川県埋蔵文化財情報』第35号 石川県埋蔵文化財センター
- ・比佐陽一郎・片多雅樹・北村幸子・肥塚隆康 2000「南八幡遺跡9次調査出土ガラス及び暗赤色小塊物質の保存科学的調査について」『南八幡遺跡5』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第641集 福岡市教育員会
- ・比佐陽一郎 2005「第4節 西新町遺跡14次調査出土ガラス小玉の調査」『西新町遺跡VI』福岡県文化財調査報告書 第200集



1 1区SD001
北西から



2 SD001北壁土層



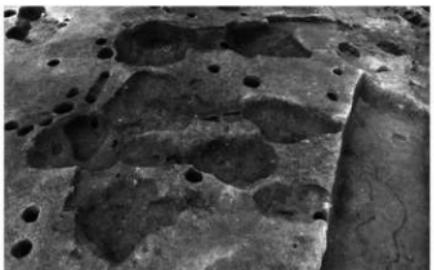
3 3区SD001 北から



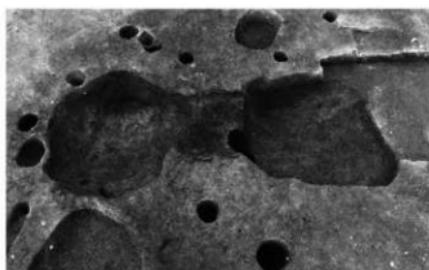
4 3区SD001作業 北から



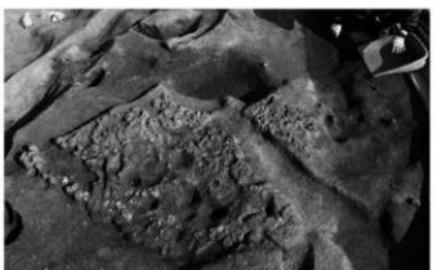
5 3区SD001 南東から



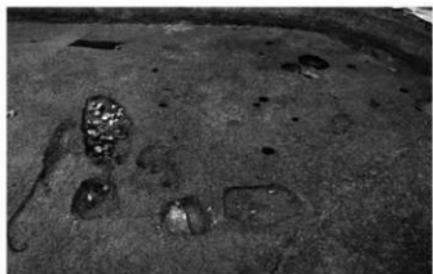
6 製鉄炉全景 南から



7 SR010 南から



8 SX097 北西から



9 2区上面 東から



10 SK035 南から



11 SK039 北から



12 SK049土層 西から



13 SK040 北から



14 SK040下部 南から



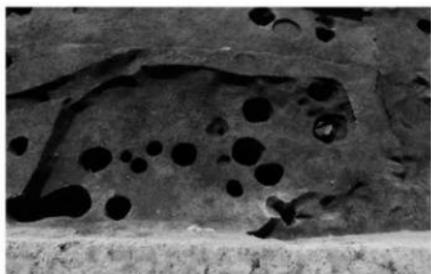
15 SX051 西から



16 1区下面全景 北東から



17 1区北半 SC019-021 西から



18 SC018 東から



19 SC021 東から



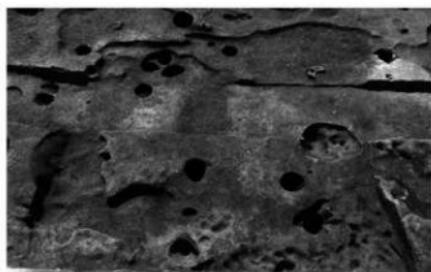
20 SC021 東から



21 SC021 東から 床撤去後



22 SC021カマド 東から



23 SC022 東から



24 SC022 炉1土層 南から



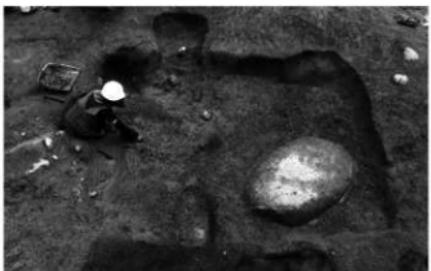
25 SC030 東から



26 2区下面南側 北東から



27 2区SC072を中心に 東から



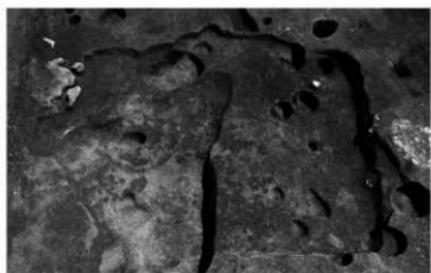
28 SC053 北から



29 SC053カマド 北から



30 SC059 西から



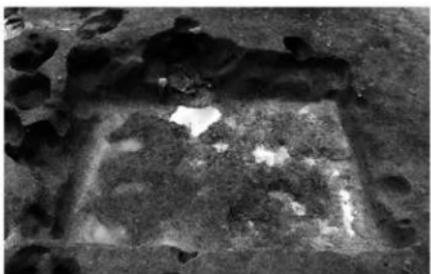
31 SC060-SX065 南から



32 SC062 西から



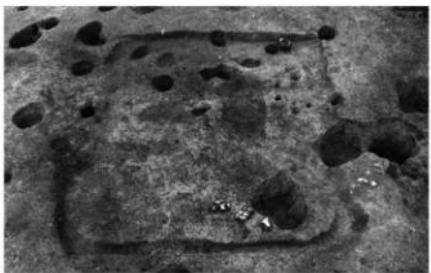
33 SC062西壁土層 東から



34 SC072 北から



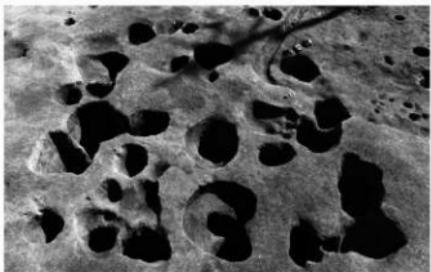
35 SC072カマド 北から



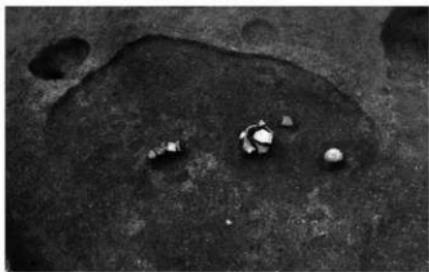
36 SC105 南東から



37 SB034 南から



38 SB111 北から



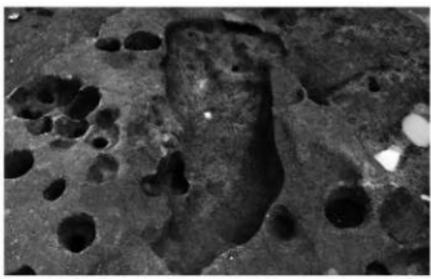
39 SK016 南東から



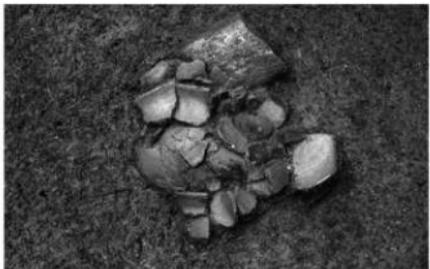
40 SK026 東から



41 SK058 北西から



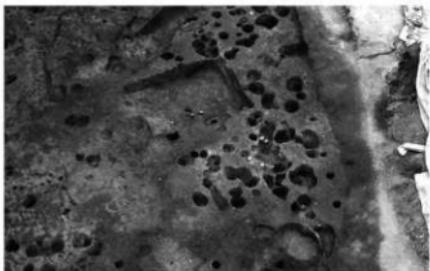
42 SK073 北東から



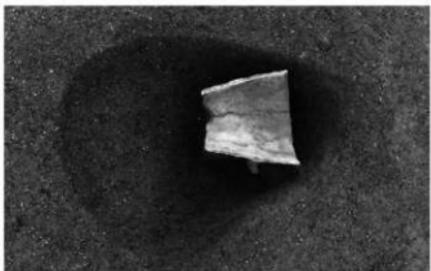
43 SK073 土師器甕661 南西から



44 1区北東隅 北西から



45 SC072を中心ピット集中 南から



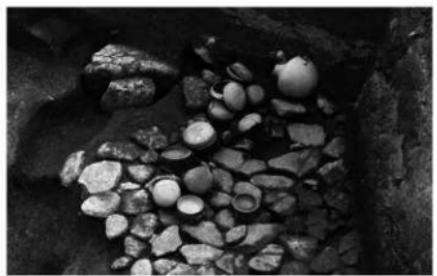
46 SP1469 瓶721 西から



47 1号墳全景 東から



48 1号墳周溝南端遺物 北東から



49 1号墳石室出土須恵器 北から



50 1号墳石室出土須恵器 北東から



51 1号墳石室出土須恵器676-683 北東から



52 1号墳石室 東から



53 1号墳石室南壁 北から



54 2号墳周溝検出時 北東から



55 2号墳周溝土器群 1、2 北から



56 2号墳周溝 東から

報告書抄録

ふりがな	のけいせき 8							
書名	野芥遺跡 8							
副書名	野芥遺跡第19次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1447集							
編著者名	池田祐司							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2022年3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード		(世界測地系)		調査期間	調査面積(m ²)	発掘原因
遺跡名	所在地	市町村	遺跡					
野芥遺跡	早良区野芥五丁目 387番1-388番3、 388番15	40137	319	33.537091	130.347421	20200316 20200923	1385.5m ²	宅地造成 住宅建設
所取遺跡名	所取遺跡名	主な時代		主な遺構		主な遺物		
野芥遺跡第19次	集落・古墳	古墳時代後期、奈良時代、平安時代後期		古墳、堅穴建物、掘立柱建物、製鉄跡		縄文土器・石器、土師器、須恵器、瓦器、鉄滓		
要約	<p>油山塊が平野に接する扇状地図の緩斜面に位置する。東側は丘陵の急斜面に接する。暗褐色粘質土または灰褐色砂質土上で12世紀前半、8世紀の遺構を（上面）、黄褐色粘質土および灰白色砂質土上で古墳時代後期の古墳、集落遺構（下面）を確認した。遺構面は北西へ向かって下がる。上面では、瓦器を一括廃棄した土坑、ピット、8世紀の製鉄炉4基、東側を流れる河川等を検出した。製鉄炉はいわゆる鉄アレイ型で近接し、一部重なりがみられる。河川からは8世紀の須恵器と鉄滓がまとまって出土し、南東端では瓦片が目立つ。</p> <p>下面では、南側で2基の古墳を確認した。1号墳は周溝と、主体部の敷石と腰石1つが残存するが、敷地外に広がるため全体は確認できない。Ⅲa期の須恵器の壺、壺等がまとまって出土した。2号墳は周溝1/4ほどとの確認で、南側は調査区外へ広がり西側は削平され、主体部は確認できない。集落遺構は堅穴建物10基以上と柱立建物5棟ほどで、3基ではカマドを確認した。Ⅲb期・Ⅳの須恵器が出土している。このほかに、轟式、夜臼式土器片、石鏡・石匙等の石器が出土した。</p>							

野芥遺跡 8

-野芥遺跡第19次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1447集

2022(令和4)年3月24日発行

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 ソウヤマ印刷

〒812-0041 福岡市博多区吉塚4丁目3番18号